

# 福吉丸山遺跡

—(仮称)勝央町工業団地(福吉地区)造成に伴う発掘調査—

1999年3月

---

岡 山 県  
勝央町教育委員会

---

# 福吉丸山遺跡

—(仮称)勝央町工業団地(福吉地区)造成に伴う発掘調査—

巻頭図版 1



丸山遺跡全景(北東より)

## 卷頭図版 2



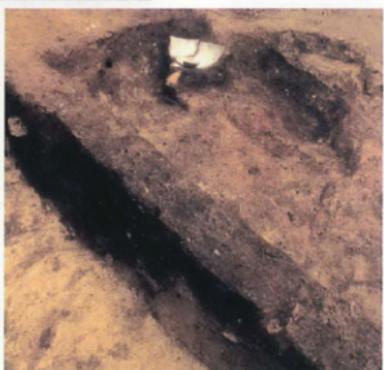
IB、IC区全景  
(南より)



段状遺構 5  
遺物出土状況(西より)



土壙 7 (西より)



土壙 10 (西より)

土器棺 1



竪穴住居 1

調査風景(南より)



竪穴住居 1 カマド内

遺物出土状況(南より)



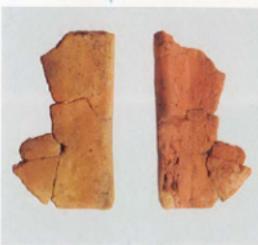
巻頭図版 4



出土須恵器



出土土師器



土鈴



不明土製品(カマド内出土)

## 序

岡山県勝央町は、町の中心部を南北に滝川が流れ、またなだらかな丘陵地帯であることから、古来より人々が住みはじめ、町内には数多くの遺跡が存在し豊かな文化を育んでいます。

近年、県北東部有数の工業団地が相次いで造成され、経済活動の拠点となりつつあります。こうしたなか、西側に新たに工業団地造成の計画が浮上いたしました。計画地には今回報告します福吉丸山遺跡が存在していることからその保護・保存について原因者側と協議を重ねてまいりましたが、現状での保存が困難なため、やむを得ず記録保存の処置をとることになりました。

福吉丸山遺跡では、7世紀の竪穴住居、段状遺構とともに多量の日常の土器が出土し、また、多くの鉄滓、フイゴの羽口などもみられ製鉄に関連した遺跡であることが判明しました。町内では、この時代の集落の調査例はなく町の歴史の空白を埋める重要な成果があげられたものと思われます。

町内においては、昨今の開発のため破壊を余儀なくされた遺跡も決して少なくありません。福吉丸山遺跡もその例に漏れず、記録保存に留まったことは残念되었습니다。

この報告書が、文化財の保護と活用に広く利用され、また調査機関・各研究方面においてその一助ともなれば幸いに存じます。

調査にあたっては、多岐に渡りまして様々にご尽力をいただきました地元の方々、および発掘調査に参加していただいた方々をはじめ、関係者の皆様、岡山県教育庁文化課、特に株式会社鴻池組広島支店の皆様には多大なるご理解とご協力を頂きました。心より御礼申し上げます。

平成11年3月31日

勝央町教育委員会

教育長 光 鳴 三 郎

## 例　　言

1. 本書は、岡山県勝田郡勝央町福吉地内に所在する福吉丸山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、(仮称) 勝央町工業団地(福吉地区)造成に伴うもので、株式会社鴻池組広島支店の委託を受けて、勝央町教育委員会が平成9・10年に発掘調査、平成10年に整理、報告書作成作業を実施したものである。
3. 調査に要した直接的経費は、原作者である株式会社鴻池組広島支店が全額負担した。
4. 全面発掘調査は、大平台株式会社に作業委託をかわして実施した。
5. 調査および本書の執筆編集は、勝央町教育委員会社会教育課　園　正雄が担当した。
6. 本報告にかかる遺物・写真・図面は勝央町教育委員会で保管している。
7. 本書の作成にあたり、現地調査および整理作業時に関係各機関をはじめ、多くの方々に有益なご教示、ご指導を賜ったことに感謝の意を表します。
8. 発掘調査に際して以下の方々のご協力を頂きました。記して感謝の意を表します。

発掘調査：芦木治郎・大谷 寛・影山次郎・片田 紗・神尾たつ子・小林慎一・鶴津洋一・  
末田忠男・高田武夫・竹内兼代・竹久伸二・中島孝城・藤木四郎・本郷 繁・  
山本隆子・山本秀子・山本睦子・山本行彦

整理作業：竹内ひとみ・中島三恵子・森本敦子

## 凡　　例

1. 本書に示す標高値は東京湾標準潮位(T.P.)を基とし、方位は磁北を指す。
2. 本書に掲載した遺構は、段状遺構、土壙などの種別ごとに通し番号を付けている。また遺物についても、土器、石製品、金属製品にわけて通し番号を付け、土器以外については、下記を番号の前に付している。
3. 石器・石製品：S　　金属製品：M
4. 本書における須恵器杯類の型式名称は、奈良国立文化財研究所で使用されているものを用いる。
5. 本書における遺構および遺物実測図(基本的に1/3縮尺)の縮尺については明記して縮尺を示し、遺構の土色名、土器觀察表における色調は、新版標準土色帳(1988年版)(農林水産省・農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修)によっている。

## 本文目次

第1章 発掘調査の経緯と経過.....	1
第1節 調査にいたる経緯.....	1
第2節 発掘調査の経過.....	2
第3節 調査の体制.....	3
第2章 遺跡の位置と環境.....	4
第3章 発掘調査の概要.....	7
第1節 調査の方法.....	7
第2節 調査の概要.....	7
第3節 一次調査の概要.....	8
1. IA区の概要.....	8
(1) 段状遺構.....	11
(2) 土壙.....	12
(3) 渕.....	14
2. IB区の概要.....	14
(1) 段状遺構.....	15
(2) 土壙.....	23
(3) その他.....	23
3. IC区の概要.....	23
(1) 段状遺構.....	24
(2) 土壙.....	39
(3) 渕.....	44
(4) その他.....	44
第4節 二次調査の概要.....	46
1. II A区の概要.....	47
(1) 土器館.....	47
(2) 段状遺構.....	47
(3) 柱穴列.....	50
(4) 土壙.....	50
(5) その他.....	52
2. II B区の概要.....	55
(1) 堪穴住居.....	55
(2) 段状遺構.....	61
(3) 土壙.....	67
(4) 柱穴.....	72
(5) 土器だまり.....	72
(6) その他.....	72
第4章 まとめ.....	78
第1節 出土須恵器の検討.....	78
第2節 集落の検討.....	82
第3節 総括.....	84

## 挿入目次

第1図 工業団地造成計画平面図	1	第38図 段状遺構7出土遺物(6)	32
第2図 遺跡位置図	4	第39図 段状遺構8	33
第3図 勝央町遺跡分布図	5	第40図 段状遺構8出土遺物(1)	34
第4図 調査区位置図	7	第41図 段状遺構8出土遺物(2)	35
第5図 I A区遺構全体図	8	第42図 段状遺構8出土遺物(3)	36
第6図 丸山遺跡遺構全体図	9・10	第43図 段状遺構9	37
第7図 段状遺構1	11	第44図 段状遺構9出土遺物	38
第8図 段状遺構2	11	第45図 段状遺構10	39
第9図 段状遺構3	12	第46図 土壙8	39
第10図 段状遺構3出土遺物	12	第47図 段状遺構10出土遺物(1)	40
第11図 土壙1	12	第48図 段状遺構10出土遺物(2)	41
第12図 土壙2	13	第49図 土壙9・出土遺物	42
第13図 土壙3	13	第50図 土壙10・土壙11	43
第14図 土壙4	13	第51図 土壙10出土遺物	43
第15図 土壙5	14	第52図 潟2	44
第16図 土壙6	14	第53図 I C区黒ボク層出土遺物	44
第17図 潟1	14	第54図 切池採集遺物	45
第18図 I B区遺構全体図	15	第55図 II A区遺構全体図	46
第19図 段状遺構4	15	第56図 II A区土層断面図	46
第20図 段状遺構4出土遺物(1)	16	第57図 土器柄1・出土骨蔵器	47
第21図 段状遺構4出土遺物(2)	17	第58図 段状遺構11	48
第22図 段状遺構5	18	第59図 段状遺構11出土遺物	49
第23図 段状遺構5出土遺物(1)	19	第60図 柱穴列1	50
第24図 段状遺構5出土遺物(2)	20	第61図 土壙12	50
第25図 段状遺構5出土遺物(3)	21	第62図 土壙13	50
第26図 段状遺構6	22	第63図 土壙14	51
第27図 段状遺構6出土遺物	22	第64図 土壙15	51
第28図 土壙7	23	第65図 土壙16	52
第29図 I B区出土遺物	23	第66図 土壙17	52
第30図 I C区遺構全体図	24	第67図 土壙18	52
第31図 I C区土層断面図	25	第68図 II A区黒ボク層出土遺物	53
第32図 段状遺構7	26	第69図 II A区確認トレンチ出土遺物	54
第33図 段状遺構7出土遺物(1)	27	第70図 II B区遺構全体図	55
第34図 段状遺構7出土遺物(2)	28	第71図 II B区土層断面図	55
第35図 段状遺構7出土遺物(3)	29	第72図 堪穴住居1	56
第36図 段状遺構7出土遺物(4)	30	第73図 堪穴住居1遺物出土状況	57
第37図 段状遺構7出土遺物(5)	31	第74図 堪穴住居1出土遺物(1)	58

第75図	竪穴住居1出土遺物(2).....	59
第76図	竪穴住居1出土遺物(3).....	60
第77図	竪穴住居1出土遺物(4).....	61
第78図	段状遺構12.....	62
第79図	段状遺構12出土遺物.....	63
第80図	段状遺構13.....	64
第81図	段状遺構13出土遺物(1).....	65
第82図	段状遺構13出土遺物(2).....	66
第83図	段状遺構14・出土遺物.....	67
第84図	土壤19.....	68
第85図	土壤20・21.....	69
第86図	土壤20出土遺物.....	69
第87図	土壤21出土遺物.....	70
第88図	土壤22.....	70
第89図	土壤22出土遺物.....	71
第90図	土壤23・24.....	72
第91図	柱穴1・出土遺物.....	72
第92図	II B区土器だまり.....	72
第93図	II B区土器だまり出土遺物.....	73
第94図	II B区黒ボク層出土遺物.....	74
第95図	II B区確認トレンチ出土遺物.....	75
第96図	II B区出土瓦(1).....	75
第97図	II B区出土瓦(2).....	76
第98図	出土鉄滓.....	77
第99図	製鉄関連遺物出土状況.....	83

## 表 目 次

表1	杯類口径分布表.....	79
表2	杯類変遷表.....	80
表3	他遺跡との併行関係.....	81
	遺構一覧表.....	87
	遺構別出土遺物一覧表.....	89
	I 区出土土器観察表.....	90
	II 区出土土器観察表.....	93
	その他出土遺物観察表.....	95

## 写真図版目次

図版1	I A区全景(北より)	
	I B・I C区全景(南より)	
図版2	段状遺構1(東より)	
	段状遺構2(北より)	
	段状遺構3(南より)	
図版3	土壤4(南より)	
	I B区全景(南東より)	
	段状遺構4・5(東より)	
図版4	段状遺構5作業風景(東より)	
	段状遺構5遺物出土状況(南東より)	
	土壤7(南より)	
図版5	段状遺構6(東より)	
	段状遺構6遺物出土状況	
	I C区全景(南より)	
図版6	段状遺構7(西より)	
	段状遺構7遺物出土状況	
	段状遺構8(西より)	
図版7	段状遺構8遺物出土状況	
	段状遺構9(東より)	
	段状遺構10(西より)	
図版8	土壤9・溝2(西より)	
	土壤10・11	
	土壤10堆積状況	
図版9	II A区全景	
	II B区全景	
図版10	II A区全景(西より)	
	段状遺構11(北より)	
	段状遺構11遺物出土状況	
図版11	柱穴列1(西より)	
	土器棺1検出状況(東より)	
	土器棺1完掘状況(南より)	
	土器棺内堆積状況(西より)	
	土壤12(東より)	
	土壤13(南より)	

- 土壙14~17（南より）  
 土壙18（南より）  
 図版12 II B 区全景（東より）  
 壊穴住居1（上空より）  
 壊穴住居1 遺物出土状況（南より）  
 図版13 壊穴住居1 遺物出土状況（東より）  
 壊穴住居1 堆積状況（西より）  
 壊穴住居1 内カマド（西より）  
 図版14 段状遺構12（東より）  
 段状遺構12鉄錆出土状況  
 段状遺構13（北東より）  
 図版15 段状遺構13遺物出土状況（北より）  
 段状遺構14（北東より）  
 土壙20検出状況（北より）  
 図版16 土壙21（東より）  
 土壙22検出状況（東より）  
 土壙22完掘状況（北東より）  
 図版17 柱穴1（北より）  
 II B 区土器だまり（北より）  
 調査風景  
 図版18 段状遺構1出土土器  
 段状遺構4出土土器  
 図版19 段状遺構5出土土器（1）  
 図版20 段状遺構5出土土器（2）  
 段状遺構6出土土器  
 I B 区出土土器  
 段状遺構7出土土器（1）  
 図版21 段状遺構7出土土器（2）  
 図版22 段状遺構7出土土器（3）  
 図版23 段状遺構7出土土器（4）  
 段状遺構7出土 フイゴの羽口、  
 鉄錆、石製品
- 段状遺構8出土土器（1）  
 図版24 段状遺構8出土土器（2）  
 段状遺構9出土土器（1）  
 図版25 段状遺構9出土土器（2）  
 段状遺構10出土土器（1）  
 図版26 段状遺構10出土土器（2）  
 土壙9出土土器  
 土壙10出土土器  
 I C 区黒ボク層出土土器  
 図版27 切泡採集遺物  
 土器棺1出土土器  
 段状遺構11出土土器  
 図版28 II A 区黒ボク層出土土器  
 II A 区確認トレ13・14出土土器  
 図版29 壊穴住居1出土土器  
 図版30 壊穴住居1出土土製品  
 段状遺構12出土土器  
 段状遺構13出土土器（1）  
 図版31 段状遺構13出土土器（2）、石製品  
 段状遺構14出土土器  
 土壙20出土土器  
 図版32 土壙21出土土器  
 柱穴1出土土器  
 土壙22出土土器  
 II B 区土器だまり出土土器（1）  
 図版33 II B 区土器だまり出土土器（2）  
 II B 区黒ボク層出土土器  
 II B 区確認トレ15出土土器  
 図版34 II B 区出土瓦（1）  
 図版35 II B 区出土瓦（2）  
 土器底部・天井部調整

## 第1章 発掘調査の経緯と経過

### 第1節 調査にいたる経緯

勝央町では、町の中央部を東西に中国自動車道が縦断し、早くから工場公園が造成され、現在にいたるまでに3つの工業団地が造成され、岡山県北東部の内陸工業基地において大きな役割を担っている地域である。

株式会社鴻池組広島支店により、これら3つの工業団地の西側、勝央町福吉地区に新しい工業団地の造成が計画された。工業団地の造成予定面積は27haにも及ぶ大規模なものであった。

造成予定区域には、丸山遺跡（遺跡番号177）が周知の埋蔵文化財包蔵地として存在していたが、造成予定面積の広さから他にも未確認の遺跡の存在が予想されるため、造成区域内の分布調査を行う必要があった。勝央町教育委員会では、平成7年度の段階で専門職員を採用していなかったため、岡山県教育庁文化課の協力を得て、平成7年4月に造成区域内の分布調査を実施した。周知の丸山遺跡では、今回、発掘調査を行った南にのびる2つの丘陵の周辺谷部から土器片が採集され、改めて遺跡の存在が確認ができ、それ以外の造成区域では、古墳等は確認できないが、立木、雑草を伐採後に再度確認する必要がある旨を事業者あてに報告した。その後、平成8年12月に、勝央町教育委員会、岡山県教育委員会、株式会社鴻池



第1図 工業団地造成計画平面図

組広島支店の3者で文化財保護に関する覚書を締結し、平成9年3月には、分布調査の結果を基に、岡山県教育庁文化課の協力を得て確認調査を実施した。確認調査は、工事用道路の進入路を優先させ東丘陵の頂部から斜面および、東側の調整池をまず1次調査として行い、進入路予定地の東丘陵の南斜面から頂部に造構、遺物が確認された。そのため、勝央町教育委員会では、専門職員を採用し、進入路の全面発掘調査を平成9年8月から12月まで実施した。そして残った東西2つの丘陵に挟まれる斜面および谷部、その付近の丘陵部の確認調査は進入路部分の全面発掘と並行して、10月から11月にかけて実施した。その結果、東西丘陵にまたがり遺構、遺物が確認されたため平成10年度の春からこの部分の全面発掘調査をおこなう事になった。なお、今回報告する丸山遺跡以外には周知の遺跡は確認されていないが、今後、予定地内の分布調査、確認調査を工事計画にあわせて順次おこなっていく予定である。

## 第2節 発掘調査の経過

### 1. 現地調査

#### (第1次確認調査)

分布調査で遺物が採集された地点である調整池予定地、丘陵尾根頂部から斜面について7本のトレントチを7ヵ所設定した。調査は重機で慎重に掘り下げ、人力で断面、地山面の精査、掘削を行うものである。

調査結果は、調整池には造構は存在しなかった。丘陵尾根では頂部に造成面が存在し、遺物も検出され、また斜面からは、段状造構及びそれに伴う遺物も検出された。

#### (第1次全面発掘調査)

確認調査の結果を基に協議を重ねた結果、東丘陵を横断する進入路予定地は全面調査を行うことになり、平成9年8月7日付で株式会社鴻池組広島支店と発掘調査委託契約を締結し、全面調査を実施した。調査は平成9年12月31日をもって完了した。

#### (第2次確認調査)

第1次確認調査で行っていない部分の、東西丘陵の斜面および谷部、西丘陵の西側、谷を北にあがった東西に長い丘陵等についてトレントチを23ヵ所設定した。このうち、T13では、段状造構、土壙、T14、T15では段状造構が検出され、それに伴って遺物も検出された。このことから、遺跡の範囲は東丘陵全体と西丘陵に及ぶことが確定となった。

#### (第2次全面発掘調査)

確認調査の結果を基に協議を重ねた結果、東丘陵から西丘陵にかけて全面調査を行うことになり、平成10年4月16日付で株式会社鴻池組広島支店と発掘調査委託契約を締結し、全面調査を実施した。調査は平成10年8月12日をもって完了した。

### 2. 報告書作成作業

出土遺物の整理作業は、第1次全面発掘調査後すぐに平成10年1月から開始した。第2次全面発掘調査の期間中も継続して作業をおこなったが、現地調査と併行していたため担当者が整理作業に専念できず作業の進行は遅々としていた。第2次全面調査終了後、2次調査出土遺物も含めて本格的に報告書作成作業にとりかかり、平成11年3月31日に報告書（本書）を刊行した。

### 第3節 調査の体制

福吉丸山遺跡の発掘調査および、報告書作成・整理作業は、教育長 光嶋 三郎のもと勝央町教育委員会社会教育課が行った。

#### 平成9年度調査体制

教 育 長	光嶋三郎	指導員	定兼 充
社会教育課		主 任	竹内祐三
課 長	下山強一	主 事	竹内 司
課長補佐(社会教育係長事務取扱)	山本和子	学芸員	三谷英子
課長補佐(社会体育係長事務取扱)	片山圭介	技師補	園 正雄(調査担当)

#### 平成10年度調査体制 (平成10年4月～12月)

教 育 長	光嶋三郎	指導員	定兼 充
社会教育課		主 任	竹内祐三
課 長	下山強一	主 事	竹内 司
課長補佐	片山圭介	学芸員	三谷英子
係 長	タ	技師補	園 正雄(調査・整理担当)

#### 平成10年度調査体制 (平成11年1月～3月)

教 育 長	光嶋三郎	指導員	定兼 充
社会教育課		主 任	竹内祐三
課 長	森藤 一	主 事	竹内 司
主 幹	山田周二	学芸員	三谷英子
課長補佐(社会教育係長事務取扱)	石川寛次	技師補	園 正雄(調査・整理担当)
課長補佐(社会体育係長事務取扱)	片山圭介		



発掘調査参加者

## 第2章 遺跡の位置と環境

今回調査を行った福吉丸山遺跡は、岡山県勝央郡勝央町福吉に所在する。

勝央町は、岡山県の北東部に位置しており、西に津市、北は勝北町、奈義町、東は勝田町、南は美作町、柏原町に接している。勝央町を含む津山圍城は、津山盆地とこれを取り巻く美作台地、及び北部は中国山脈で形成されている。

勝央町全体は南方に緩やかに傾斜する標高100m～200mの丘陵台地で、北部は、那岐山、滝山などの中国山地を背に受けた奈義町の日本原高原から緩やかな丘陵が起伏した台地を形成し、中南部は、滝山に源を発し、町の中心を南北に流れ吉井川に注ぐ鴨川に沿って比較的平坦な盆地、平野を形成している。

勝央町内には、現在約400カ所の遺跡が確認されている。町北部については詳細な分布調査が行われておらず、さらに増加すると考えられる。

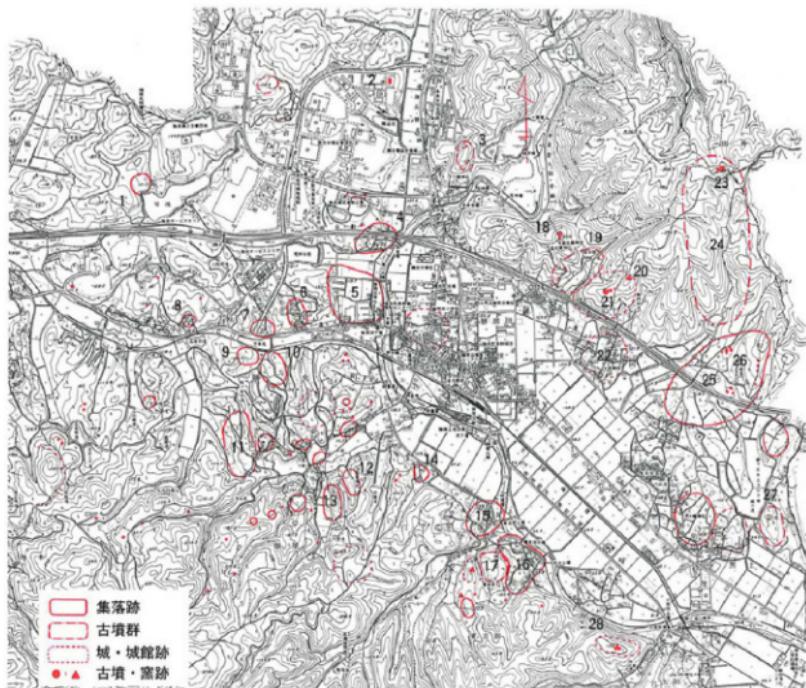
旧石器、縄文時代に属する遺跡は、金鶏塚遺跡である。この遺跡では、縄文時代早期の押型文土器が採集されている。その他には明確なものは確認されていないが、わずかに落し穴等が虫尾遺跡で検出されている<sup>[1]</sup>。

つづく弥生時代には、現在前期に瀕るものは認められず、中期以降の遺跡が展開する。遺跡は主に平野を見下ろすなどらかな丘陵上に点在するのが特徴である。北部では、美野平野を囲む丘陵上に、植月東の弥平治遺跡、美野の能部遺跡が存在し、住居跡等の後期の遺構、遺物が検出されている<sup>[2]</sup>。また植月北の鳥羽野遺跡周辺でも後期の遺構、遺物が存在する。特筆すべきものに植月北の念仏塚遺跡において袈裟棒文銅鐸が出土している<sup>[3]</sup>。正確な出土位置、出土状況は不明であるが、工場建設に先立つ確認調査により後期の遺構、遺物がわずかに検出されていることから、この付近で使用、埋納されたものと考えられる。南部では、勝間田の平野を見下ろす丘陵上に確認されている。岡地区の小中遺跡では、弥生時代中期から後期の大規模な集落が展開している。豊穴住居は約300軒を越え、多数の掘立柱建物、土壙、ピットが検出されている。又、それに伴う土器も多量に出土しており、美作地区の当該期の様相や土器編年を考える上で重要な資料を提供している<sup>[4]</sup>。その他の遺跡では、まとまった調査が無く、時期、範囲等いまだ不明な点が多いが、かなりの数の集落が存在すると思われる。

古墳時代に入ると、北部の美野平野、南部の勝間田平野を見下ろす丘陵に古墳が数多く存在し100基以上確認されている。特に、古墳時代前期には、前方後円墳、前方後方墳が多く築かれる<sup>[5]</sup>。美野平野の西側丘陵には、美作地方最大級の植月寺山古墳（前方後方墳、全長約91m）が存在し、南側丘陵には田井高塚古墳（前方後方墳、約41m）が存在す



第2図 遺跡位置図



- |           |             |              |                |
|-----------|-------------|--------------|----------------|
| 1. 丸山遺跡   | 8. 押田散布地    | 15. 木戸散布地    | 22. 余山筑紫城跡     |
| 2. 愛宕山古墳  | 9. イカウ松散布地  | 16. 覆土居散布地   | 23. 岡高塚古墳      |
| 3. 平古墳群   | 10. 煙ヶ中散布地  | 17. 東光寺義山古墳群 | 24. 岡高塚古墳群     |
| 4. 平遺跡    | 11. 板折散布地   | 18. 琴平山古墳    | 25. 小中遺跡・小中古墳群 |
| 5. 勝間田庵寺  | 12. 池ノ下散布地B | 19. 琴平山麓古墳群  | 26. よつみだわ古墳群   |
| 6. 八幡散布地A | 13. 池ノ下散布地A | 20. 岡城跡      | 27. 丸山古墳群      |
| 7. 八幡散布地B | 14. 笠尾原田散布地 | 21. 同般塚古墳    | 28. 戸倉城        |

第3図 勝央町遺跡分布図

る。東丘陵では、西に舌状にのびる丘陵に、西の宮古墳（前方後方墳、約39m）、美野中塚古墳（前方後方墳、約52m）、美野高塚古墳（前方後方墳、約58m）の3基の古墳が存在し、滝川水系のもと美野平野を中心とする地域的まとまりとしての首長墓の変遷がとらえられる。勝間田平野を見下ろす北側丘陵には、琴平山古墳（前方後円墳、約48m）、殿塚古墳（前方後円墳、約48m）が存在している。さらに、この丘陵の背後には山間が存在し、その最高所には岡高塚古墳（前方後方墳、約50m）が存在する。この位置からは、美野、勝間田平野及び、美作町域まで見渡せるなど、この付近一帯を統括した首長の墓と考えられる。古墳時代中期には、明確な首長墳は確認されておらず前期からの首長系譜が途絶えたように見受けられる。調査例があまりなく不明な点が多いが、わずかに、小矢田の落山古墳（円墳、12m）において上部を粘土で被覆した箱式石棺が見つかっている程度である。古墳時代後期には、町内全域に多数の群集墳が存在し、一部に愛宕山古墳、よつみだわ2号墳などの前方後円墳が築かれる。近年調査された畑の平古墳群では、6世紀末から7世紀にわたり、追葬を繰り返しながら10基あまりの古墳が存在している。横穴式

石室に陶棺を内蔵するなど、美作地域の特徴を示している<sup>(7)</sup>。7世紀から8世紀にかけて古墳の数は減少すると考えられるが、勝央中学校内古墳や、島尾付陶棺が出土した平五反道古墳が一部に存在している。古墳時代の集落はほとんど判明していないが、わずかに住居跡等が確認されている程度である。7世紀代の集落は今回調査した福吉丸山遺跡があたり、わずかながら集落構造が判明した。

古代の遺跡では、勝田郡衙に比定される勝間田廃寺が存在し、谷を挟んで北側にも同時期の公的施設と考えられる平遺跡が存在している。勝間田廃寺は東西又は南北に輪をそろえた大型の掘立柱建物が5棟確認され、礎石建物も確認されている。出土遺物では須恵器、土師器のほかに円面鏡、多量の瓦が出土している<sup>(8)</sup>。平遺跡では、特に奈良時代～平安時代の掘立柱建物が多く検出され、それとともになう鉛治炉も検出されている。出土遺物も須恵器、土師器、灰釉陶器、瓦のほか多くの円面鏡、刺印須恵器や墨書き土器もみられる<sup>(9)</sup>。以上の二つの遺跡は勝間田廃寺を中心にして双方が一帯となる官衙施設と考えられる。その他には、豊久田小字国司造出土の人面墨書き土器、東吉田字津木谷窯出土陶馬、同堂窯出土の轡など、特徴的な遺物が見つかっている。また、町内には古代末から中世にかけて、勝間田盆地周辺に須恵器系の勝間田焼の窯跡が多数認められる。一般に勝間田古窯跡群と呼ばれ、中世須恵器の主生産地として発展したようである。勝間田焼は未だに不明な点が多いが、戸岩窯、進上窯の資料からある程度その動向が伺える<sup>(10)</sup>。

中世以降は考古学的には明確な遺跡は調査されておらず実態は不明である。政治的には室町時代の美作守護職の交替による戦乱、その後の赤松、山名、尼子、毛利の諸勢力の交互侵襲という興亡忙しいなかで、城柵、砦、構等が多く築かれたようであるが、実態は不明であり、今後の研究が期待される分野である。又、豊久田字土居に中世の佐桑一族の鎌倉屋敷の跡が残っている。いまではわずかに堀切りの跡が認められるのみであるが、東西六十五間、南北七十間、東、北、南に巾三間、深さ二間の築地、堀切りがあり、西側には八十間にわたる大堀があったされる。

近世以降は、出雲街道の宿場として勝間田には本陣がおかれて、経済の中心地として栄えたようである。

#### 注

- (1) 近藤義郎「美作金鶴塚発見の押笠文土器」『瀬戸内考古学』第2号 濱戸内考古学会 1958年
- (2) 中野雅美ほか「弦平治・能部遺跡」広域島遺跡作台地区勝央町地内埋蔵文化財発掘調査委員会 1983年
- (3) 近藤義郎「美作植木村念化塚発見の御錆」『吉備考古』83号 吉備考古会 1951年
- (4) 栗野克巳・高畠知功「小中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』7 岡山県教育委員会 1975年  
浅倉秀昭ほか「小中遺跡 白瀧古墳群 小中古墳群 湯ヶ瀬古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』117 岡山県教育委員会 1997年
- (5) 近藤義郎編「前方後円墳集成中國・四国編」1991  
倉林眞砂斗ほか「美作地方における前方後円墳秩序の構造的研究」1998
- (6) 岡田博「落山古墳」勝央町教育委員会 1983年
- (7) 弘田和司ほか「西大沢古墳群 知の平古墳群 虫尾遺跡 黒土中世墓 茂平古墓 茂平城」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』111 岡山県教育委員会 1997年
- (8) 「勝間田遺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財報告』4 岡山県教育委員会 1974年
- (9) 井上弘ほか「平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8 岡山県教育委員会 1975年
- (10) 伊藤亮「窯業」『岡山県の考古学』1987年

#### (その他参考文献)

- 勝央町編『勝央町誌』1984  
木村増夫『勝央今昔淹川のはとり』1978

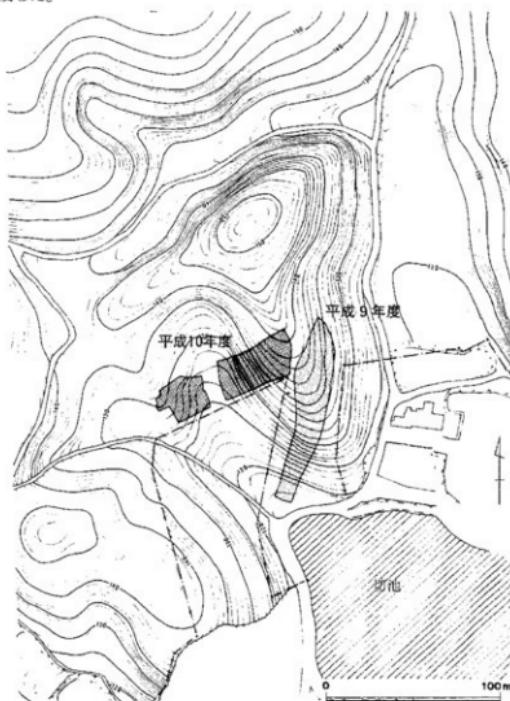
## 第3章 発掘調査の概要

### 第1節 調査の方法

遺跡は、小河川の討川に注ぐ小川の水源である切池の北側、南に張り出した二つの尾根が小谷を挟んで存在し、その頂上部、斜面に存在する。調査は、試掘の結果をもとに、一次調査は工業用地進入路部分である2,000m<sup>2</sup>について、丘陵斜面から頂上部を貫く継長の調査区を設定して行った。二次調査は、造成盛土部分である1,500m<sup>2</sup>について、一次調査の西側、同じ丘陵の頂上部から西斜面、谷を挟んで西側の丘陵頂上まで調査区を設定して行った。調査の方法は、まず重機によって表土、流土を除去し、その後人力によって遺構の検出、掘削を行った。さらに、住居、土壤等の遺構の掘削については土層堆積観察用のベルトを残し、実測、写真撮影等の記録を作成した。図面による記録は、調査区全体に東西南北を軸として10m間隔で基準杭を打ち、それをもとに平板によって1/50縮尺で全体平面図を作成した。個別の遺構については1/20、1/10縮尺によって平面図を作成した。

### 第2節 調査の概要

調査地は、一次調査は、南東に張り出す丘陵の南斜面から頂上部を越えて東斜面に及ぶ範囲を対象とした。掘削前の地形は、東斜面が尾根の頂上部からややきつい斜面地であり、尾根の頂上部は、南になだらかに傾斜し、尾根の突先においては傾斜面を造成し、20m四方の造成平坦面が認められた。平坦面の東には昭和初期の牛舎跡が存在しているが、それとは無関係である。平坦面から南は傾斜のきつい斜面地である。調査区の設定については、調査地が南北に長大なため調査前で判明した丘陵突先の造成平坦面を境目にして、一次調査の略称「I」にアルファベットをつけて、丘陵東斜面・頂上部を I A 区、造成平坦面を I B 区、南面する斜面地を I C 区と呼ぶ。



第4図 調査区位置図

称した。二次調査分については、一次調査と同じ尾根の頂上部から西側の谷を挟んでもう一つ西の丘陵の尾根の頂上部に及ぶ範囲を対象とした。掘削前地形は、尾根の頂上部はなだらかに西に下がっていき次第に急傾斜な斜面になる。そのまま谷部にいたり、丘陵面ではゆるい傾斜な斜面になる。谷を挟んで西側丘陵は、谷との比高差があまりなく頂上部から斜面へゆるい傾斜面である。

調査区の設定については、一次調査と同様に二次調査の略称「II」にアルファベットをつけて、谷をはさんで東側の斜面地を II A、西側を II B と呼称した。(第6図)

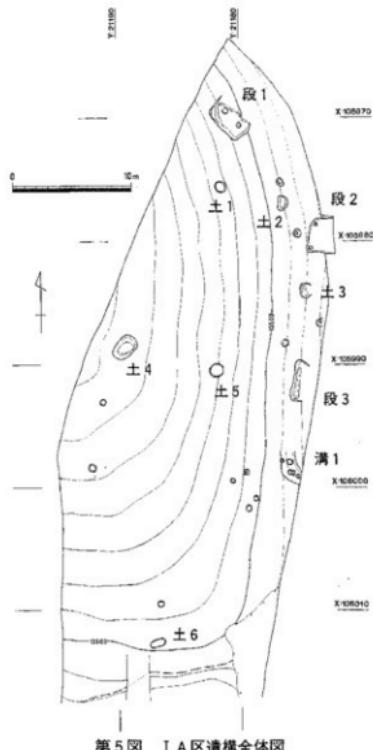
### 第3節 一次調査の概要

調査区全体の基本層序は表土、褐色砂質土(流土)、地山の順である。地山土は、岩盤が露出する部分や黄色、赤色粘砂質土など多様である。特に I A 区丘陵東斜面には厚く流土である褐色砂質土が堆積し、I B 区では造成面上の北側寄りに厚い流土が堆積していた。I C 区の斜面上部では I B 区との境目から旧地表上に人工の盛土が厚く認められ、それ以外では、斜面の傾斜がきついため流土が薄く堆積するのみで表土直下に地山が現れる状況であった。谷部にはいわゆる黒ボク土、及び黒ボク土が流れた土が厚く堆積していた。遺構は I C 区の谷部以外は地表面で検出された。斜面地という地形のため、一部の遺構では遺構埋土と流土の違いの見極めが難しく、検出段階での遺構プランの決定は困難をきわめ、サブトレレンチを掘削して遺構と判断するものも多数存在した。

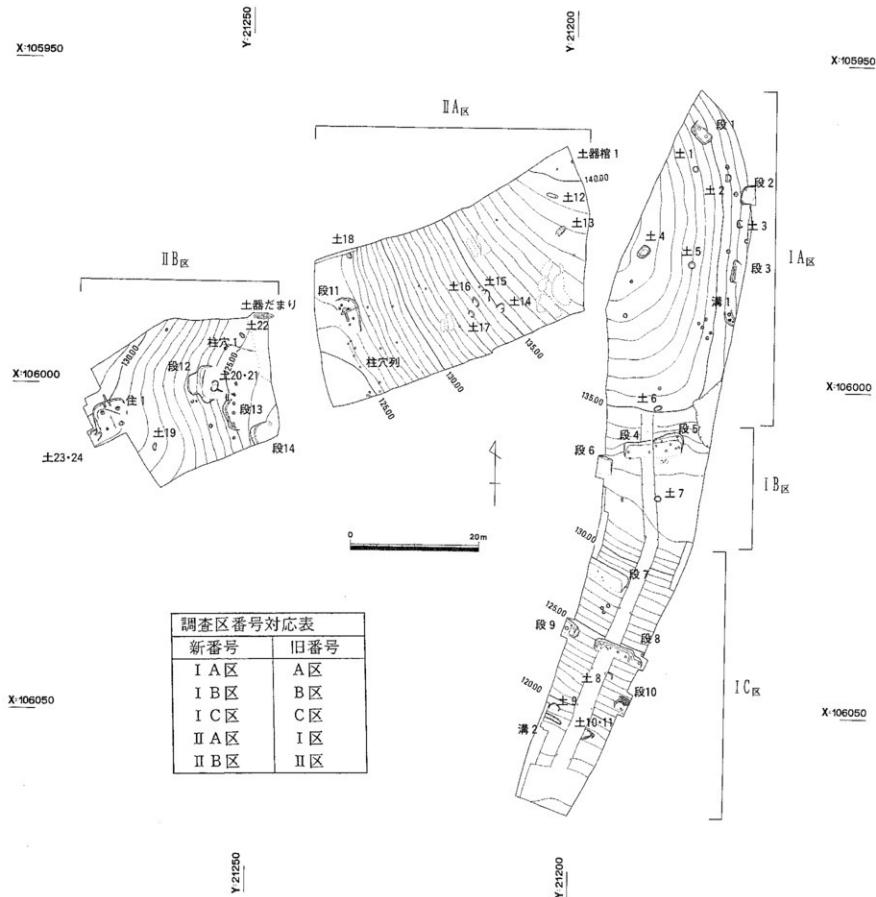
一次調査で検出した遺構は、段状遺構 10 基、土壤 11 基(うち焼土壙 2 基)、溝 2 条、ピット多数である。段状遺構は、柱穴を伴うものから、掘削が不明瞭なもの、規模もさまざまであるが、本報告ではまとめて段状遺構として扱った。遺構は丘陵の斜面に多く認められ、丘陵頂部にはほとんど存在しなかった。明確な段状遺構は I A 区には少なく、丘陵南斜面 I B、I C 区に多く存在し、遺物に関しては I B、I C 区から 9 割以上が出土している。

#### 1. I A 区の概要

遺構は丘陵東斜面の標高 135.00m の等高線より下った位置に多く認められる。丘陵斜面は傾斜がきつく、遺構は丘陵頂部、及び調査区東端の若干傾斜がゆるい所に多く確認できた。段状遺構については、不明瞭なものが多く、遺構の性格が判断しがたいものも含まれる。特徴は、



第5図 I A 区遺構全体図

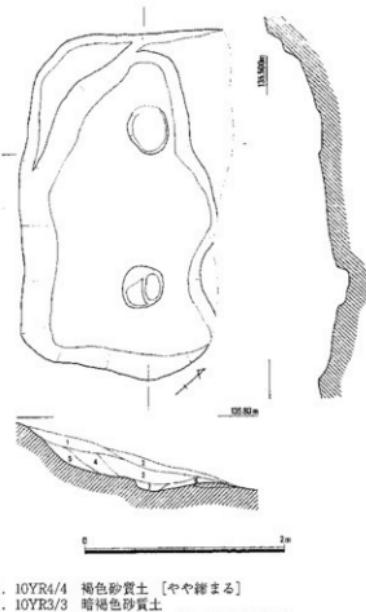


第6図 福吉丸山遺跡遺構全体図

規模が4m足らずの小規模なものがすべてであり、また明確な柱穴を伴わないことがあげられ、遺物もほとんど出土しない。ピットも多く検出したが、まとまらなかった。

段状遺構1（第7図）

IA区の北端、標高135.00m付近に位置する段状遺構である。規模は、長さが3.5m、幅は斜面地のため北東側が流されており、幅2.0mを残すのみで、形状は長方形を呈する。深さは、一番深いところで30cmをかる。床面は南東に向かってゆるくレベルが下がっており平坦でなく、やや不整形な状況である。北東側は、床面から15cmほどレベルが高くなりテラス状になっている。柱穴は床面の一段下がったところから掘り込まれ、2つ確認された。径28cmを計り、柱間は1.6mを計る。深さはあまりないため、主柱穴とするにはやや問題がある。埋土は7層に分層でき、黒褐色砂質土を中心としており、非常に遺構検出がしやすい状態であった。人為的な埋



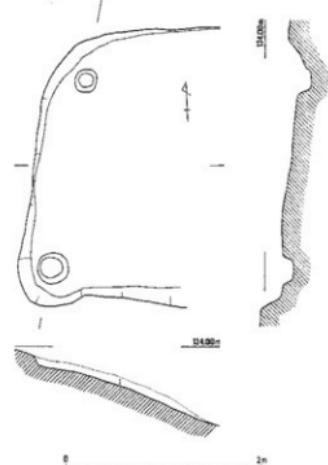
1. 10YR4/4 黒褐色砂質土 [やや締まる]
2. 10YR3/3 暗褐色砂質土
3. 10YR2/2 黒褐色砂質土 [5mm以下の纏合む]
4. 10YR2/3 黒褐色砂質土
5. 10YR5/4 にい 黄褐色砂質土 [やや締まる]
6. 10YR4/3 黒褐色砂質土
7. 10YR3/1 黒褐色砂質土 [5mm以下の纏合む]

第7図 段状遺構1(1/50)

積は見られず、丘陵上部からの流入した堆積状態をしめしていた。土器等は全く出土しなかったが、埋土中から、わずかに木炭片が認められた。

段状遺構2（第8図）

IA区の東端のやや北側、標高133.50m付近に位置する段状遺構である。規模は、長さ2.8m、幅は、確認した範囲で1.90mをかり、いびつな長方形を呈する。遺構の深さは検出面から10cm程度で非常に浅く、床面が傾斜をもって下がっており掘削が不十分な状況をしめしていた。調査区外に平坦面が存在すると考えられる。柱穴は、傾斜をもつ床面から掘り込まれていた。径は20cm程の円形で、深さは10cm程で浅い。これについても主柱穴とするにはやや問題が残る。埋土は、単一層で褐色を呈する砂質土である。土器等の遺物は一切出土しなかった。

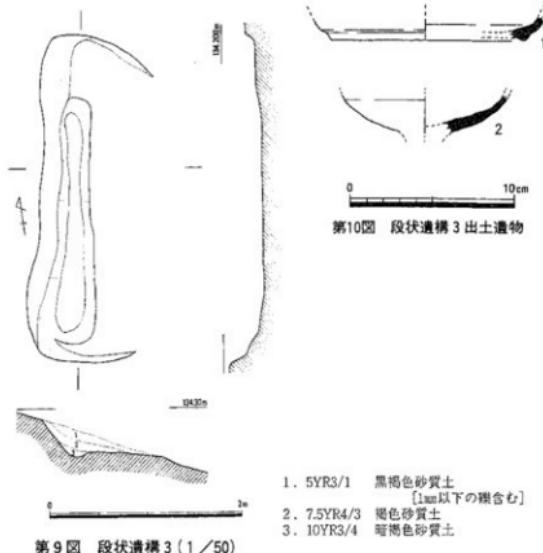


1. 7.5YR4/3 極褐色砂質土

第8図 段状遺構2(1/50)

## 段状遺構3（第9図）

I A区の東端中央、標高134.00mに位置する段状遺構である。規模は、長さ3.4m、幅は東側が流されているため、1.5mを残すのみであり、形状は長方形を呈する。この位置は若干傾斜がゆるくなっている。壁の残りが悪いものの平坦面は広く感じられる。遺構の深さは山側の残りのいいところで30cmをはかり、床面は標高133.80mの高さでほぼ水平である。柱穴は精査を行ったが確認されなかった。周壁溝は奥壁

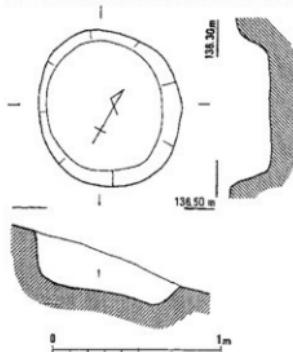


第9図 段状遺構3(1/50)

1. 5YR3/1 黒褐色砂質土  
[1mm以下の顆粒む]
2. 7.5YR4/3 褐色砂質土
3. 10YR3/4 砂褐色砂質土

## 土壤1（第11図）

I A区の北端、標高136.00m付近に位置し、段状遺構1を北に見下ろす。検出された平面形はほぼ正円形で、長軸95cm、短軸87cm、深さは検出面から26cmをはかる。底面は緩い傾斜をもって下がり、底面の高さは標高135.90mである。埋土は1層で、褐色砂質土が堆積していた。遺物等はいっさい出土しなかった。

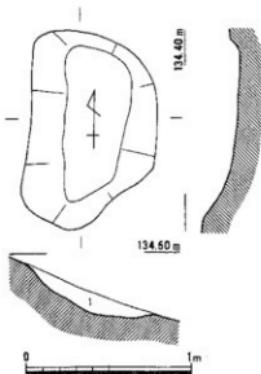
1. 7.5YR4/3 褐色砂質土  
第11図 土壌1(1/30)

## 土壤2（第12図）

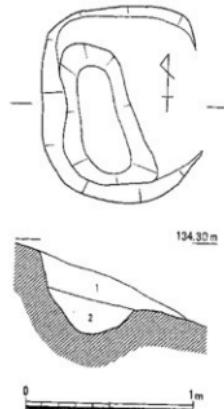
I A区の北端、標高134.50m上に位置し、段状遺構2から北西に3m離れている。平面形は不整な橢円形を呈し、規模は長軸119cm、短軸78cm、深さは検出面から12cmをはかり、やや浅い。断面は皿形であり、下場ははっきりしない。埋土は、褐色砂質土が堆積していた。遺物等はいっさい出土しなかった。

## 土壤3（第13図）

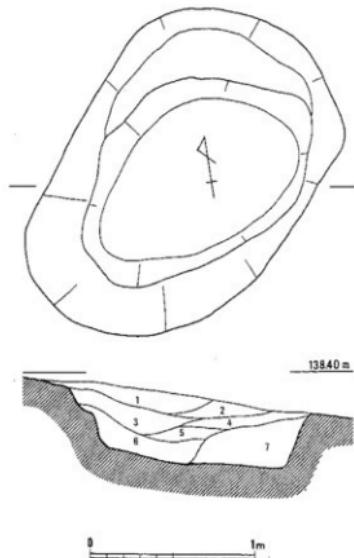
I A区の中央東端、標高134.00m上に位置し、段状遺構2



1. 7.YR4/4 棕色砂質土  
第12図 土壌2(1/30)



1. 7.5YR4/3 棕色砂質土  
2. 7.5YR3/2 黒褐色砂質土  
第13図 土壌3(1/30)



1. 7.5YR5/6 明褐色砂質土  
2. 10YR5/6 黄褐色砂質土  
3. 10YR3/2 黑褐色砂質土  
4. 10YR6/8 明黄褐色砂質土 [5cm以下の礫を含む]  
5. 10YR4/4 褐色砂質土  
6. 10YR4/2 黄褐色砂質土  
7. 7.5YR4/4 棕色砂質土 [5cm以下の礫を含む]  
第14図 土壌4(1/30)

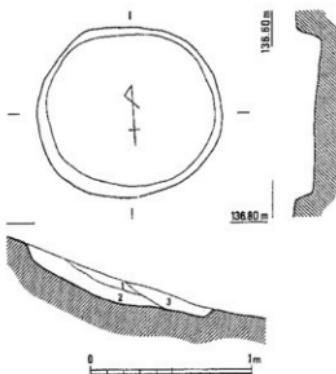
と3の間に存在する。平面形は隅丸方形を呈し、長軸長120cm、短軸長は、東側が流れているが91cmを残す。底部からさらにもう一段掘り込まれ、平面形は梢円形で底部全体の約1/2を占める。埋土は2層に分層でき、褐色土が堆積していた。遺物等はいっさい出土しなかった。

#### 土壤4(第14図)

IA区の中央西端、標高138.00m付近に位置し、一次調査分では一番高所に存在する。平面形は梢円形を呈し、長軸長218cm、短軸長143cm、深さは42cmを計る。底部北側では、5cmほどの比高差があり二段に掘り込まれる。土層断面をみると、7は褐色砂礫土で5cm大の礫が混じりその他の層と土質の違いが明瞭であった。7は埋土であり、断面ではこの層をベースにして一段掘り下げた状況が読み取れ、6より上層は自然な堆積であった。遺物等は全く出土せず、造構の時期、性格は不明である。

#### 土壤5(第15図)

IA区の中央、標高136.50m上に位置し、段状造構3を東に見下ろす。この付近は傾斜が非常にきつ



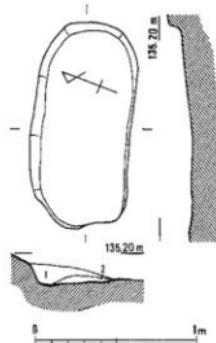
1. 7.5YR4/2 灰褐色砂質土  
2. 7.5YR4/4 棕色砂質土  
3. 10YR5/6 黄褐色砂質土

第15図 土壌5(1/30)

い所である。平面形はほぼ正円形で、長軸長113cm、短軸長106cm、深さは15cmを計る。埋土は3層に分かれる。遺物はいっさい出土しなかった。

土壌6(第16図)

I A区の南端、丘陵南斜面側の標高135.00m付近に位置する。この付近は傾斜がゆるくなだらかである。平面形は隅丸の長方形で、長軸長122m、短軸長60m、深さ12cmをはかる。南側はやや流され、浅くなっている。埋土は2層に分隔でき、褐色粘質土が堆積していた。遺物等はいっさい出土しなかった。

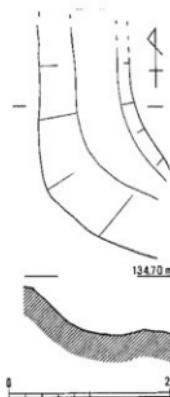


1. 7.5YR4/4 棕色粘質土  
2. 10YR4/4 棕色粘質土

第16図 土壌6(1/30)

溝1(第17図)

I A区の中央東端、標高134.50m付近に位置する。斜面の傾斜が若干ゆるくなり、上層から溝1を切って多数のピットが確認できた。ピットは溝1には直接関係しないと思われる。溝1は、長さ2.8m、幅1.1mをはかり、遺構の深さは最大で22cmである。北にいくにつれて遺構の埋土が浅くなり、消滅していた。土層は、1層で褐色砂質土が埋まっていた。遺物等はいっさい出土しなかった。



第17図 溝1(1/60)

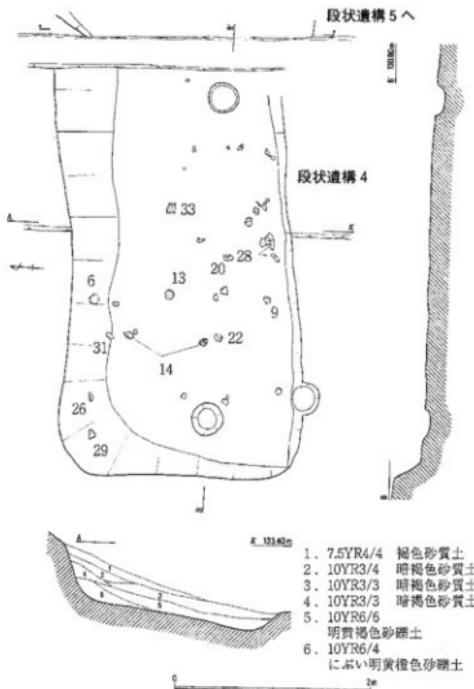
## 2. I B区の概要

I B区は、丘陵の頂上部先端から南斜面への傾斜変換点にあたり、丘陵を鋭角にカットし、15m四方の平坦面をつくり出す大規模な造成が行われていた。カットした際の造成土は谷側に盛土し、平坦面がより広くつくり出されている状況であった（詳細は I C区で説明）。遺構は、段状遺構が集中して存在し、焼

土壤も確認された。段状遺構は、丘陵をカットした法面を利用して築かれているようである。平坦面には、焼土塹、ピットのみ検出され何かの作業場所として利用されたと考えられる。II B区の段状遺構は、I A区の段状遺構にくらべて、規模及び形状、出土遺物の量等、おおきな違いがあり、遺構の性格の違いをしめしている。遺物は、段状遺構から大部分が出土している。

#### 段状遺構4（第19図）

IB区の造面の北端、標高133.00m付近に位置する段状遺構である。段状遺構5が東に接しているが、検出段階及び、完掘状況からも切り合いによる明確な前後関係は判然としなかった。規模は、東側が段状遺構5と切り合うため、境目までの長さ4.4m、幅は南側の境目が不明瞭であるが2.4mを残す。平面形は長方形を呈する。遺構の深さは、



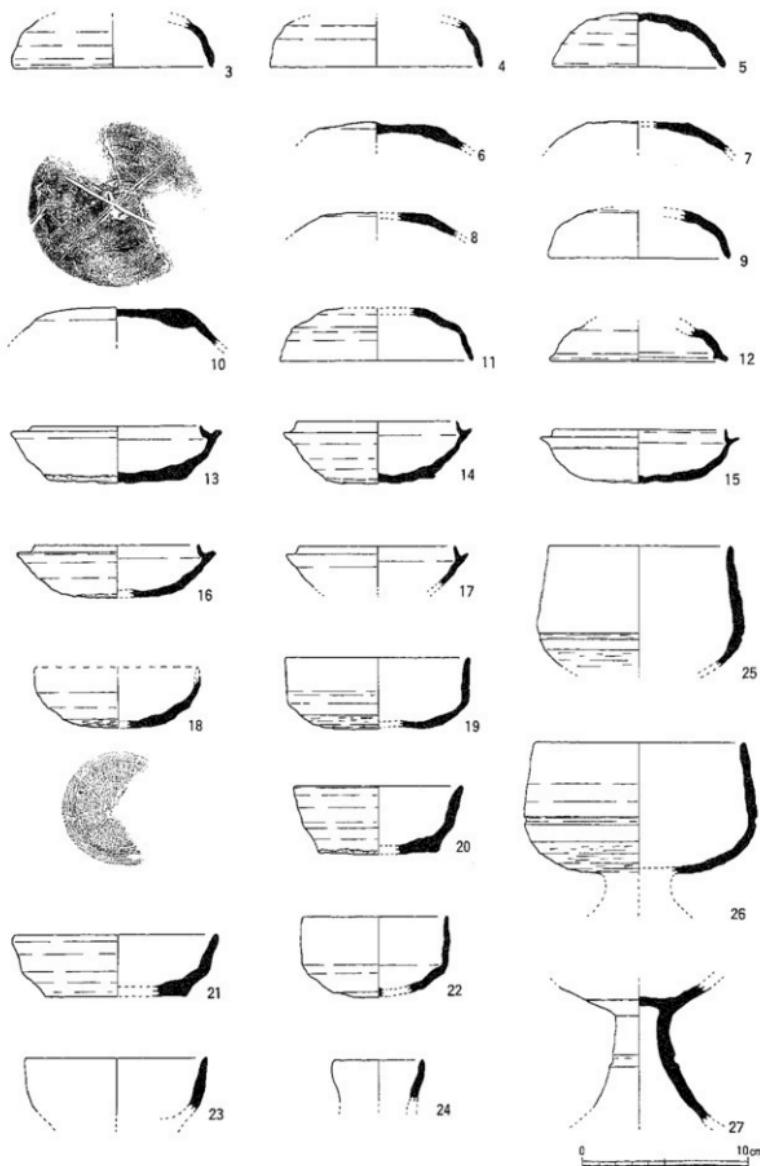
第19図 段状遺構4(1/50)



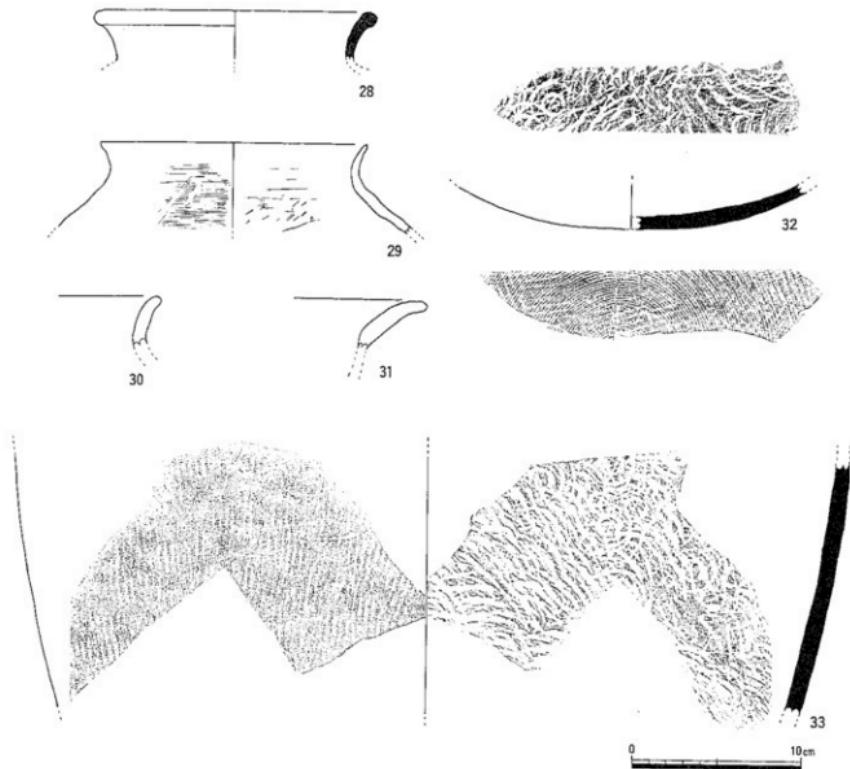
第18図 IB区遺構全体図

残りのいい山側で40cmをはかり、床面はほぼ水平である。柱穴は2つ確認できたのみであり、柱穴間長は3.2mをはかる。深さは、両方10cmと非常に浅いものである。周壁溝は確認できなかった。堆積状況は、検出段階に、上層の暗褐色砂質土が見られ、検出も比較的容易であった。埋土は6層に分層でき、大きく上層の暗褐色砂質土と下層の締まりのある黄色土が見られた。黄色土は締まりがあり、上下層で明確に分離できる状況であった。遺物は、埋土上層及び下層から出土している。遺物の偏在は見られなかったが、下層の黄色土中、地山直上から多く出土している。

出土遺物は、須恵器の杯蓋3~12、杯身13~23、平瓶24、台付椀25・26、高杯27、壺28・32、甕33、土器器の甕29~31が認められた。杯蓋3は口径11.6cm、杯蓋5、9は口径11cm以下である。杯蓋10は天井部に「×」



第20図 段状焼拂4出土遺物(1)



第21図 段状遺構4出土遺物(2)

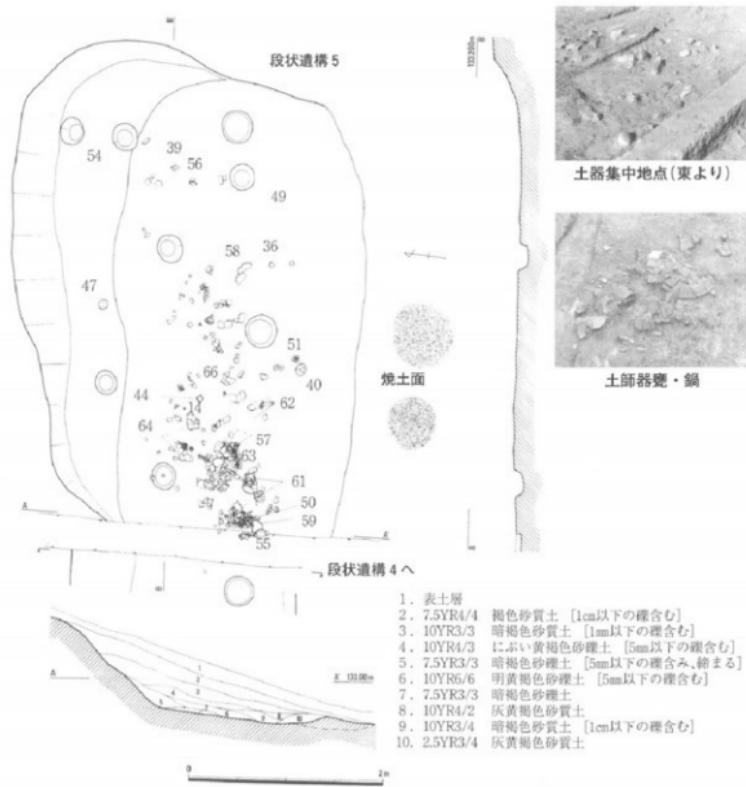
のヘラ記号が認められる。杯蓋12は坏G蓋で、かえりはあまり突出しない。坏蓋はいずれも天井部の回転削りは認められない。杯身13・15は口径10.1～10.5cm、14・16・17は口径10cm以下である。13～15は底部がナデもしくは未調整で、底部の形状は13・14は平坦で、15は丸みをおびシャープなつくりである。18・19・22・23は杯身Gで、18・19は底部回転削りを施し、22は底部ナデ調整である。20・21は杯身Gでも他とは異なり、底部が明確な平底を呈し、未調整・ナデで調整され、体部の形状は底部から体部中位で屈曲して真っすぐのびる。壺32は外面にカキ目を施す。

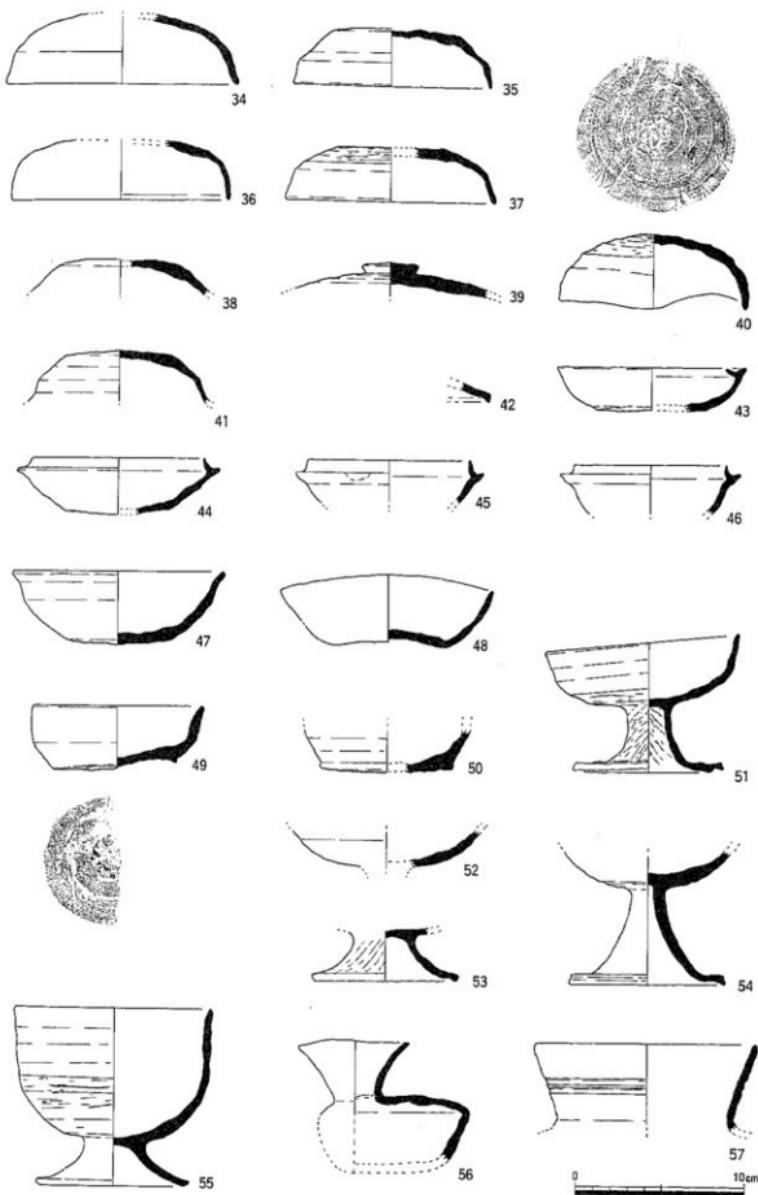
#### 段状遺構5（第22図）

IB区の造成面の北端、標高133.00m付近に位置している。段状遺構4が西端に接しているが、明確な切り合い関係は不明である。規模は長さ4.9mを残し、幅は南端が不明瞭であるが3.6mをはかる。平面形はいびつな長方形を呈する。床面は長方形で、山側に緩やかなテラスが設けられ、2段に造成されている。遺構の深さは50cmあり、床面は若干くぼむがほぼ水平である。北側の壁は、床面から緩やかにたちあがり、

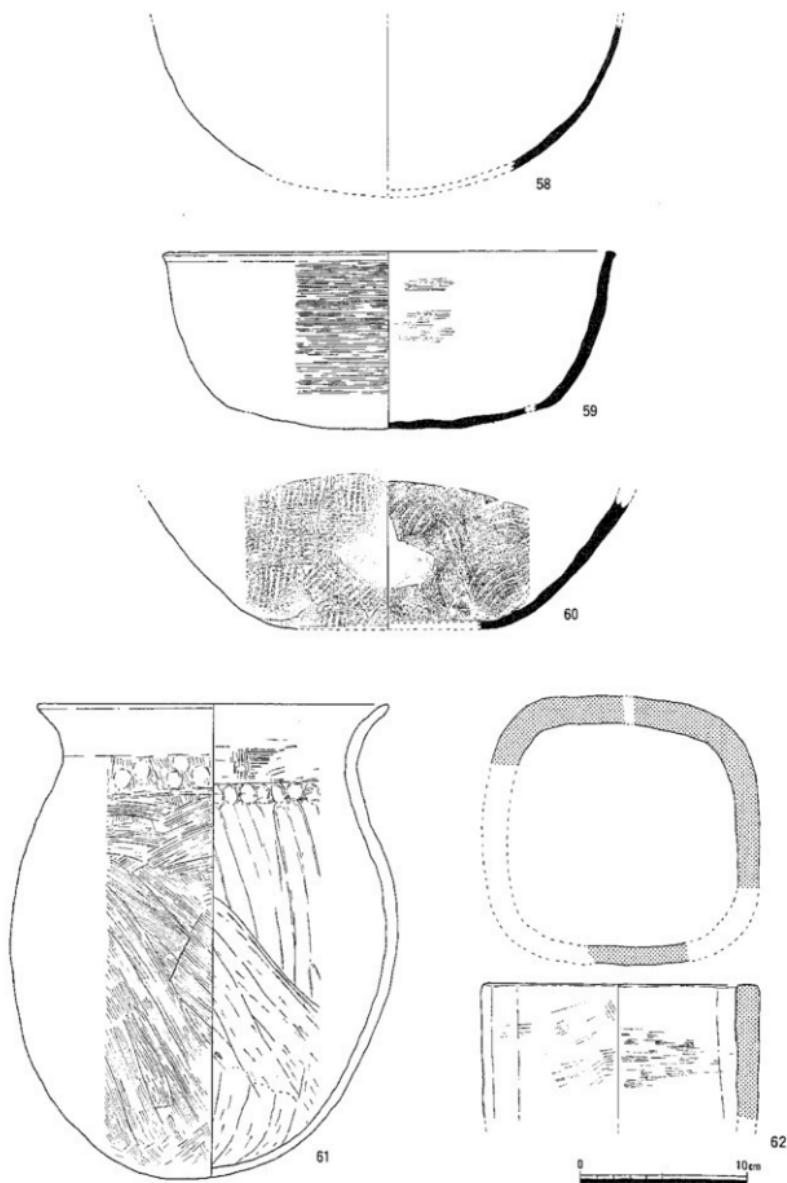
I B区全体の造成面の法面と重なる。柱穴は、8つ検出できた。しかし、まとまらず主柱穴とはいがたく深さも全体に浅い。周壁溝は確認できなかった。また堆積状況は、段状遺構4とおおむね同様で、上層に暗褐色砂質土、下層に黄色砂質土が認められる。しかし、南西側の床面では赤色粘質土、黄灰色粘質土、焼土などが堆積しており、若干の炭を含んでいた。この層は、黄色土を下げるとき南西側のみに広がりを見せた。これに關係して、この遺構の南側に、円形に地面が焼けた箇所が2カ所存在し、この粘質土層との関連を伺わせる。遺物は、暗褐色土掘削段階から非常に多くの遺物が出土した。床面からは、まとまった遺物が認められ、なかでも南西側の赤色粘質土上、及び掘削中に、土師器甕、鍋を含めた多量の遺物が出土し、一括廃棄された状況を示す。

出土した遺物は、須恵器の杯蓋34~42、杯身43~50、高杯51~54、台付碗55、平瓶56、壺57・58・60、鉢59、土師器の甕61・65・66、鍋63・64、瓦質の方形鉢62が認められた。37・40は天井部に回転ケズリを

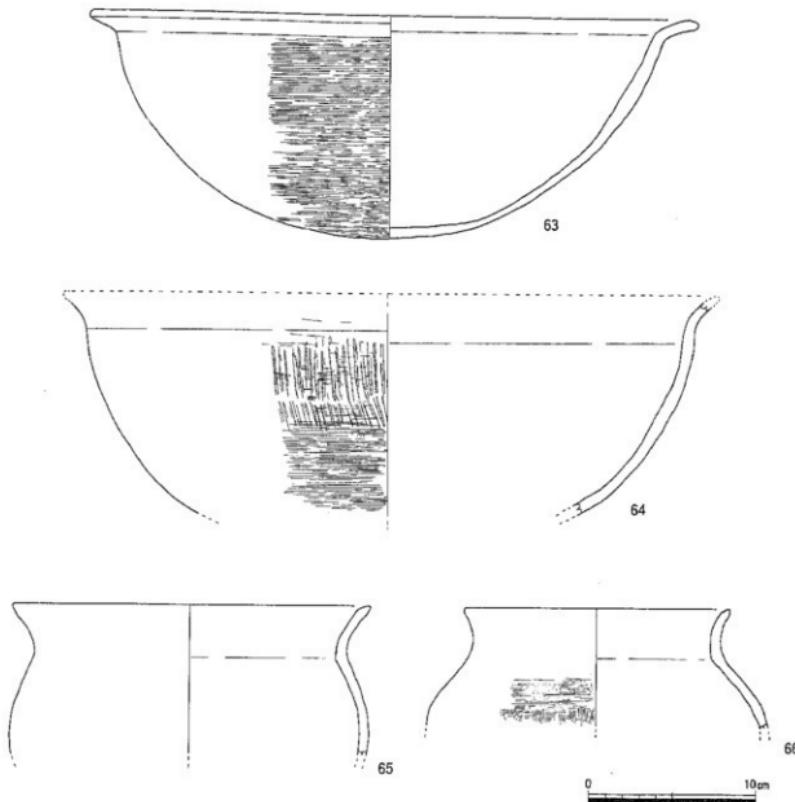




第23図 段状遺構5出土遺物(1)



第24図 段状遺構5出土遺物(2)



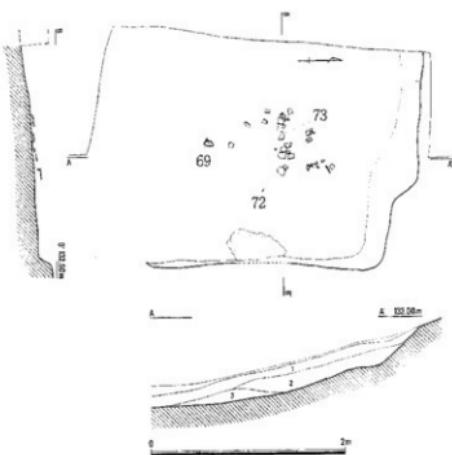
第25図 段状遺構5出土遺物(3)

施す。39は杯B蓋またはA蓋と考えられ、宝珠つまみがつく。42は杯B蓋またはA蓋で、かえりが無い。43はかえりが低く受部と同じ高さであり、底部はヘラ切り後ナデを施す。また44も底部はヘラ切り後ナデを施す。47は器壁が厚く底部はヘラ切り後ナデを施し、口縁部を強くなでている。48は杯身Aで歪んでいるが体部が直線的にのび、底部はヘラ切り後ナデを施す。49、50は杯身Gで底部はヘラ切り後未調整である。51、53は脚部に紋り目が認められる。59は焼成不良のためか白色を呈し、外・内面にカキ目が観察される。また口縁部は面をもつ。61は長胴ぎみの形態で口縁部と体部の境は不明瞭である。外面は継ハケ、内面はナデ後、ケズリを施す。器壁は底部付近が非常に薄く作られ、外面にはススが付着する。63は浅い形状で口縁部が外側に開く特徴をもつ鍋で、外面は底部にまで須恵器の調整技法であるカキ目が施され、非常に薄手のつくりである。ススは口縁部から体部中位まで認められる。

## 段状遺構6 (第26図)

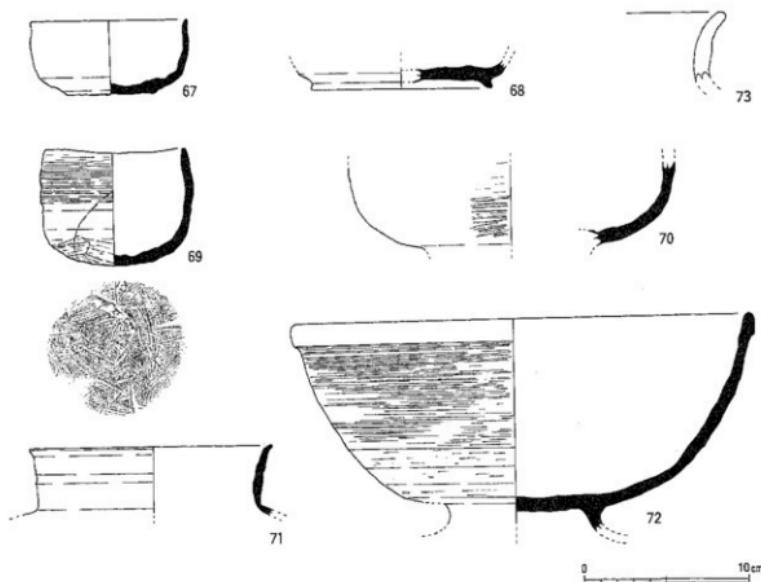
IB区の西端、標高132.00m付近に位置する段状遺構である。遺構西側は調査区外に続く。そのため長

さ2.3mを検出したのみである。幅は、谷側が流れているため2.9mを残すのみである。平面形は、未掘削部分があるものの現状で方形を呈する。遺構の深さは、28cmをはかり、床面はやや傾斜をもつ。柱穴、周壁溝等は一切確認できなかった。遺構は、岩盤質の地山を掘削して築かれていた。埋土は地山と同色の黄褐色砂質土が堆積しており、検出段階では形状が不明瞭であった。遺物は全体的に少量であった。遺物は遺構掘削中に少量出土し、又、床面直上から散らばった状態で出土している。出土遺物は、須恵器の杯身67・68、碗69、鉢70、壺71、大型台付鉢72、土師器の甕73が認められる。67は杯身Gで体部下位で屈曲し、底をもつ。68は



1. 7.5YR5/6 明褐色砂質土  
2. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土  
3. 10YR5/4 にぼい黄褐色砂質土

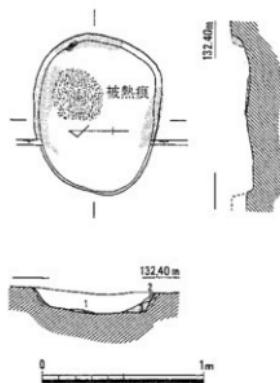
第26図 段状遺構 6 (1/50)



第27図 段状遺構 6 出土遺物

杯身Bである。69は口縁部にカキ目を施し、底部には静止ケズリがみられる。72は口径28.1cmを計る大型品で、外面にはカキメ目、下半は回転ケズリが施され口縁部は玉縁状を呈する。

土壤7(第28図)



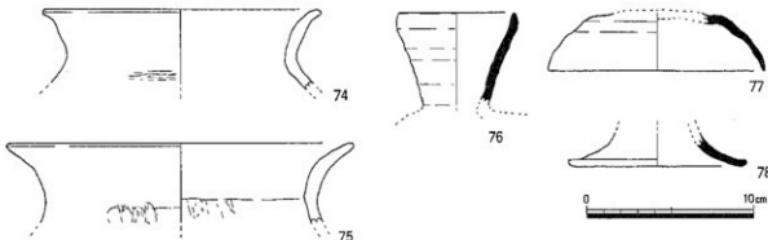
1. 10YR3/1 黒褐色砂質土 [炭を多く含む]
2. 10R4/6 赤色粘質土
3. 5YR3/2 暗赤褐色砂質土

第28図 土壤7(1/30)

I B区の中央、標高132.30m付近に位置する焼土壤である。段状造構1、2から南に6m離れた位置にあり、造成平坦面上に築かれているため平坦な場所に存在する。西側の肩を確認調査で削ってしまったが、長軸96cm、短軸78cmをはかり、形状はほぼ円形である。断面形は逆台形で、遺構の深さは12cmをはかる。底面は水平で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。全体に被熱しており、壁は赤く変色し床面の一部は濃赤色に変色していた。埋土は、炭混じり黒褐色砂質土ではほぼ1層であるが、壁際は焼土の堆積が認められた。埋土中には、1cm大の炭片が存在し、また被熱した小石も少量認められた。遺物等はいっさい出土しなかった。

その他の出土遺物(第29図)

I B区、掘削中に出土した遺物である。須恵器では平瓶76、杯蓋77、高杯78、土師器では壺74・75出土している。78は、造成の際の盛土部分精査中に出土した。



第29図 I B区出土遺物

### 3. I C区の調査

I C区は丘陵南斜面の傾斜のきつい地区であり、その範囲はB区の平坦面造成時の斜面への盛土部分から、谷部までを指す。平坦面造成による盛土については、調査区中央および西端を掘削し、盛土状況、及び旧表土層の把握をおこなった。盛土については、サブトレンチ1(図31上)をみるとB区を平坦に造成した際の土砂を、谷側(I C区)の旧表土層(第9層)に盛っているようである(第1、2、10層)。サブトレンチ2でも同様に旧地表の黒色の腐食土層の上に、粘質土及び地山土まじりのブロック土が1mほど

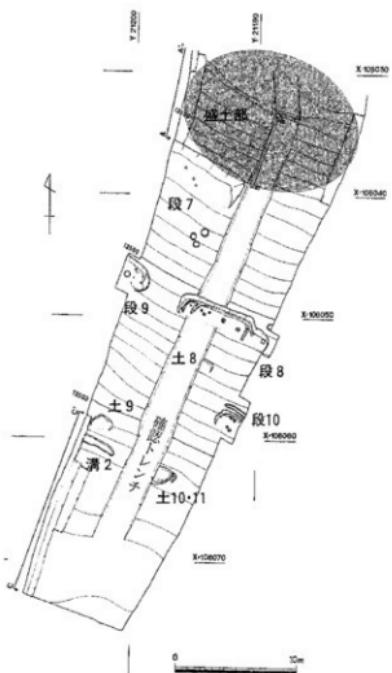
盛土され、土も締まった状態であった（図31中）。盛土内に遺物はいっさい含まれない。旧麦土の傾斜から本来の丘陵の傾斜が緩やかであったことがわかる。

次に、谷部の堆積状況であるが、いわゆる黒ボク土が厚く堆積している（第5～9層）。黒ボク土は標高119.50mあたりから認められ、それより低い場所では黒ボク土に覆われている。黒ボク土は細かく観察すると、色調、土質の違いにより6層に分層される。第9層は遺物を含まず、遺構の掘削される以前の堆積と考えられる。それより上層は、遺物を多く包含し、丘陵上からの流入土と考えられる（図31下）。

遺構は、急な斜面全体に検出された。段状遺構は、残りが悪く南側の床面は流されたものがほとんどであり、また調査区外に遺構のがたるため未掘削部分が多いことから全容を把握できるものが少なかった。しかし、遺物は各遺構とも非常に多く出土した。その理由として、段状遺構に流れた遺物が堆積する包含層の状態になったことが言えるであろう。

### 段状遺構7（第32図）

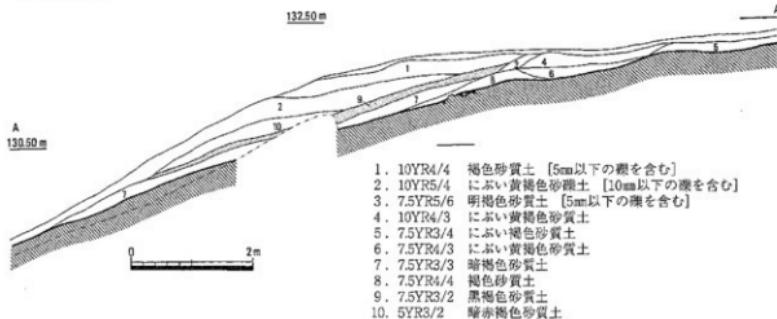
I C 区北端、標高127.00m付近に位置する段状遺構である。西側は調査区外に延びるが長さ6.9mをはかり、幅は、谷側が流されているため、2.8mを残すのみである。平面形は長方形を呈する。調査区外は調査の最後に若干抗張を行ない1m西側に漁



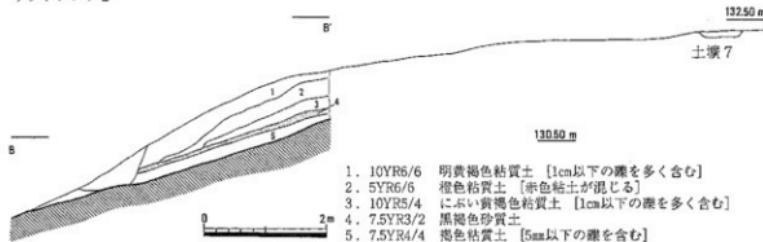
第30図 I C区遺構全体図

出土遺物は、須恵器、土師器、壺、  
フイゴの羽口、不明土製品、鉄鎌、鉄

## サブレンチ 1



## サブレンチ 2



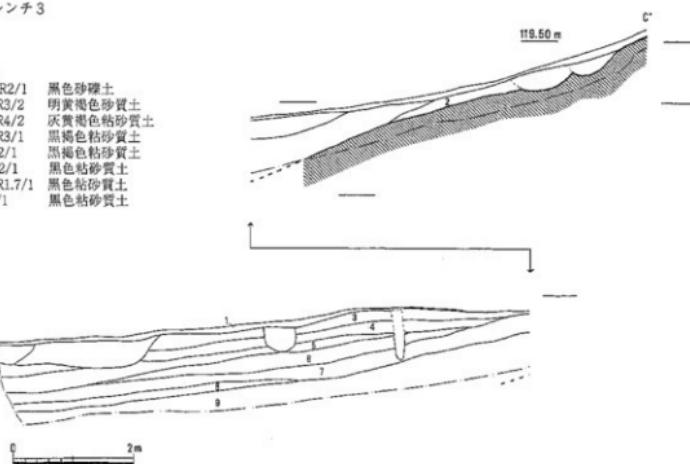
## サブレンチ 3

1. 表土
2. 7.5YR2/1 黒色砂礫土
3. 10YR3/2 明黄褐色砂質土
4. 10YR4/2 暗黄褐色砂質土
5. 10YR3/1 黑褐色粘砂質土
6. 5YR2/1 黑褐色粘砂質土
7. 2.5Y2/1 黑褐色粘砂質土
8. 10YR1.7/1 黑色粘砂質土
9. 5Y2/1 黑色粘砂質土

118.50 m

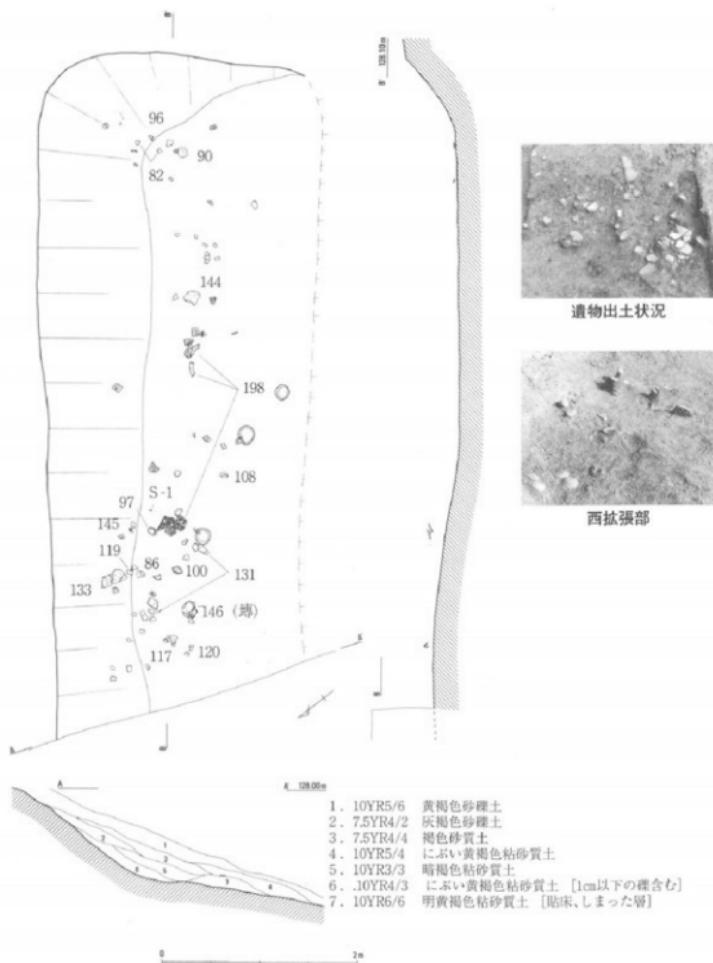
C

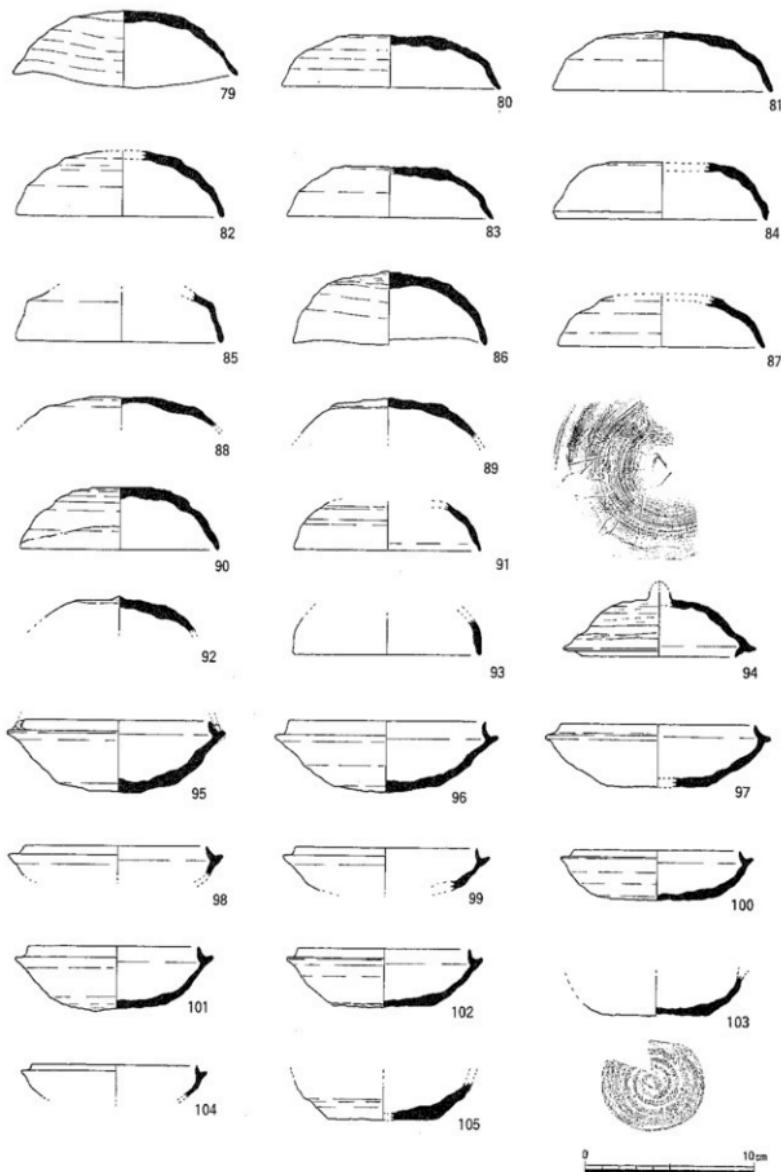
117.00 m



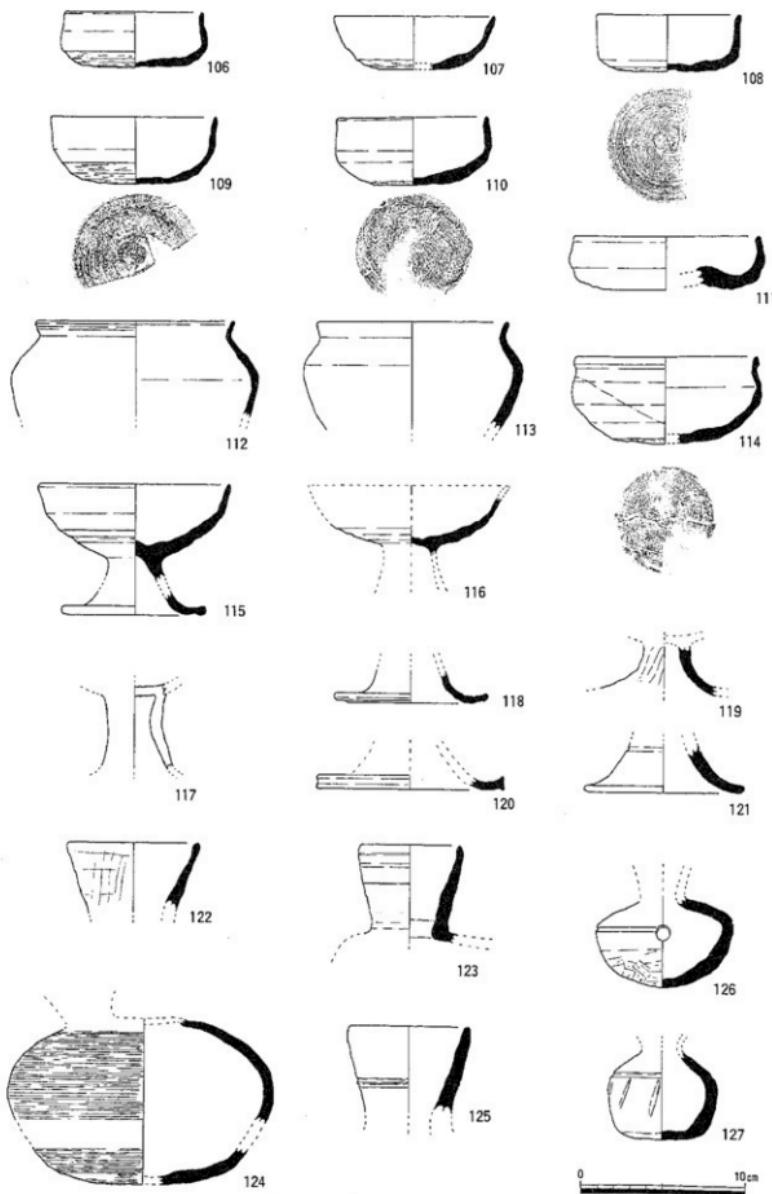
第31図 I C区土層断面図

漆、不明石製品が出土している。79~94は杯蓋で、79・80は口径13cm以上を計り、79は外面回転ナデが顕著に観察できる。81~85、87は12.0~13.0cm、90、91、93は11.0~12.0cm、86は11.5cm以下である。天井部の回転ケズリはいずれにも認められない。94は杯G蓋であり、つまみが付く。天井部は回転ケズリを施す。95~111は杯身である。95~105は杯身目で、96は口径12cm以上、95、97、99は口径11cm前後で、95は口縁受部に杯蓋の口縁部の破片が残存し、外面は自然釉で覆われる。101、102は口径10.5cm前後で、101は

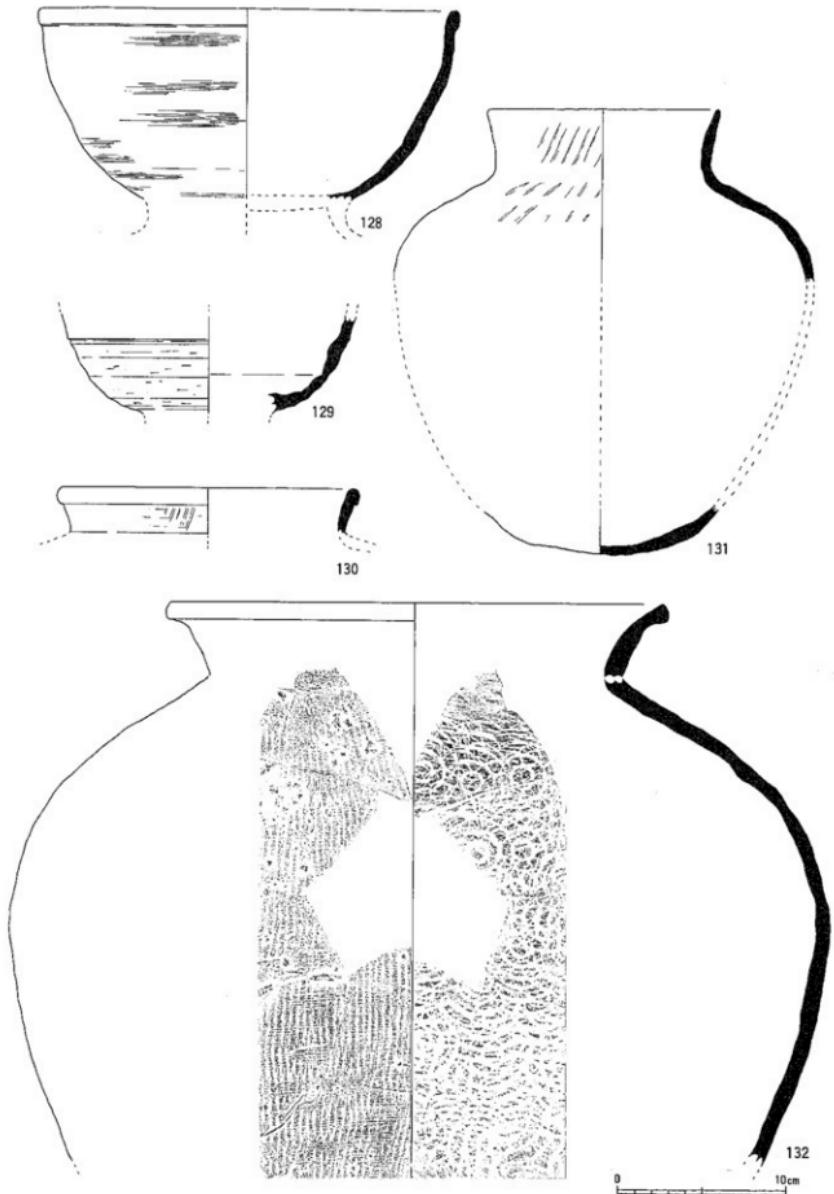




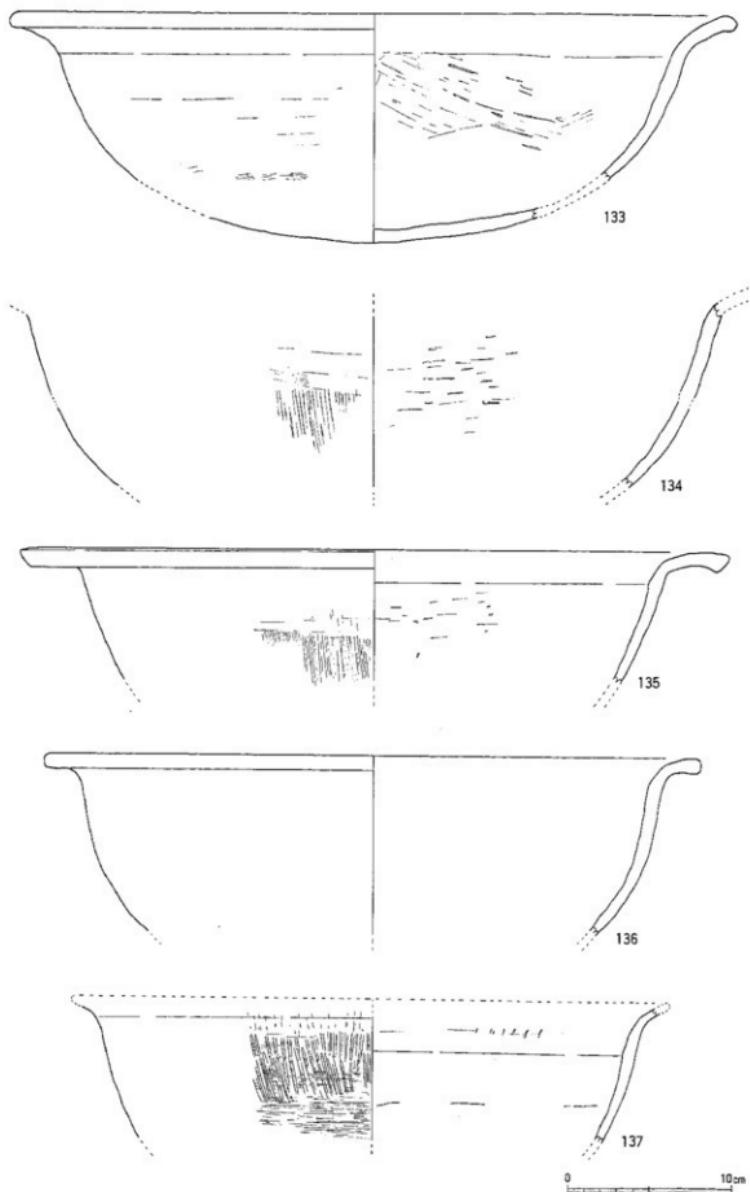
第33図 段状遺構7出土遺物(1)



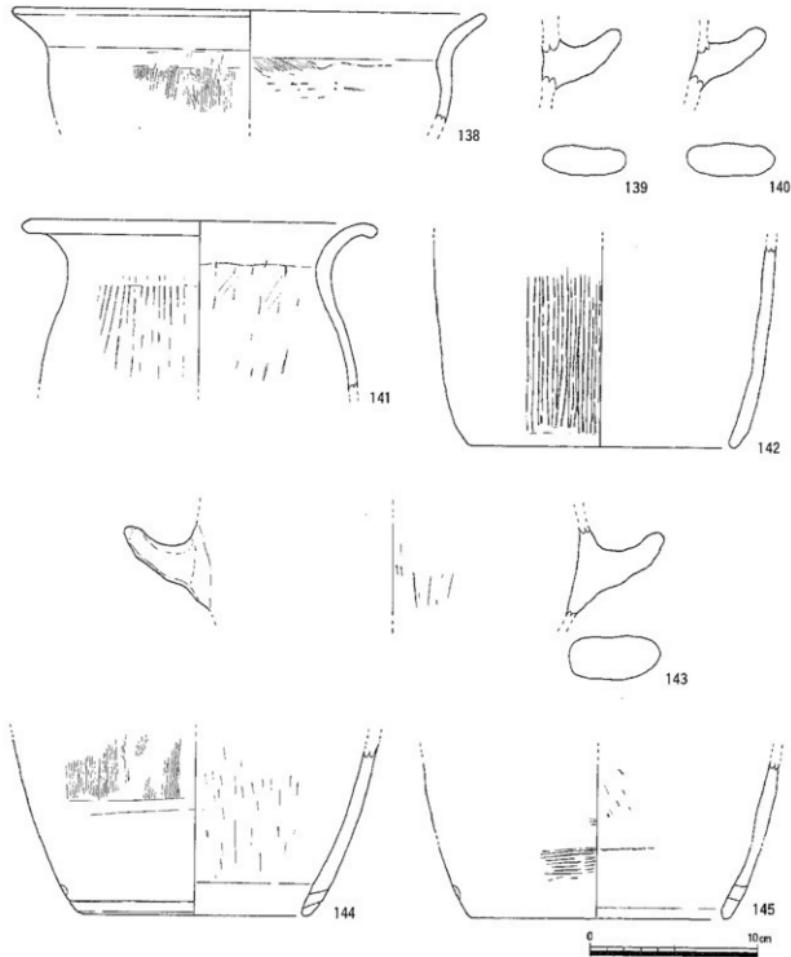
第34図 段状遺構7出土遺物(2)



第35図 段状遺構7出土遺物(3)

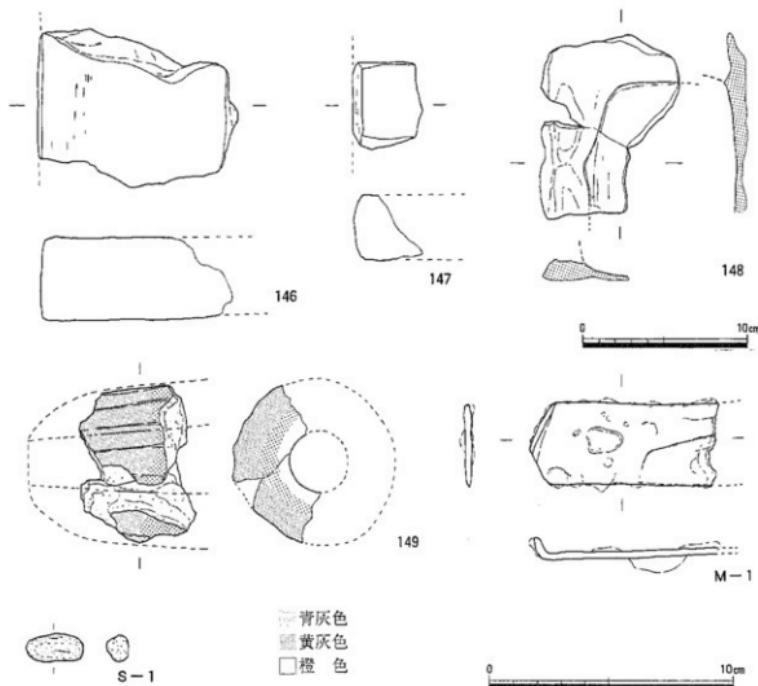


第36図 段状構造7 出土遺物(4)



第37図 段状構7出土遺物(5)

焼成不良のため白色を呈する。103は口縁部は残存しないが底部にヘラ切り時の渦巻きがよく観察できる。106~110は杯身Gで、口径はいずれも10.0cm以下である。つくりがシャープな印象を受け、底部は丸みをもち、口縁部は107以外は直線的に立ち上がる。底部の調整は106~109は回転ケズリを施し、110はケズリによって仕上げている。111は歪みが大きく、器壁が非常に厚い。杯身Gか。112~114は小型鉢である。口縁部がくの字に屈曲する。114は重ね焼きの痕跡が残る。115~121は須恵器の高杯で、117は土師器の高杯である。122~125は平瓶である。124は外面にカキ目を施す。126、127は甌で、126の体部下半は静止ケ



第38図 段状遺構7出土遺物(6)

ズリ、127は小型品で縦方向の条線が認められる。128は段状遺構6の72と同形式と考えられ、外面にはカキ目後にナデが施される。129は鉢であろうか、外面に回転ケズリを施す。130～132は壺で、131は焼成不良により白色を呈し、外面にはわずかに条線タタキ目が認められる。132は口縁部が短く外反し、外面は縦方向の条線タタキ後にカキ目を施す。133～137は土器師鍋である。外面にカキ目を施すもの133、137、縦ハケを施すもの134、135が存在し、内面はケズリ調整がほとんどである。138、141は壺で、142、144、145は瓶の底部と考えられる。139、140、143は把手である。

## (土製品)

146、147は埴と考えられる。146は厚さ5cm、147は厚さ4cmである。148は、焼成不良により白色を呈する。方形と思われる剥離痕があるが、器種は不明である。149はフイゴの羽口である。1/3が残存しており、被熱により青灰色、黄灰色に変色している。

## (石製品)

S-1は長さ2.4cm、幅1.1cm、厚さ0.9cmをはかる川原石と考えられる。白色を呈し、加工痕跡は認められない。付近の石材ではなく河原からもってきたと考えられが、その使用方法、意味は不明である。

## (鉄製品)

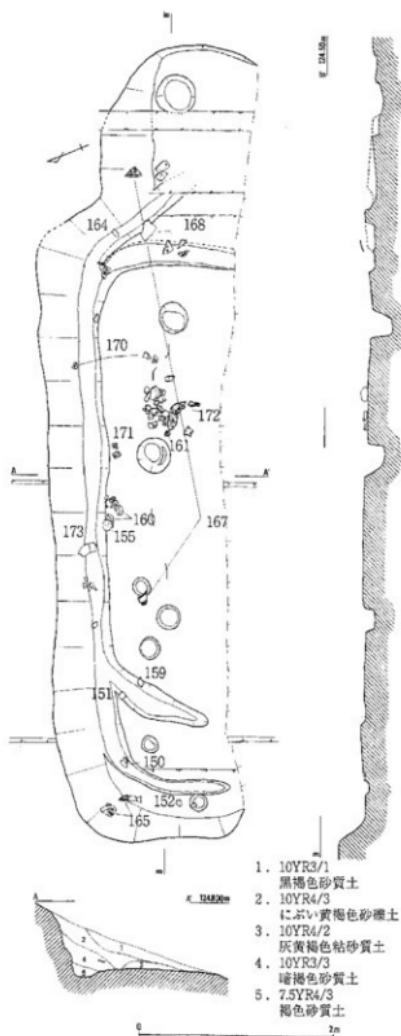
M-1は鉄鎌と考えられる。基部をL字に折り返す。その他、鉄滓が少量出土している。

段状遺構 8 (第39図)

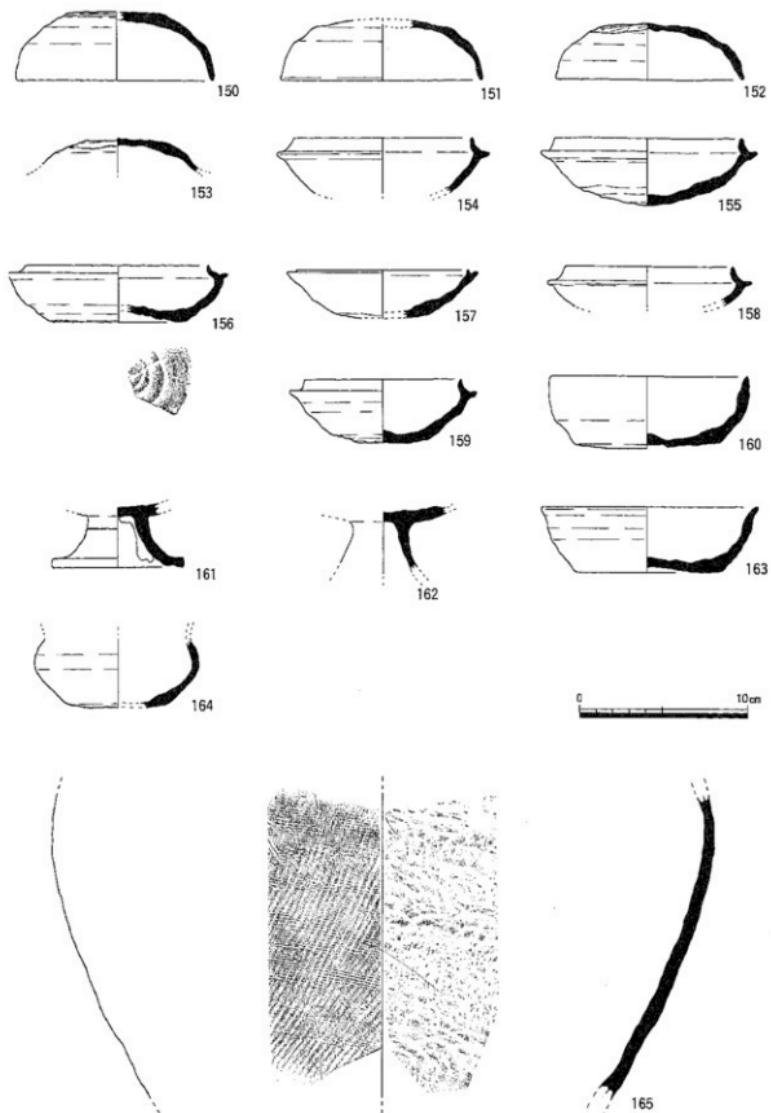
IC区中央、標高124.50mに位置する段状遺構である。西側に2m離れて等高線にそって段状遺構9が存在する。遺構の長さは8.1mをはかり、幅は谷側が流出しているため2.0mを残すのみである。平面形は長方形を呈する。遺構の深さは最深部40cmをはかり、床面は水平に造成されている。壁は床面から急角度で立ち上がる。東壁は、残りが悪く5cmの比高差を計るのみである。柱穴は8つ確認できた。全体に埋土は浅い。主柱穴は3つで、本来は6本柱の可能性が高い。周壁溝は東壁、西壁で2条に分かれていることから、段状遺構を拡張したと考えられる。

検出段階では、土色の違いから2つの段状遺構が隣り合うと判断していたが、掘削するうちに同一の遺構であることが判明した。遺構埋土は、5層に分層でき、主に暗褐色砂質土が堆積していた。遺物は、埋土中に多く含まれていた。とくに、中央東よりの位置で、遺物が集中して認められた。なかでも杯身155と杯身G160は、重なるように出土している。

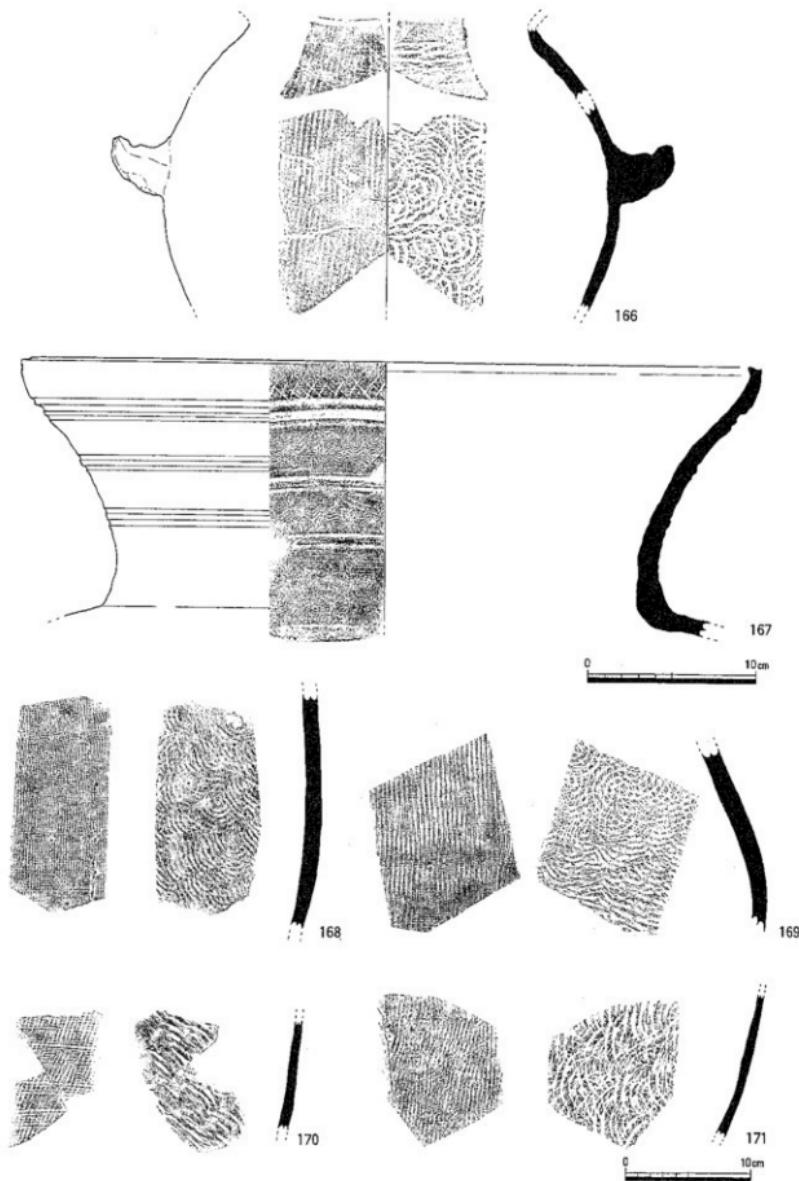
出土遺物は、須恵器、土師器である。150～153は杯蓋である。150、152は口径11.0cm前後で、152は天井部に静止ケズリを施す。151は口径12.4cmをはかり天井部はヘラ切り後ナデを施す。154～160、163は杯身である。口径は154～156は11cm前後で、157は10.8cm、159は9.8cmである。155は焼成不良により橙色を呈し、底部はナデ調整によってとがりぎみになっている。157も焼成不良で浅黄色を呈し、口縁部のかえりが短い。159は底部未調整である。160、163は杯身Gである。160は焼成不良により黄橙色を呈する。平底の底部から体部が直線的になり、口縁部はとがっておわる。器壁はやや厚めである。163は底部平底で体部は直線的にのびる。口縁部は若干外反する。161、162は高杯である。161の脚内面に窓壁片が付着する。164は小型鉢である。165、170、171は壺、166は把手付鍋、167



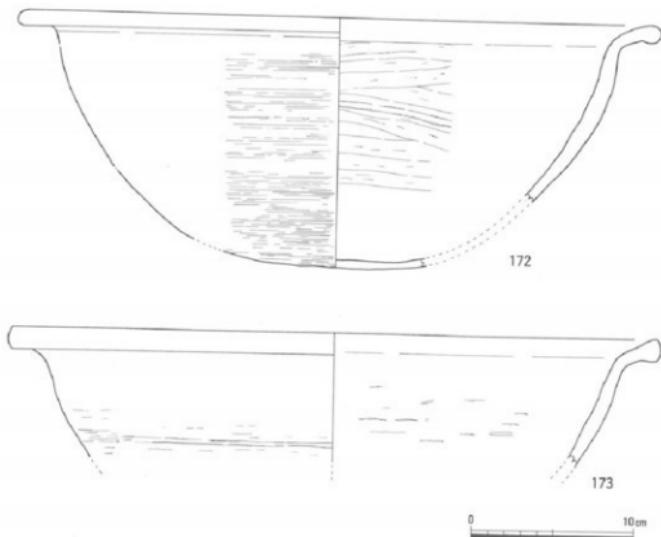
第39図 段状遺構 8 (1/50)



第40図 段状遺構 8 出土遺物(1)



第41図 段状構8出土遺物(2)



第42図 段状遺構8出土遺物(3)

~169は壺である。166は外面は格子目タタキ後横ハケを施す。167は口縁部のみであるが、口縁部端面を内側に拡張し、外面を波状文、格子目文などで加飾している。172、173は土師器鍋である。172はやや平底を残し、口縁部は玉縁状を呈する。外面をカキ目、内面をケズリにより調整し、器壁は底部付近が非常に薄くつくられている。



杯身155・160出土状況

土師器鍋出土状況

段状遺構9(第43図)

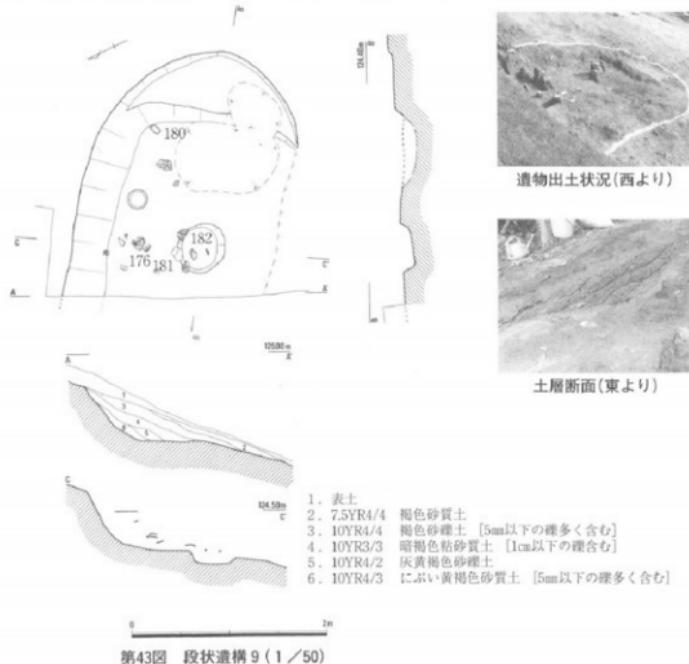
I C区中央、標高124.50mに位置する段状遺構である。東側に段状遺構8が存在している。遺構の長さは、西側が調査区外に延びているため検出した範囲で2.5mをはかり、幅は谷側が流されていることから2.0mを残すのみである。平面形は方形であるが、東端はやや丸みのある形である。遺構の深さは36cmをは

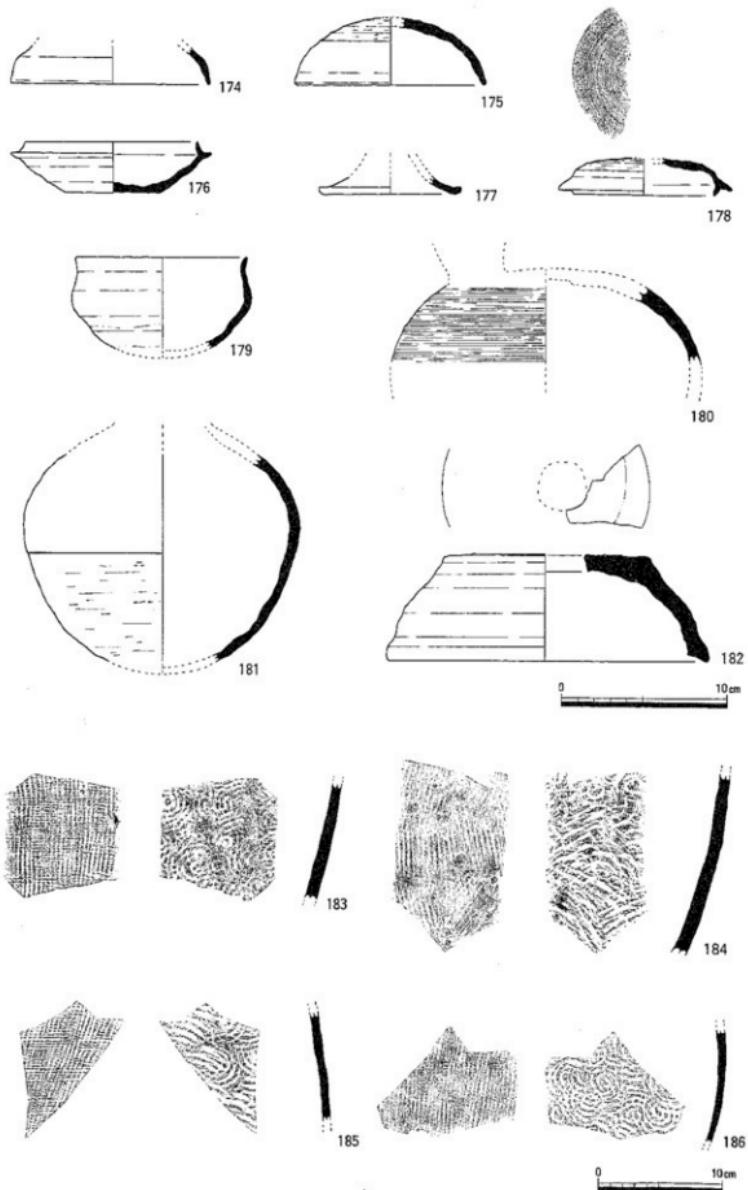
かり、床面は水平に造成されている。根株によって床面が損壊しているが、柱穴は2本検出できた。主柱穴は掘削範囲が限られているため1本のみ確認された。周壁溝は認められなかったが、東端に一段高いテラスが認められた。遺構埋土は、褐色砂質土が堆積しており、遺構の形状はとらえやすかった。遺物は、全体的に少量であった。埋土中に少量出土し、床面上からも出土している。

出土遺物は、須恵器、図示できなかったが土師器も出土している。その他には他の遺構に比べて鉄滓が多く出土していることが特徴である。174、175、178は杯蓋である。175は天井部ケズリを施す。178は杯G蓋であり、つまみは付くか不明である。天井部は回転ケズリを施す。杯身176は口径10.4cmをはかり底部ヘラ切り未調整である。177は高杯、179は小型鉢、180は平瓶である。181、185、186は壺であり、181は体部下反に回転ケズリを施す。182は焼台と考えられる。平底の鉢を逆にしたような形態で、天井部のはば中央に焼成前穿孔が認められる。外、内面は回転ナデ調整である。183、184は壺である。

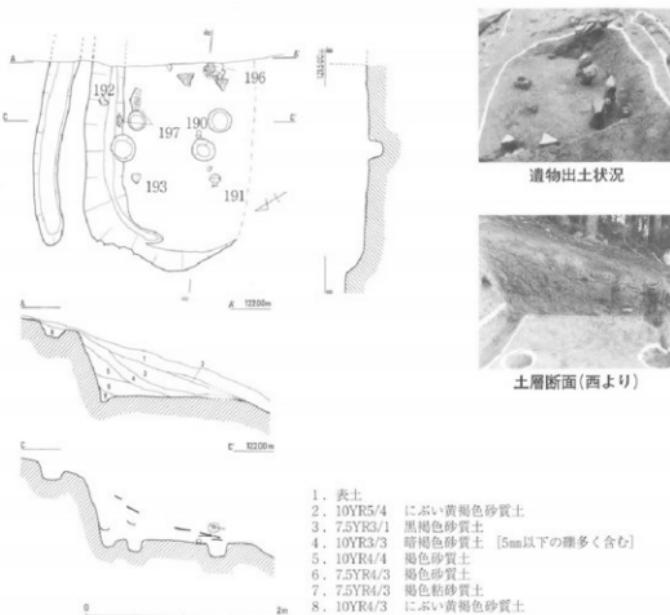
#### 段状遺構10（第45図）

IC区南側、標高121.50m付近に位置する段状遺構である。遺構の長さは、東側が調査区外のため2.1mを検出したのみで、幅は谷側が流れているため1.7mを残す。平面形は長方形を呈し、遺構の深さは47cmをはかる。山側の壁は立ち上がりが急であり、残り具合が良好であった。床面は水平であった。また段状遺構に付属して30cm北側に長さ1.8mの壁に並行する溝が存在している。柱穴は4本確認できた。主柱穴は2本で、いずれも柱穴の規模は20cm程度でやや小さい。また周壁溝がほぼ全周している。床面の一部は被熱し、





第44図 段状遺構 9 出土遺物



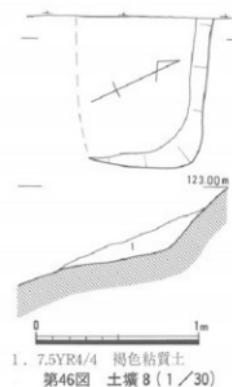
第45図 段状遺構10(1/50)

やや赤変色していた。遺構埋土は、褐色砂質土で、地山との区別が非常につきやすかった。遺物は埋土全体から出土しているが、被熱した床面の直上でまとまって出土している。

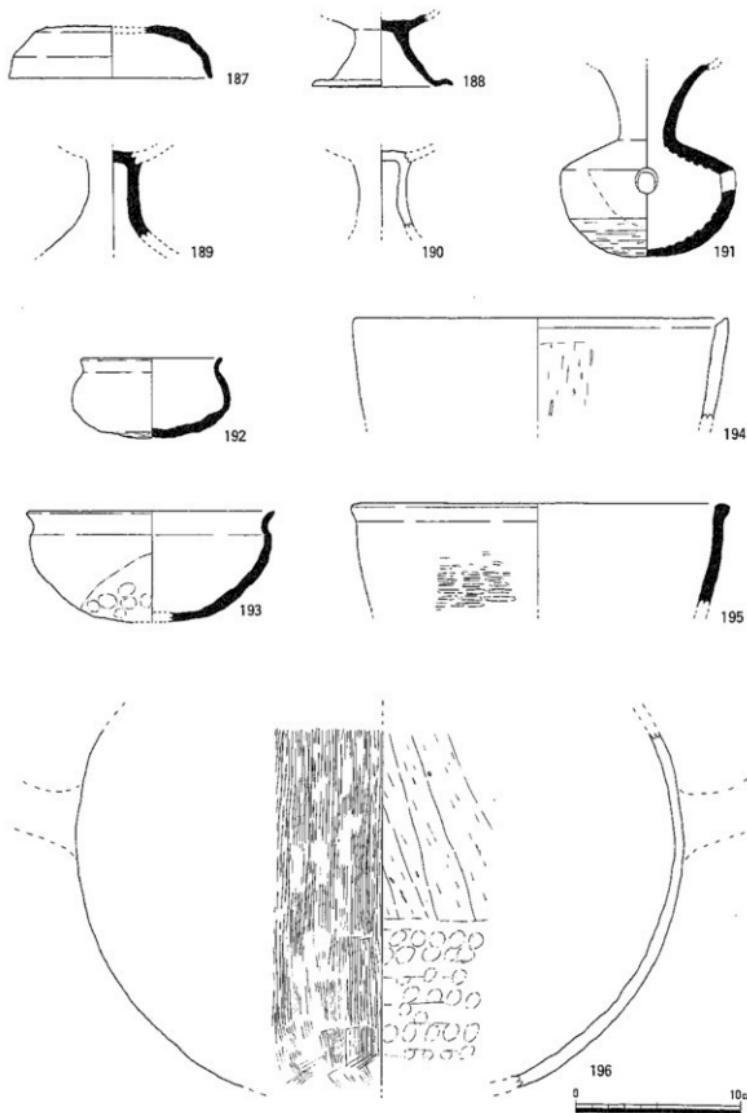
出土遺物は須恵器、土師器である。187は杯蓋で、天井部ヘラ切り後なで調整である。188、189は須恵器の高杯で、190は土師器の高杯である。191は壺で、ほぼ完形で出土した。体部下反は回転ケズリを施す。192、193は小型鉢である。192は、底部ヘラ切り未調整で、193は重ね焼きの痕跡が残り、体部下半分は指頭圧痕がみられる。194は土師器の瓶、195は須恵器の瓶と思われる。196は土師器の壺で球形を呈し外面縦ハケ、内面ケズリ調整を施す。器壁はやや厚めで、体部には把手がついていたと考えられる。197は壺、198、199は壺である。

#### 土壤 8 (第46図)

IC区中央、標高123.00m付近に位置する土壤である。遺構の平面形は、西側が確認調査のトレンチによって削られているが、方形を呈し、長軸96cm、短軸83cm、深さ18cmをはかる。断面形は皿形で、底面の高さは標高122.52mではほぼ水平である。埋土は一層で褐色粘質土が堆積していた。遺物等は一切出土していない。



第46図 土壤 8 (1/30)

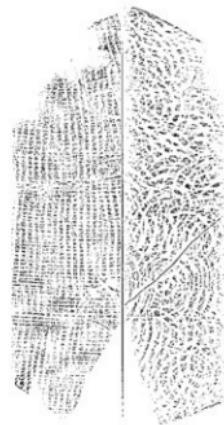


第47図 段状遺構10出土遺物(1)



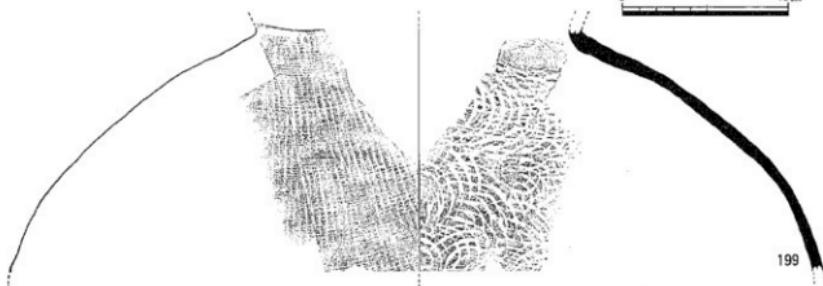
197

0 10cm



198

0 10cm



199

第48図 段状遺構10出土遺物(2)

## 土壤9（第49図）

I C区南側、標高119.50m付近に位置する土壌である。遺構の平面形はいびつな円形を呈し、長軸長は1.76m、短軸長は谷側が流れているが1.30mを残す。遺構の深さは19cmをはかる、断面形は皿形である。床面の高さは標高119.28mではほぼ水平である。埋土は2層に分層でき、黒褐色砂質土が堆積している。遺物は、埋土上部から須恵器が出土している。200、201は杯蓋である。口径は、それぞれ12cm、14cmである。200は盃みが大きいが、口縁部は直線的にのびる。天井部はヘラ切り後ナデで、天井部に窯壁片が付着する。201は天井部ヘラ切り後ナデを施す。

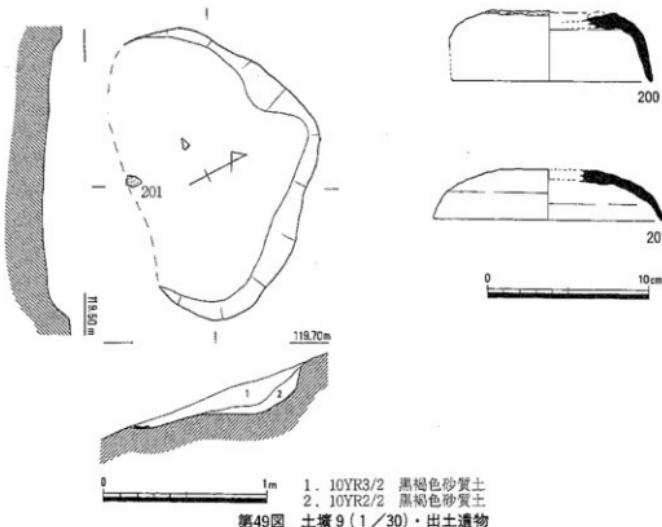
## 土壤10（第50図）

I C区南側、標高119.00m付近に位置する焼土壌である。土壌11を切って焼かれている。平面形は西側を確認調査トレンチによって削っているが梢円形を呈し、長軸1.5m、短軸1.2m、深さは31cmをはかる。断面形は楕円形を呈し、床面は水平ではない。壇は被熱のため赤変色していた。床面中央には、20cm大の石が据えられており、この石も表面は被熱により赤く変色していた。遺構埋土については、土層断面によると黒色砂質土を基本として、焼土層、炭混じり層などで構成され複雑な堆積状況を示す。断面からは数回の再掘削が考えられ、埋まつては再び掘削し何回も利用していたと考えられる。遺物は検出面付近で少量出土したのみである。また埋土中には5cm大の炭片も認められた。

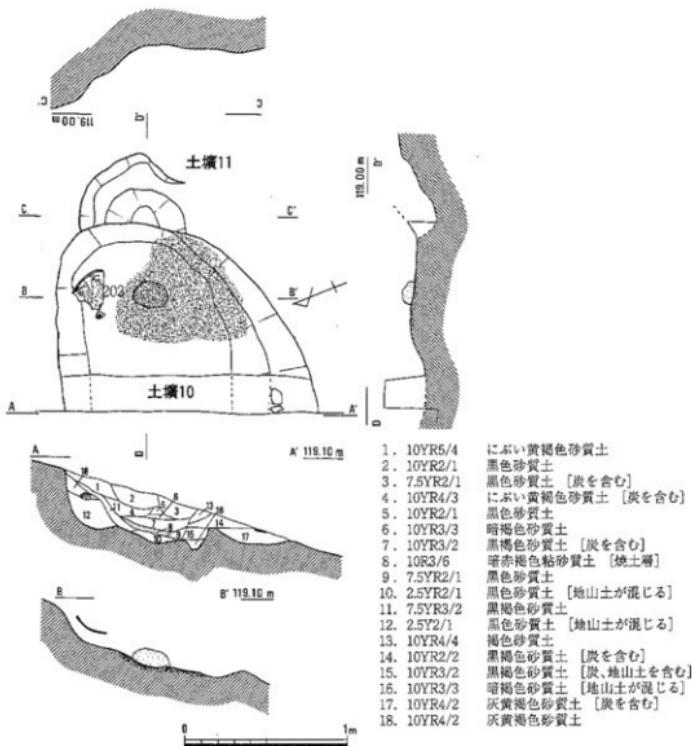
出土遺物は須恵器である。202は盃である。203は杯身で口径11.3cmをはかる。底部はヘラ切り未調整であり、器壁はやや厚めである。

## 土壤11（第50図）

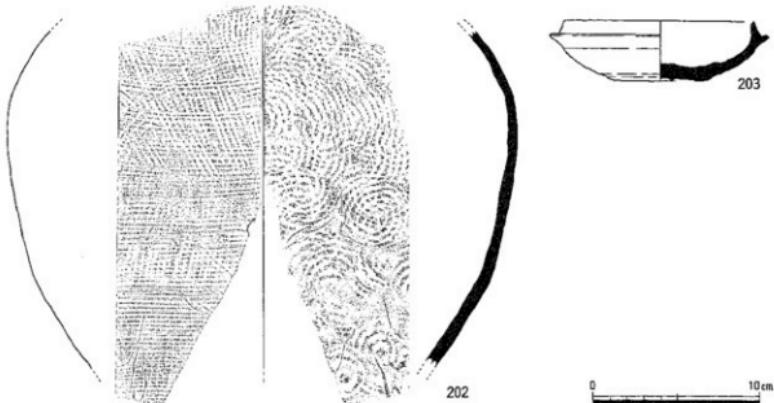
I C区南側、標高119.00m付近に位置する土壌で、西側を土壌10に切られている。南半分は流れている



第49図 土壌9(1/30)・出土遺物

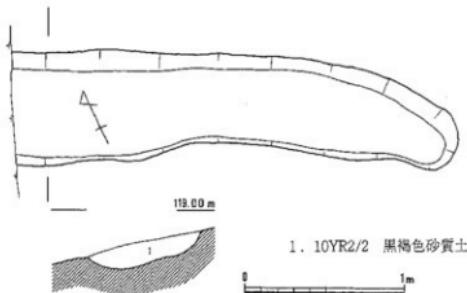


第50図 土壌10・11(1/30)



第51図 土壌10出土遺物

が、平面形はほぼ円形である。2段に掘削され、規模は長軸63cm、短軸42cm、深さ33cmをはかり、断面は皿形を呈する。底面の高さは標高118.58mで、土壌10の底面レベルより若干低い。遺物等は一切出土しなかった。



第52図 溝2(1/30)

溝2(第52図)

I C 区南側、標高119.00m付近に位置する溝である。北側1mに土壌9が位置する。溝の規模は西側が調査区外に続くが長さ2.78m、幅68cm、断面形は皿形で深さ15cmをはかる。遺構は黒ボク土での検出が困難なため、黄色砂質土面まで掘り下げて検出した。遺構埋土は、黒褐色砂質土が堆積している。

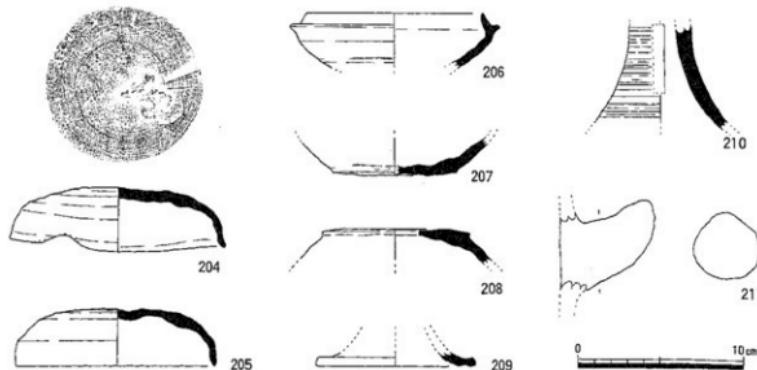
た。遺物は土師器の細片が出土したのみである。

#### その他の出土遺物

##### (I C 区黒ボク層)

黒ボク土は、厚く堆積していたが、中でも5、6層中から多くの遺物が出土した。大半は丘陵斜面の段状造構から流れた遺物と考えられる。

出土遺物は須恵器、土師器である。204、205は杯蓋である。204は口径13cmで天井部に回転ケズリを施す。口縁部がやや外反する。205は口径12cmで、天井部ヘラ切り後未調整である。206、207は杯身である。208は小破片だが、焼台と思われ、天井部に焼成前穿孔がみられる。209、210は高杯で、210はカキ目を施し長方形の透かしを開ける。211は土師器の把手である。

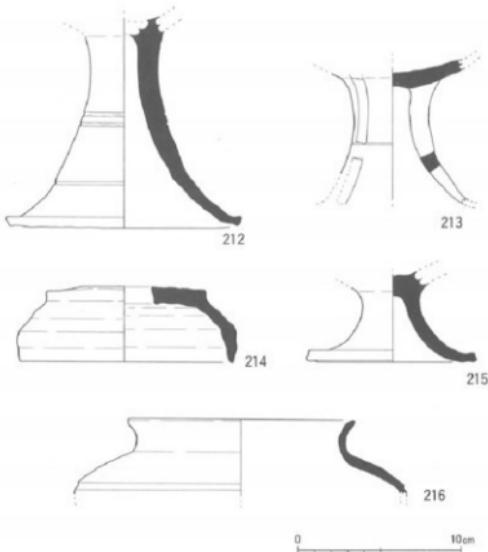


第53図 I C 区黒ボク層出土遺物

## (切池採集)

切池は丘陵の南側に位置する大きな池であり、水が引くと丘陵の続きが緩やかに南に延びるようである。丘陵の東側の谷の開けた位置から採集した。丘陵から流れた遺物と考えられ、また地元の人によると切池中にさらにおおくの土器が認められたようである。

採集遺物は須恵器である。212、213、215は高杯で、透かし孔を穿つもの、低脚のものとさまざまである。214は焼台で、焼成前の穿孔がみられる。216は壺で肩に沈線が施される。



第54図 切池採集遺物



IB区作業風景(西より)



IC区造成盛土土層断面(B-B')



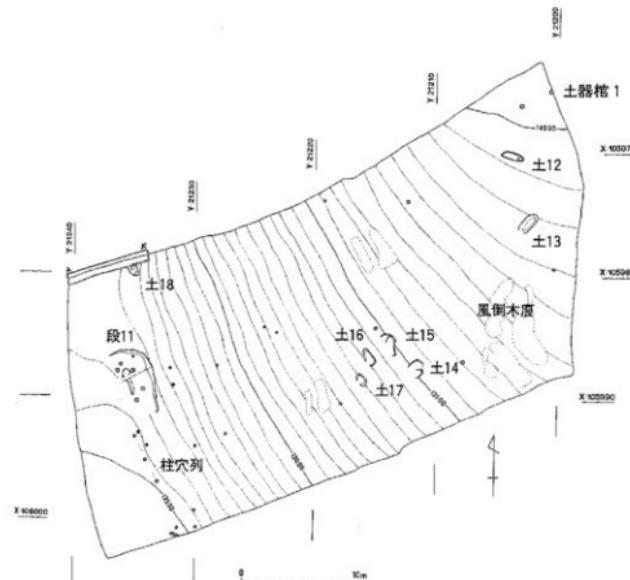
IC区谷部堆積状況(C-C')



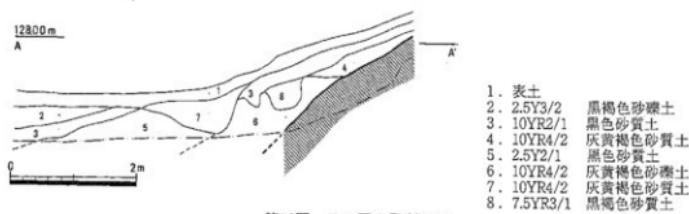
説明会風景( IB 区)

## 第4節 二次調査の概要

調査区は、傾斜のきつい丘陵西斜面と、谷を隔てて東側の小尾根に分かれる。基本層序は表土、流土である褐色砂質土、地山の順であり、谷部には黒ボク土及び流入土が厚く堆積している状況であった。遺構は、丘陵斜面では流土を除去し地山まで掘り下げた段階で検出した。丘陵据部では、流れた黒ボク土を掘り下げ、地山面で検出した。全体的に遺構の密度は低いが、II A区では主に丘陵据部に集中し、土器棺1、土壙が7基、段状遺構が1基が確認できた。遺物は、遺構に伴って出土したものは少ないが谷部の流れた黒ボク土からまとまって出土している。II B区では、丘陵頂上部からカマドを造り付けた堅穴住居1軒、斜面からは段状遺構3基、土壙3基、焼土壙1基、ピット等が検出された。遺物は、遺構からまとまって出土し、また谷部の黒ボク土からも多く出土している。



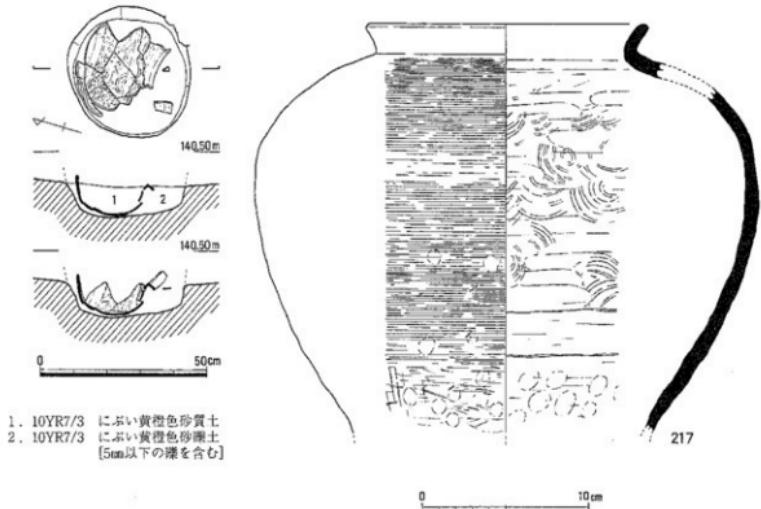
第55図 II A区遺構全体図



第56図 II A区土層断面図

## 1. II A区の概要

調査区は、丘陵の頂上部から、谷部までが範囲である。基本土層は、褐色砂質土が地山上に認められ、丘陵裾部から谷部にかけて黒ボク土が何層にも重なって堆積していた。後世に谷部、裾部分を削平しているが、遺構面はよく残っていた(第56図)。段状遺構は、丘陵裾部に1基のみ検出できた。付近には柱穴列、ピットが多数確認でき、頂上部よりも裾部のほうが密度が高かった。調査区内には風倒木痕も多数確認され、遺構と判別しがたいものも存在した。遺物は、段状遺構や、その他は大部分が丘陵裾の黒ボク土である流土中からの出土であり、土器がほとんどである。



第57図 土器館1・出土骨蔵器

## 土器館1 (第57図)

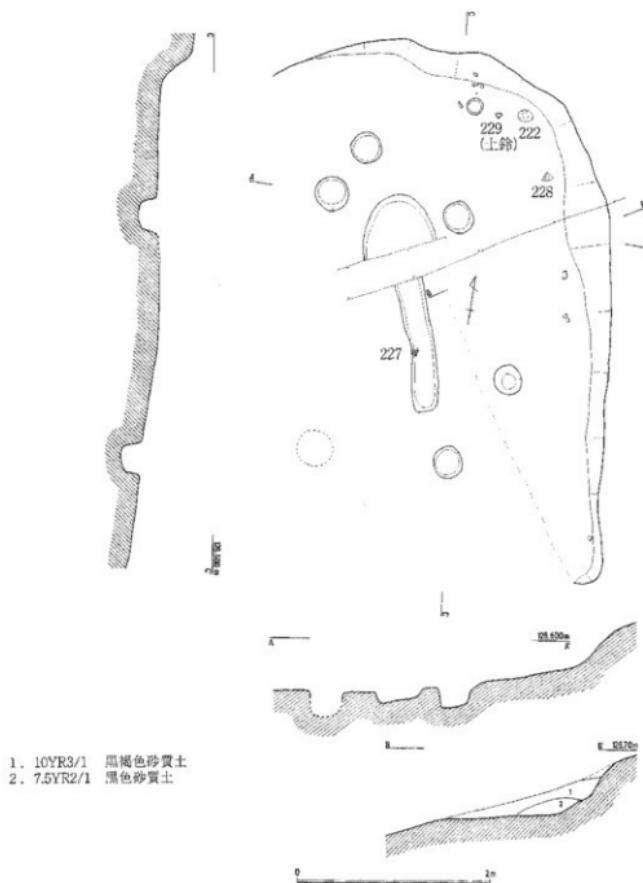
II A区東端、標高140.40mの頂上部に位置する。小土壠を掘削し、その中に土器を棺として転用して埋置していた。小土壠の規模は、長軸53cm、短軸50cm、深さ22cmをはかる。重機による表土掘削時に遺構上部をやや削ってしまったため深さは本来はもう少し深かったと考えられる。断面形は逆台形を呈し、底面の標高は140.30mで平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。土器は底部を壊し傾抜けにし、横倒しの状態で埋置されていた。内部にはにぼい黄橙色砂質土が堆積していた。217は棺に利用されたいわゆる薬師形壺である。底部は欠損しているが高台がついていたと考えられる。外面はカキ目調整で下部は指頭圧痕によりナデ消し、内面もナデが認められる。口縁部端は面をつくっておわる。

## 段状遺構11 (第58図)

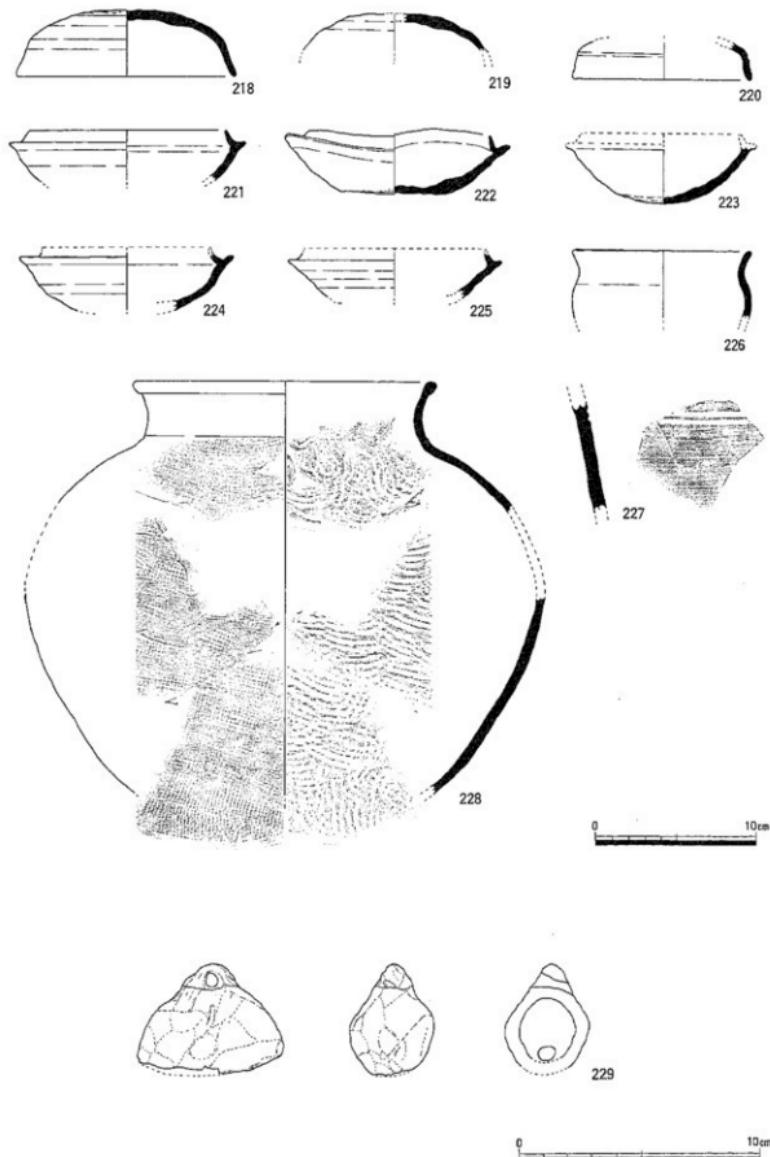
II A区西端の丘陵裾、標高126.50m付近に位置する。周辺には多くのピットが存在し、柱穴列1が南側2mの位置に存在する。段状遺構の中央は確認調査トレンチ13により削平している。遺構の規模は、谷側

がほとんど流されているため長さ5.0m、幅3.5mを残すのみである。平面形は不明瞭であるが長方形を呈する。造構の深さは山側で40cmをはかり、床面は標高126.05mの高さではほぼ水平である。柱穴は5つ確認でき、そのうち主柱穴は3つで、本来は4本柱と考えられる。柱穴はどれも20cm以下の小規模のものである。また、柱穴以外にも、土壙、溝等の施設が検出された。土壙は幅39cm、深さは10cmをはかり、溝は長さ65cm、幅13cmをはかる。周壁溝は確認できなかった。造構の埋土は、2層に分層できた。埋土は黒ボク土である黒褐色砂質土を中心とする。遺物は埋土中に少量認められた。

出土遺物は小破片が多かったものの須恵器、図示できなかったが土師器、土製鉢が認められた。218～220は杯蓋である。218は天井部に回転ケズリを施す。221～225は杯身である。222は完形品で口径11.2cm



第58図 段状遺構11(1/50)



第59図 段状遺構11出土遺物

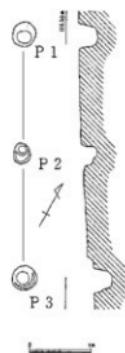
をはかり底部ヘラ切り後未調整である。226は小型鉢である。227は器台の脚部片と考えられる。2条の沈線がめぐり、体部にはカキ目を施す。228は壺である。黒ボク層から出土した破片と多く接合した。薄手のつくりで球形の体部に直線的に口縁部がのびる。

## (土製品)

229は土製の鉢である。形状はおむすび形で、卵形の本体に吊り紐部とする粘土を張り付け、それに2mm程度の小穴を貫通させている。本体は内部が中空で、内部に6mm大の小玉をいれている。

## 柱穴列1 (第60図)

II A区西端の丘陵裾、標高125.50m付近に位置する。掘立柱建物の可能性もあるが、谷側の柱穴は検出できなかった。柱穴は3つで、径30cm大のもので、等高線に沿って並び、柱穴間はP1P2間で200cm、P2P3間で210cmをはかる。埋土は、いずれも黒ボク土である黒色砂質土層が堆積していた。遺物は、P2から土師器の破片が1点出土しているのみである。



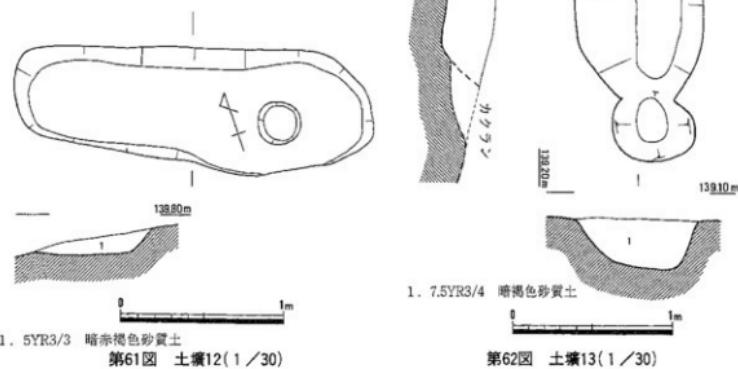
第60図 柱穴列1

## 土壤12 (第61図)

II A区東端、標高139.50m付近に位置する土壤である。平面形は長細い橢円形を呈し、長さ218cm、幅75cm、深さ11cmをはかる。断面形は皿形で、底面の高さは標高139.55mでほぼ水平である。床面東側に小ピットが確認できた。遺構埋土は一層で暗赤褐色砂質土が堆積していた。土器等の遺物は一切出土しなかった。

## 土壤13 (第62図)

II A区東端、標高139.00m付近に位置する土壤である。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、南西側が根株によって搅乱されているものの、長さ162cm、幅78cm、深



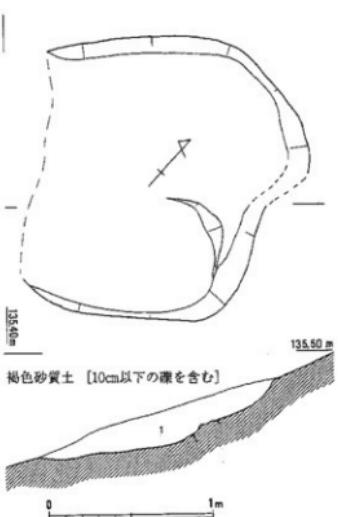
第61図 土壌12 (1/30)

第62図 土壌13 (1/30)

さ30cmをはかる。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ水平で、床面の高さは標高138.50mである。遺構埋土は一層で暗褐色砂質土が堆積していた。土器等の遺物は一切出土しなかった。

土壤14（第63図）

II A区中央、標高135.00m付近に位置する土壤である。北側2mの位置に土壤15が存在する。平面形は山側に階段状にくびれたようなくずれた方形を呈する。規模は、西側の谷部側が流されているが長軸170cm、短軸161cm、深さ22cmをはかる。断面は逆台形を呈し、底面はゆるい傾斜をもって下がる。床面は、南側が一段下がって底面が

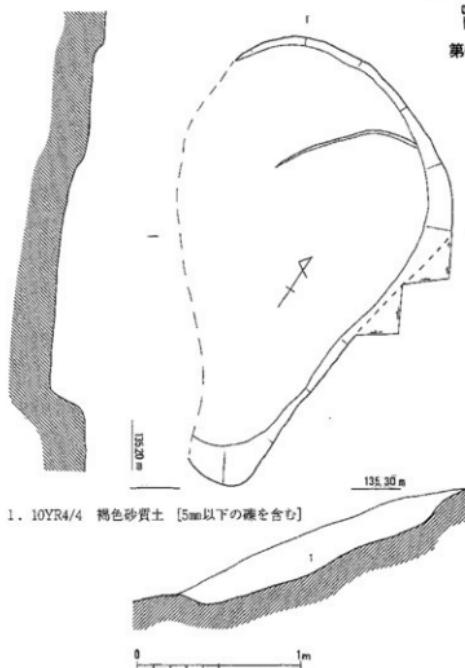


第63図 土壌14(1/30)

やや深くなっている。遺構埋土は一層で褐色砂質土が堆積していた。土器等の遺物は一切出土しなかった。

土壤15（第64図）

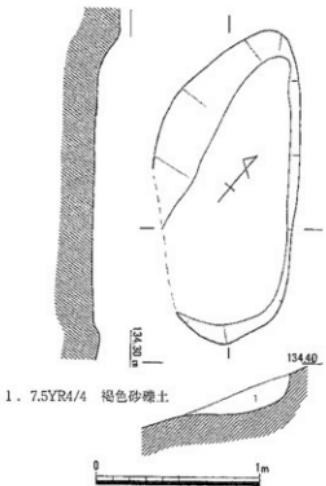
II A区中央、標高135.00m付近に位置する土壤である。平面形は不整円形を呈し、東南側がへこんだ形状である。規模は、長さ273cm、幅158cm、深さ22cmをはかる。断面は逆台形を呈し、底面はゆるく傾斜をもって下がる。床面は、中央部から南側が一段下がっている。遺構埋土は一層で褐色砂質土が堆積していた。土器等の遺物は一切出土しなかった。



第64図 土壌15(1/30)

土壤16（第65図）

II A区中央、標高134.00m付近に位置する土壤である。平面形は不整長方形を呈し、いびつである。規模



第65図 土壌16(1/30)

は、谷側が一部流されているが、長さ193cm、幅80cm、深さ13cmをはかる。断面形は亜形を呈する。床面はほぼ水平で、高さは標高134.10mである。遺構埋土は一層で褐色色砂質土が堆積していた。土器等の遺物は一切出土しなかった。

#### 土壤17（第66図）

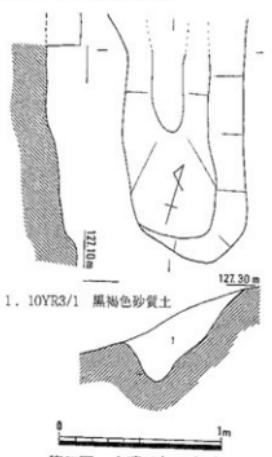
II A区中央、標高133.50m付近に位置する土壤である。平面形は梢円形を呈し、規模は、谷側が一部流されているが、長さ135cm、幅80cm、深さ24cmをはかる。断面形は亜形を呈する。床面はほぼ水平で、高さは標高133.36mである。遺構埋土は一層で黒褐色砂質土が堆積していた。土器等の遺物は一切出土しなかった。



第66図 土壌17(1/30)

#### 土壤18（第67図）

II A区東端の北側、標高127.00m付近に位置する土壤である。平面形は梢円形を呈し、規模は、北側が調査区外にのびるが、長さ149cm、幅72cm、深さ34cmをはかる。遺構は2段に掘削され、断面形は楕形を呈する。床面最深部の高さは標高126.68mである。遺構埋土は一層で黒褐色砂質土が堆積していた。土器等の遺物は一切出土しなかった。

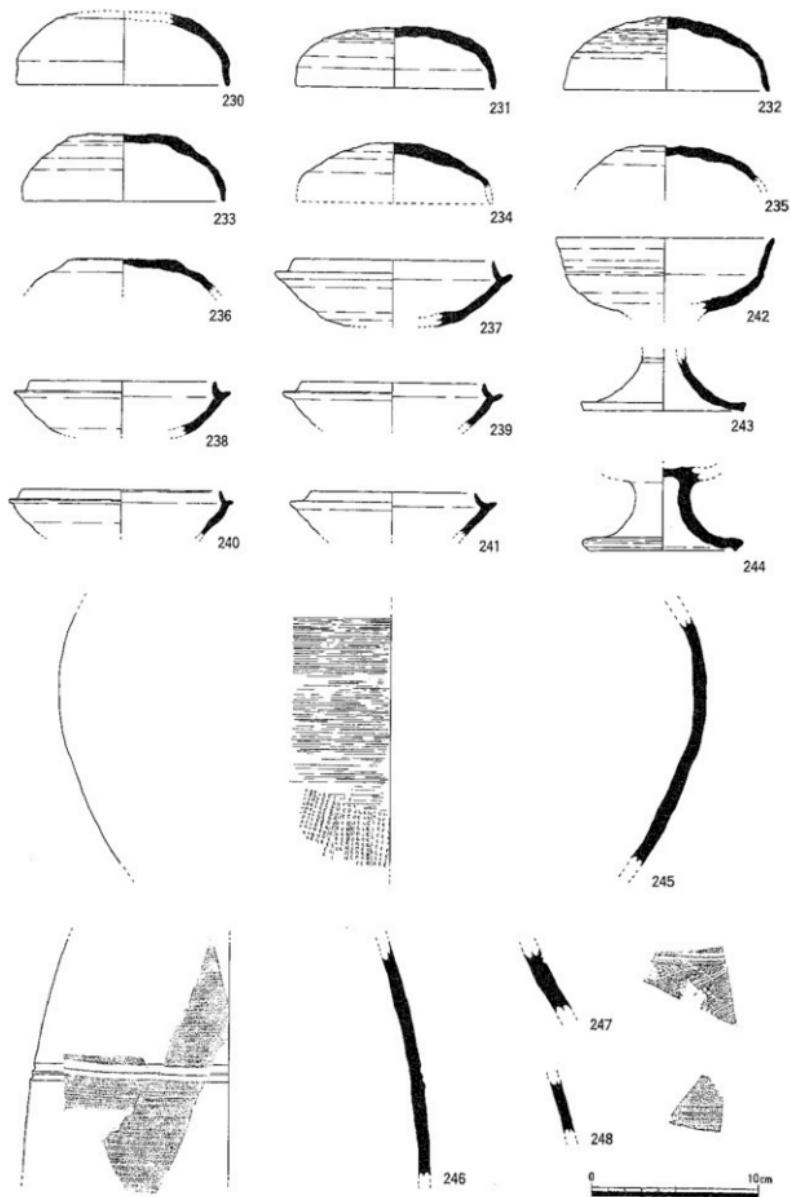


第67図 土壌18(1/30)

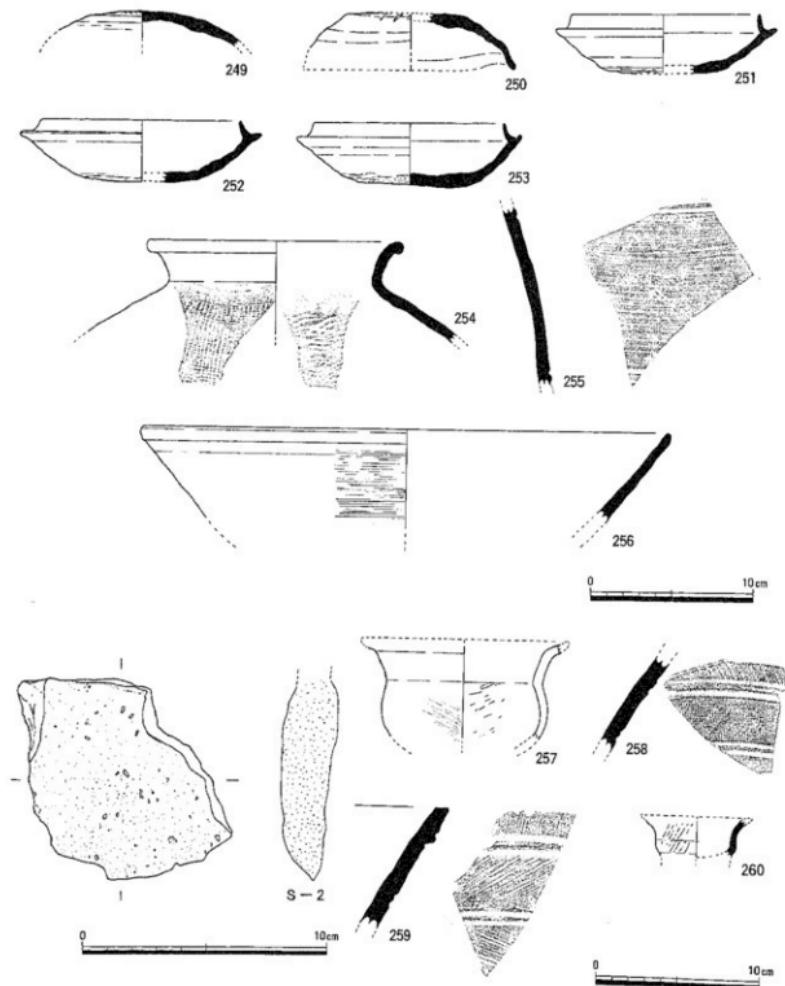
#### その他の出土遺物

##### (黒ボク層)

黒ボク層中からは多くの遺物が集中して出土している。そのおおくは、丘陵斜面からの流れ込みと考え



第68図 II A区黒ボク層出土遺物



第69図 II A区確認トレンチ出土遺物

られる。出土遺物は須恵器、図示していないが土器、石製品が出土している。230～236は杯盤である。230～233は口径12cm前後であり、231、232は天井部に回転ケズリを施し、233は天井部なでである。237～241は杯身である。237は口径12cm前後、238～240は口径11cm前後、241は口径10cmをはかる。242～244は高杯、245は壺の体部である。246～248は器台の脚部破片と考えられる。沈線がみられ、体部にはカキ目が認められる。またわずかに縦刻も観察できる。

## (確認トレンチ)

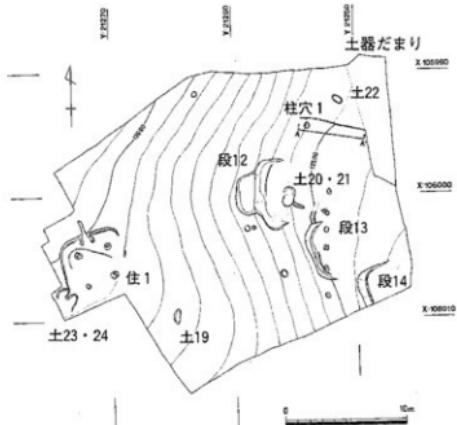
249～256は柱穴列付近、257～260は段状遺構11付近の確認トレンチから出土した。

出土遺物は、249、250は杯蓋である。251～253は杯身である。口径は251が11.4cm、252、253は11.9cmをはかる。254は壺の口縁部である。255、256は器台と考えられる。255は、2条が1組で上下間10cm離れて認められる。その間はカキ目が施される。256は外に開く口縁部で、外面カキ目後ナデ消し調整である。257は土師器の小型壺、258、259は壺の口縁部で、沈線等により加筋されている。260は須恵器のミニチュアの壺で、装飾器台の小壺であろうか。その他、川原石と思われるS-2も出土している。

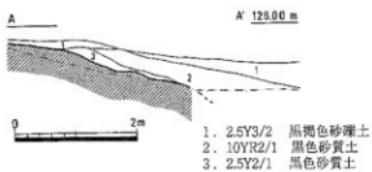
## 2. II B 区の概要

調査区は、西側丘陵の頂上部から谷部に及ぶ。土層は、地山が黄色粘質土で、その上層には黄褐色砂質土が堆積している。谷部では黒ボク土が堆積し、谷部に下がるにつれてより厚く堆積している(第71図)。

丘陵頂上部には、堅穴住居が存在し、カマドを造り付けている。ゆるやかな丘陵斜面には、段状遺構が3基近接して存在し、土壙、ピット等が存在する。遺物は、土器を中心であるが各遺構から多く出土し、ほかには鉄漆、瓦等が出土している。



第70図 II B 区遺構全体図

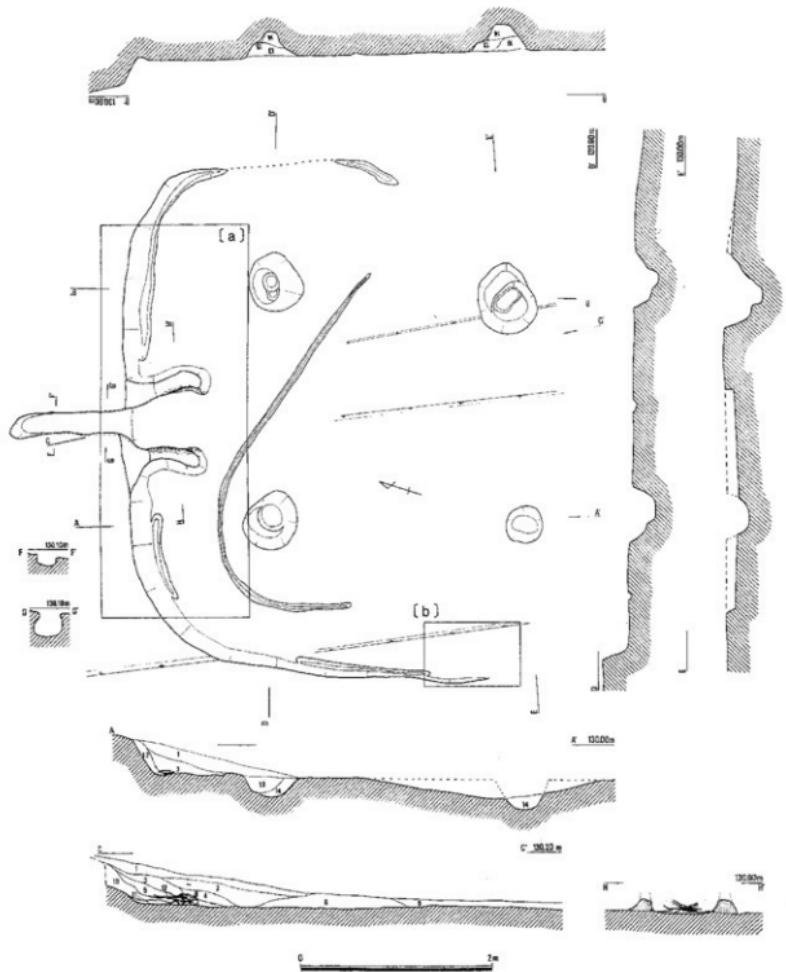


第71図 II B 区土層断面図

## 堅穴住居 1 (第72図)

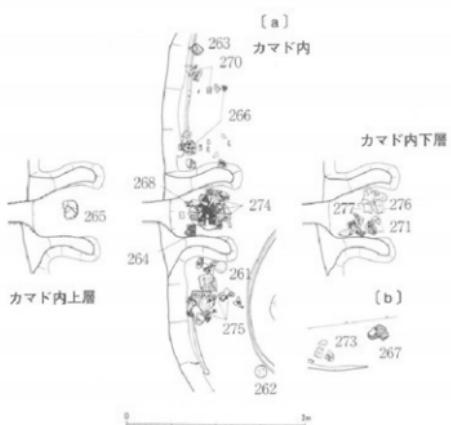
II B 区西端、標高130.00m付近に位置するカマド付きの堅穴住居である。丘陵頂上部に単独で存在し、土壙23・24が近接する。平面形は、ほぼ方形であり、規模は、南側及び、西側の一部が流されているものの東西の長さ5.2m、南北が4.2mをはかる。遺構の深さは、残りのいい山側で40cmをはかり、床面のレベルはほぼ水平である。主柱穴は4つで、どの柱穴もだいたい直径50cm前後、深

さ20cmでしっかりしている。奥壁を中心に周壁溝が巡り、住居の東側では周壁溝のみが残っていた。また住居の北西隅に沿い、東の谷に向けて1条の小溝が検出され、排水溝と考えられる。カマドは、住居の北側の壁、中央に付設され、住居外に煙道が1m延びる。カマド本体の規模は、長軸110cm、短軸80cmをはかり、カマドの壁の高さは上部が失われ15cmを残すのみである。カマドの壁は赤く被熱している。下部の土壙は無くほぼ平坦である。煙道は、断面が円形で、住居外にいくにつれてレベルが上がっていく。住



- |                                     |                                       |
|-------------------------------------|---------------------------------------|
| 1. 7.5YR2/1 黒色砂質土                   | 10. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土<br>[焼土、埴山土が混じる] |
| 2. 10YR3/1 黒褐色砂質土                   | 11. 2.5YR4/6 赤褐色粘砂質土 [焼土が混じる]         |
| 3. 10YR2/1 黒色砂質土                    | 12. 2.5YR3/2 黑褐色砂質土17                 |
| 4. 10YR3/2 黑褐色砂質土                   | 13. 7.5YR2/1 黒色砂質土                    |
| 5. 2.5YR4/2 黑褐色粘砂質土                 | 14. 10YR2/1 黒色砂質土                     |
| 6. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土<br>[カマドの崩落土か?] | 15. 10YR3/2 黑褐色砂質土 [地山土が混じる]          |
| 7. 10YR3/1 黑褐色砂質土 [炭を多く含む]          | 16. 10YR4/2 灰褐色砂質土                    |
| 8. 10YR3/3 黑褐色砂質土 [炭を含む]            | 17. 2.5YR4/6 赤褐色粘砂質土 [焼土が混じる]         |
| 9. 10YR4/4 黑色砂質土                    |                                       |

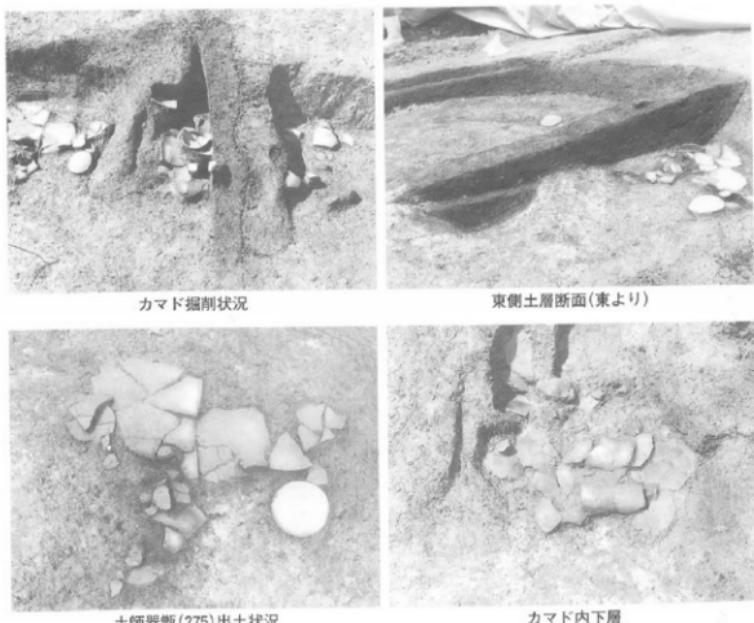
第72図 壇穴住居1(1/50)



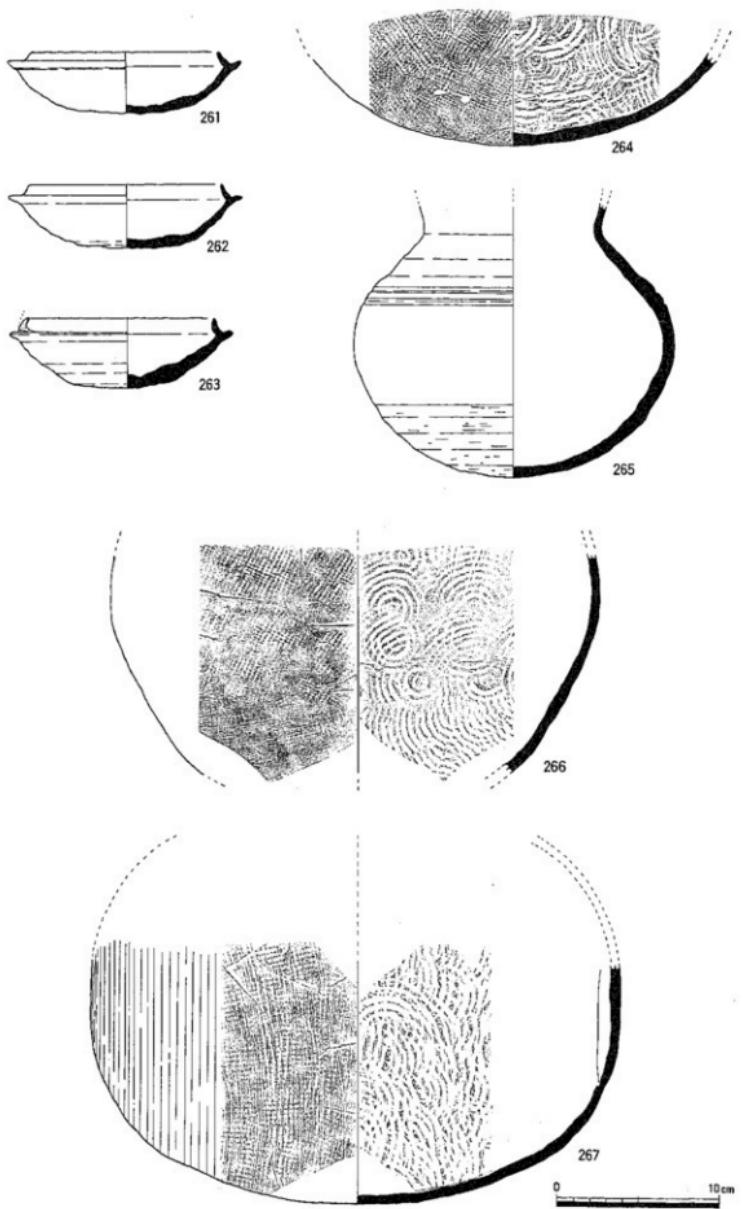
第73図 穴住居1遺物出土状況

居内の埋土は、黒色の砂質土が堆積し、カマド内は、黒色砂質土とともに焼土、炭屑が堆積していた。遺物は、住居の北壁に沿って多く出土し、床面に張り付いたものがほとんどである。また、カマド内部からは、瓶、壺等がつぶされたような状態で出土し、ほぼ完形に復元できた。

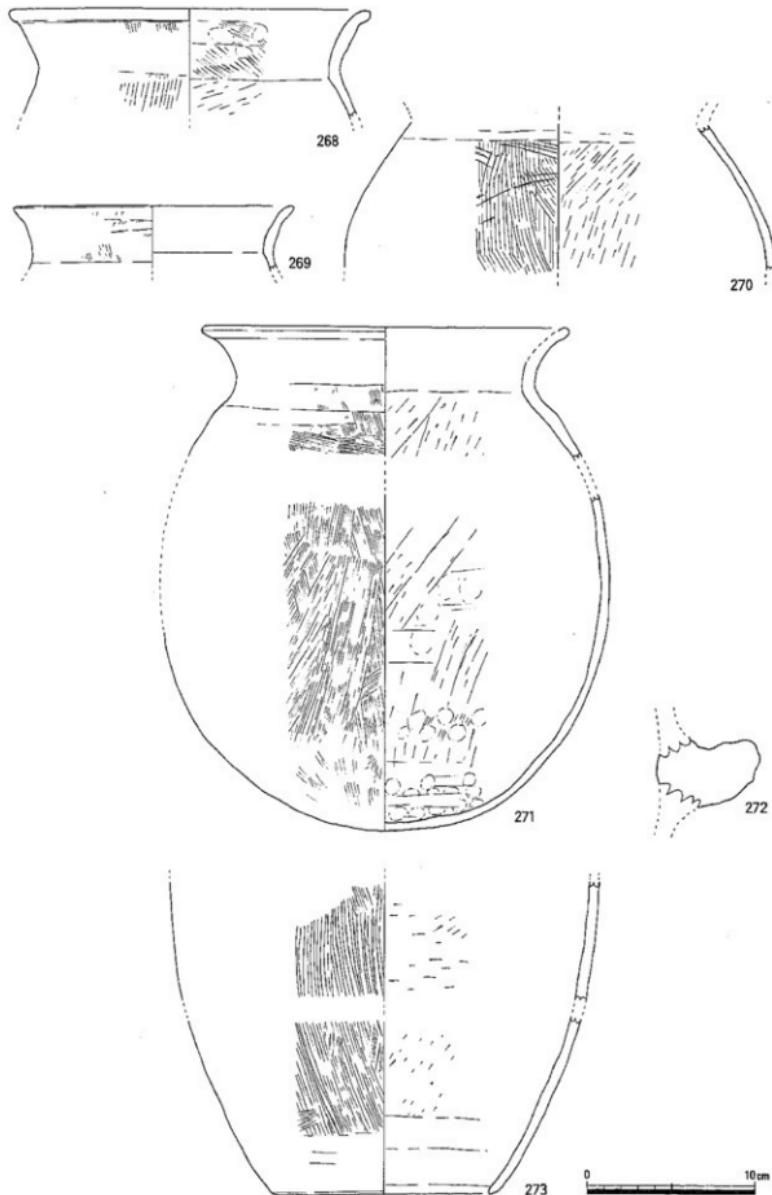
出土遺物は須恵器、土師器、土製品、鐵滓である。  
261～263は杯身である。  
261、262は完形、263もほぼ完形である。口径は3個



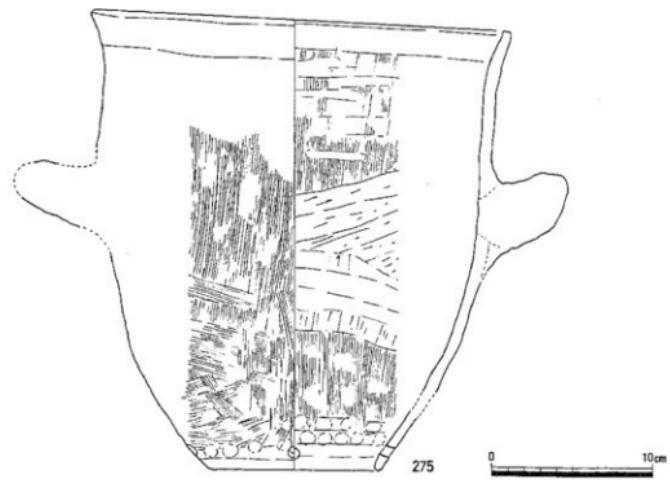
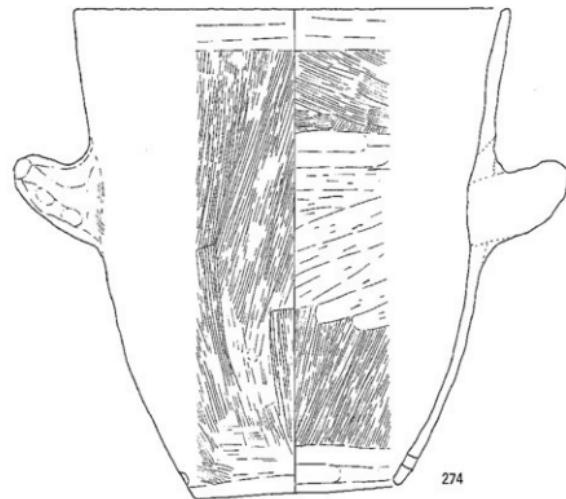
### 土師器甌(275)出土狀況



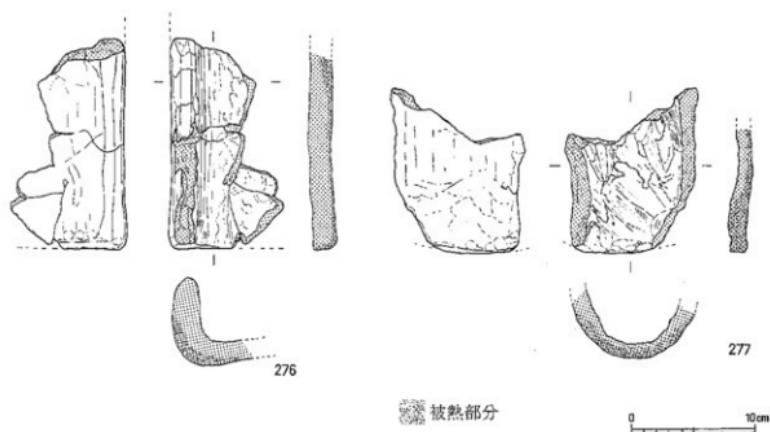
第74図 竪穴住居1出土遺物(1)



第75図 壺穴住居1出土遺物(2)



第76図 壁穴住居1出土遺物(3)



第77図 壑穴住居1出土遺物(4)

体とも11.2cmはかかる。261、262はつくりがシャープで、底部はナデによって丸みをもつ。263は261、262と径は同じであるが器壁が厚く見た目にも粗雑さが認められる。また杯蓋の口縁部の破片が付着している。これら3個体の違いは、生産地の違いか工人の違いによると考えられる。264～266は壺である。265は、カマド内部上唇、甕、瓶等の破片の上から出土した。肩部には2条の沈線がめぐり、底部付近は回転ケズリを施す。267は横瓶で、斜め方向の条線タキ後、縦方向のカキ目で調整している。268～271は土師器甕である。調整方法は外面縦ハケ、内面ケズリで、原体は違うがほぼ同じである。口縁部は屈曲外反し、体部との境は明瞭である。271はカマド内部下唇につぶれたような状態で出土したものである。272は把手で、273～275は瓶である。274はカマドの西側にまとめて出土したもので、ほぼ完形に復元できた。直線的な体部で、口縁部は面をもっておわる。底部には2方向に小孔が認められる。外面縦ハケ、内面ハケ、ケズリで調整する。275はカマド内部でつぶされたような状態で271と折り重なって出土したもので、ほぼ完形に復元できた。274とほぼ同じ大きさで、調整方法もほぼ同じである。口縁部は若干外反し、底部には4方向に小孔が認められる。

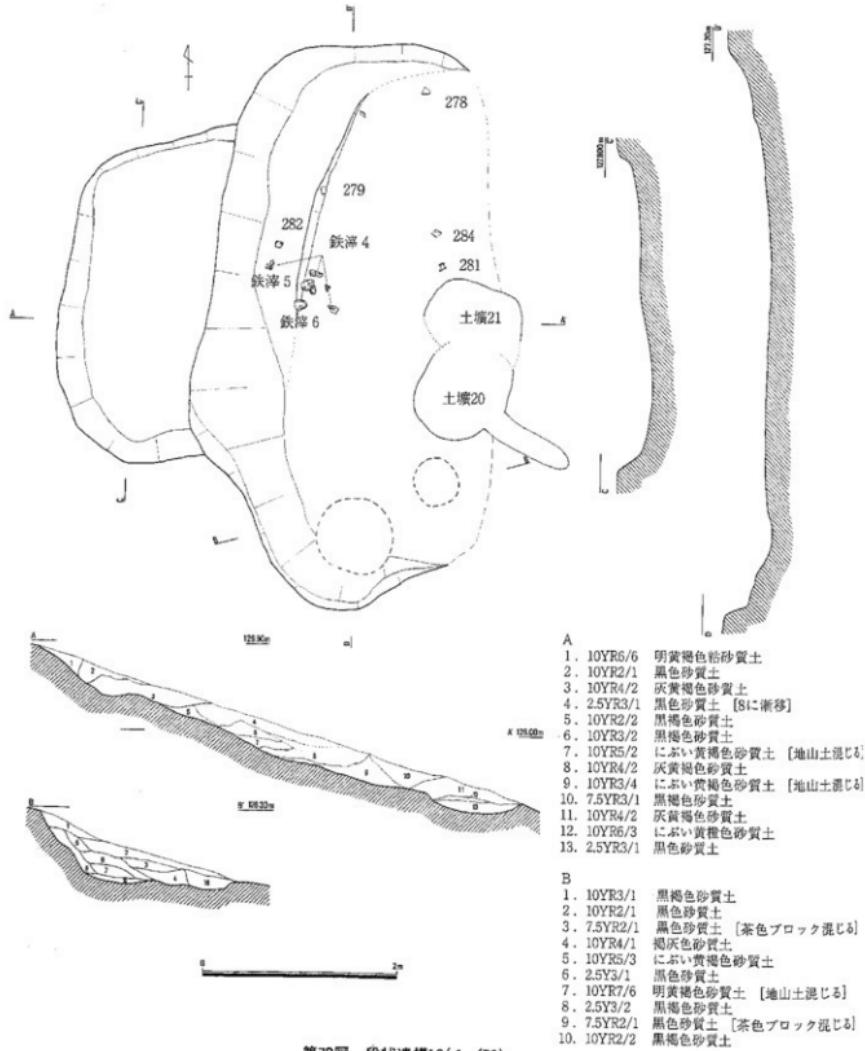
(土製品)

276、277はカマド内部、床面直上から凸面を上にして出土したものである。276は、下端は面をもっておわり、上端は残っておらず不明である。一辺を折り返したように断面し字形を呈し、その角は丸く収まる。折り返した側が内面、その反対が外面と考えられ、外面は丁寧に板ナデで調整され、被熱により黄灰色に変色している。内面は折り返しの絞り目が認められ、ナデで乱雑に整えられる。出土状態から支脚として使用されたと考えられるが、何らかの転用品か、支脚としての特注品か不明である。277は、下辺は面をもって終わり、上辺は残っておらず不明である。断面は円形に巡るようである。外面、内面はナデにより調整され、外面は被熱により黄灰色に変色する。276と同様に支脚として使用されたと考えられるが、小型であるが陶棺の脚部の転用品と思われる。

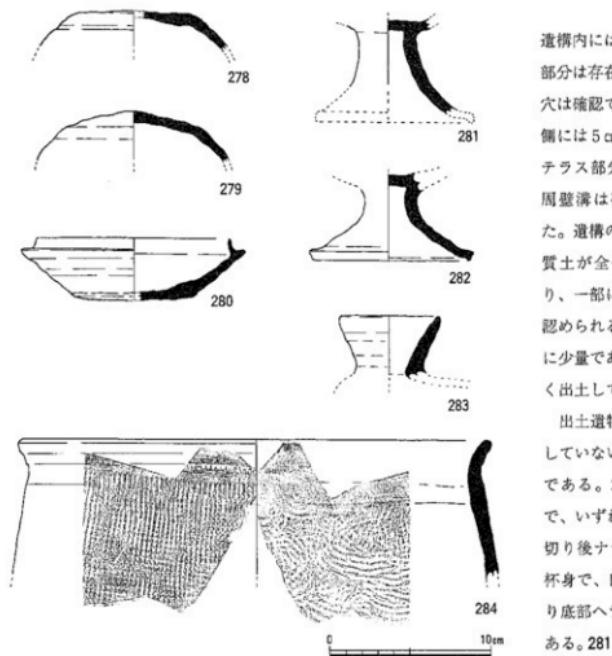
#### 段状遺構12（第78図）

II B区中央、標高126.00m付近に位置する段状遺構である。段状遺構東側に接するように土壙20、21が

存在している。段状造構の規模は、長さが5.7m、幅は東側が流れているため2.7mを残すのみであり、平面形は、長方形を呈する。そして西壁から山側に長方形のテラスが認められ、特異な形状を呈する。テラスの規模は長さ3.2m、幅1.3m、深さ25cmをはかる。造構の深さは40cmをはかり、床面のレベルは谷側にやや傾斜をもって下がるがほぼ水平である。壁の立ち上がりは、南側はきついが北側はゆるやかである。



第78図 段状造構12(1/50)



第79図 段状造構12出土遺物

考えられ、直線的にのびる口縁部でナデにより段がつくられる。外面は格子目タタキを施す。

#### 段状造構13（第80図）

II B区中央部南東寄り、標高125.00m付近に位置する段状造構である。段状造構12、14に挟まれる場所に位置する。北側に拡張の際の溝が延びるが残りはよくない。段状造構の規模は、拡張部を含めて長さが5.9m、幅は谷側が流されているため2.0mを残すのみである。平面形は長方形を呈する。造構の深さは20cmをはかり、床面はほぼ水平である。柱穴は6つ確認でき、主柱穴は段状造構の本体に3つ、拡張部に2つ存在している。柱穴の規模は直径30cm前後がほとんどであり、柱穴間も150cm前後で整然と並ぶ。周壁溝は、奥壁に沿って南半分のみ確認できた。造構の埋土は、黒褐色砂質土が堆積しており、2層に分層できた。遺物は、南端、中央部にまとまって出土している。

出土遺物は須恵器、土師器、石製品である。285、286は杯蓋で、それぞれ口径が13.5cm、12.5cmをはかる。いずれも天井部はヘラ切り後未調整で、285は天井部に「×」のヘラ記号が認められる。287、288は杯身で、いずれも口径は11cm前後で底部はヘラ切り後ナデを施す。287はやや器壁が厚いのに対し、288はシャープなつくりである。289～291は高杯である。292は壺で、自然釉が付着する。底部は回転ケズリを施す。293～296は壺である。296は器壁が厚くやや大型である。297～299は土師器壺である。297、298は同一個体と考えられ、外面には粗いハケを施す。299は口縁部が直線的にのびて口縁端をやや外反させ、外面ハケ、内面ケズリで調整する。300は把手である。301は須恵器壺、壺等の破片が3つ重なったもので、

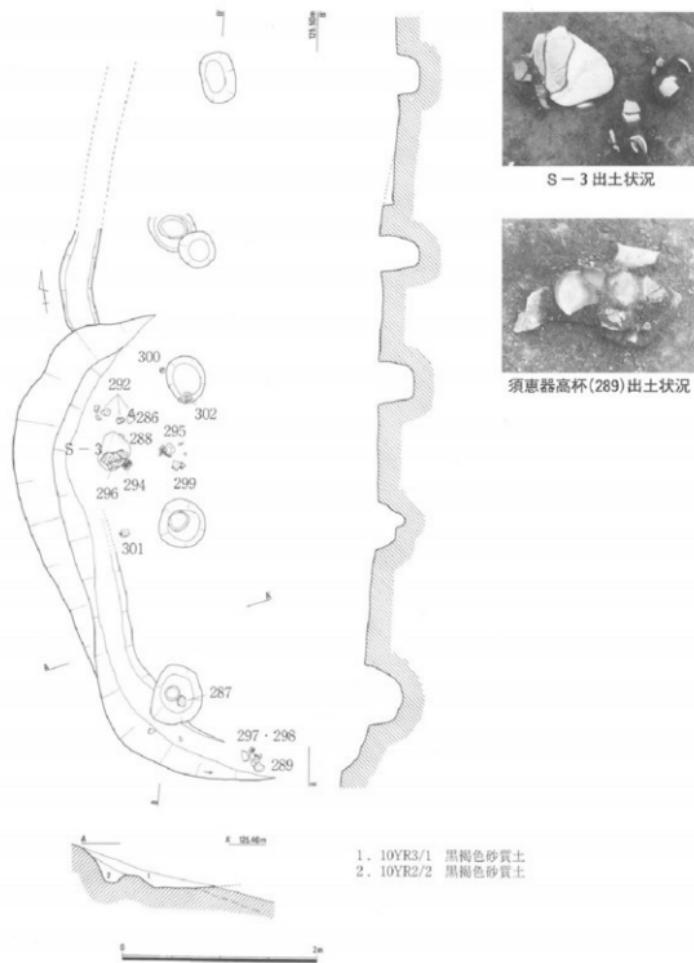
造構内には、ややくほんだ部分は存在するが明確な柱穴は確認できなかった。北側には5cmほど高くなかったテラス部分が存在するが、周壁溝は確認できなかった。造構の埋土は、黒色砂質土が全体に堆積しており、一部に地山混じり土が認められる。遺物は全体的に少量であるが、鉄滓は多く出土している。

出土遺物は須恵器、図示していないが土師器、鉄滓である。278、279は杯蓋で、いずれも天井部はヘラ切り後ナデを施す。280は杯身で、口径11.6cmをはかり底部ヘラ切り後未調整である。281、282は高杯、283は平瓶である。284は壺と

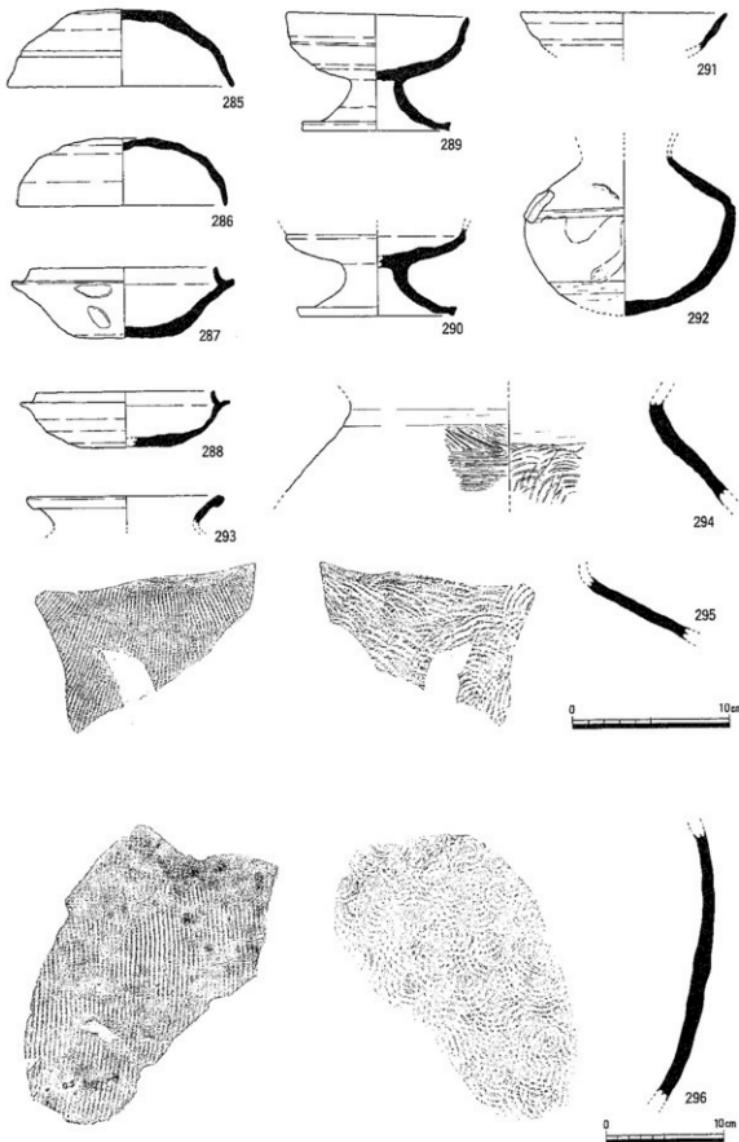
焼台に転用されたものであろうか。302は他の土師器に比べて器壁が厚く外面ハケ、内面ナデを施し、移動式カマドの体部と思われる。

(石製品)

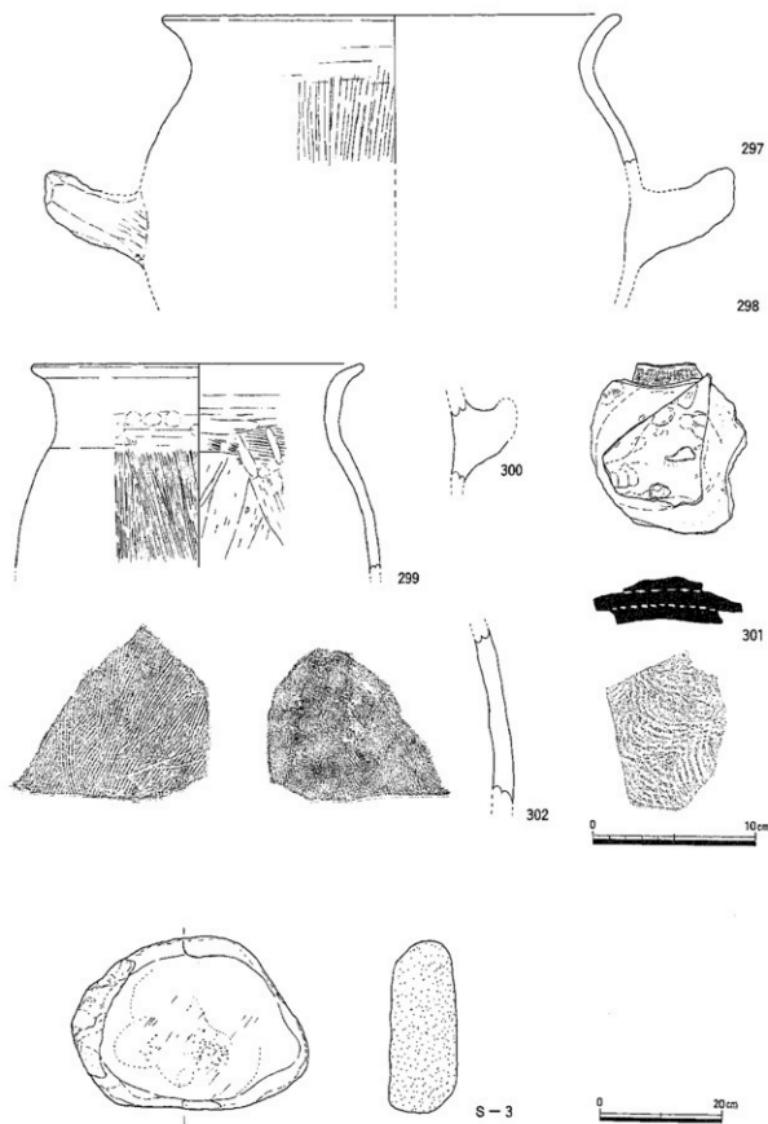
S-3は平面楕円形で38cm×28cmをはかる石製品で、断面は一辺がへこんだような形状である。へこんだ側の凹面にはわずかに数条の条線が観察でき、使用痕を示す。用途としては鉄床石が考えられる。



第80図 段状遺構13(1/50)



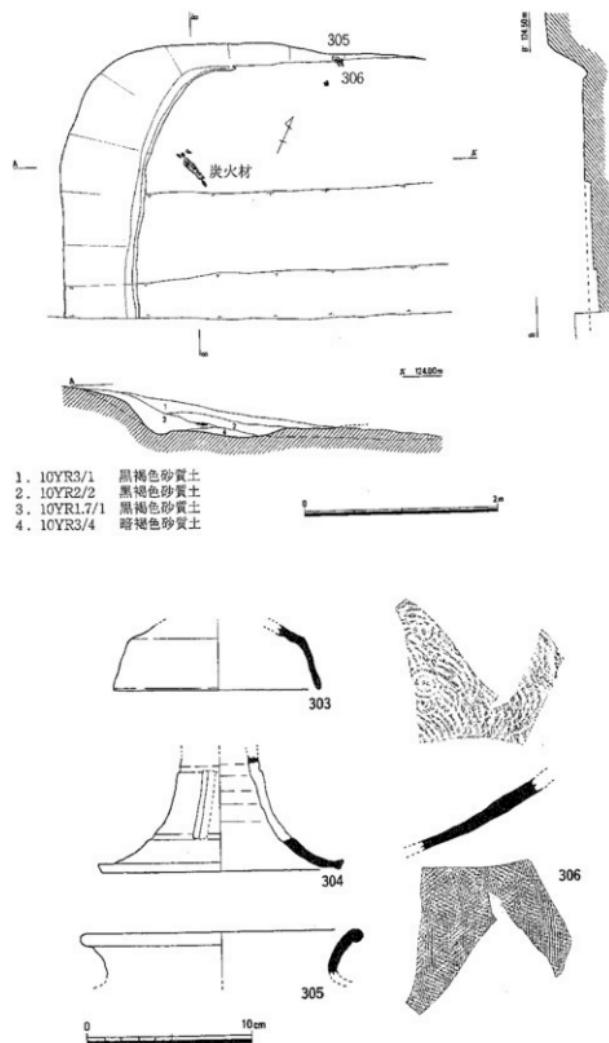
第81図 段状遺構13出土遺物(1)



第82図 段状遺構13出土遺物(2)

## 段状遺構14（第83図）

II B区南東端、標高124.00m付近に位置する段状遺構である。平面形は、方形を呈する。規模は、南側が調査区外に延びるため、検出した範囲で長さ2.8m、東側は流されているため幅3.9mを残すのみである。



第83図 段状遺構14(1/50)・出土遺物

遺構の深さは、30cmをはかり、床面はほぼ水平である。柱穴は、確認できなかった。壁に沿って周壁溝が検出でき、全周しているようである。東端に地面が被熱して赤褐色に変色した部分も存在した。遺構の埋土は、黒色砂質土が堆積している。黒ボク土から、遺構が切り込まれているため非常に検出しにくかった。遺物は、少量出土している。また、35cmの長さの炭火材が認められた。出土遺物は須恵器である。303は杯蓋で、直線的な口縁部である。304は高杯で、長方形の透かしが認められる。305、306は壺である。

## 土壤19（第84図）

II B区西側、標高128.70m付近に位置する土壤である

る。北側5mの位置には整穴住居1が存在している。平面形は不整橢円形を呈し、東側がへこんだ形状である。規模は、長さ117cm、幅54cm、深さ24cmをはかる。断面形は皿形を呈し、底面の標高は128.37mである。遺構埋土は一層で黒褐色砂質土が堆積していた。土器等の遺物は一切出土しなかった。

## 土壤20（第85図）

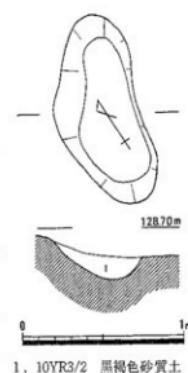
II B区中央、標高125.50m付近に位置する土壤である。段状遺構12の底面の東端に位置し、土壤21を切って構築されている。段状遺構12との切り合い関係は判然としなかった。平面形は、北側が削られているがほぼ円形と考えられ、規模は、長軸98cm、短軸90cm、深さは、上部が流されているため5cmと浅い。断面は逆台形で、底面はゆるい傾斜をもつ。また、東南方向に、長さ180cm、幅50cmの深い溝がのび、土壤に接続する。この溝は土壤20に付随するものであろう。土壤の埋土は1層で、黒褐色砂質土が堆積していた。遺物は密集して多く認められた。

出土遺物は須恵器、土師器、鉄滓である。307、308は杯蓋である。308は杯G蓋であり、かえ

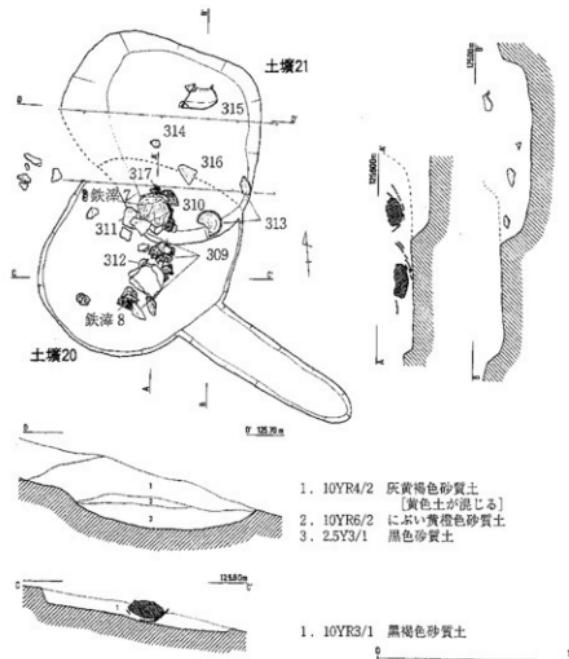
りは突出する。309は壺である。外面はナデにより丁寧に調整され、焼成不良のため赤褐色を呈する。310は把手付鍋である。311、312は土師器甕である。外面縁ハケ、内面ケズリを施す。

## 土壤21（第85図）

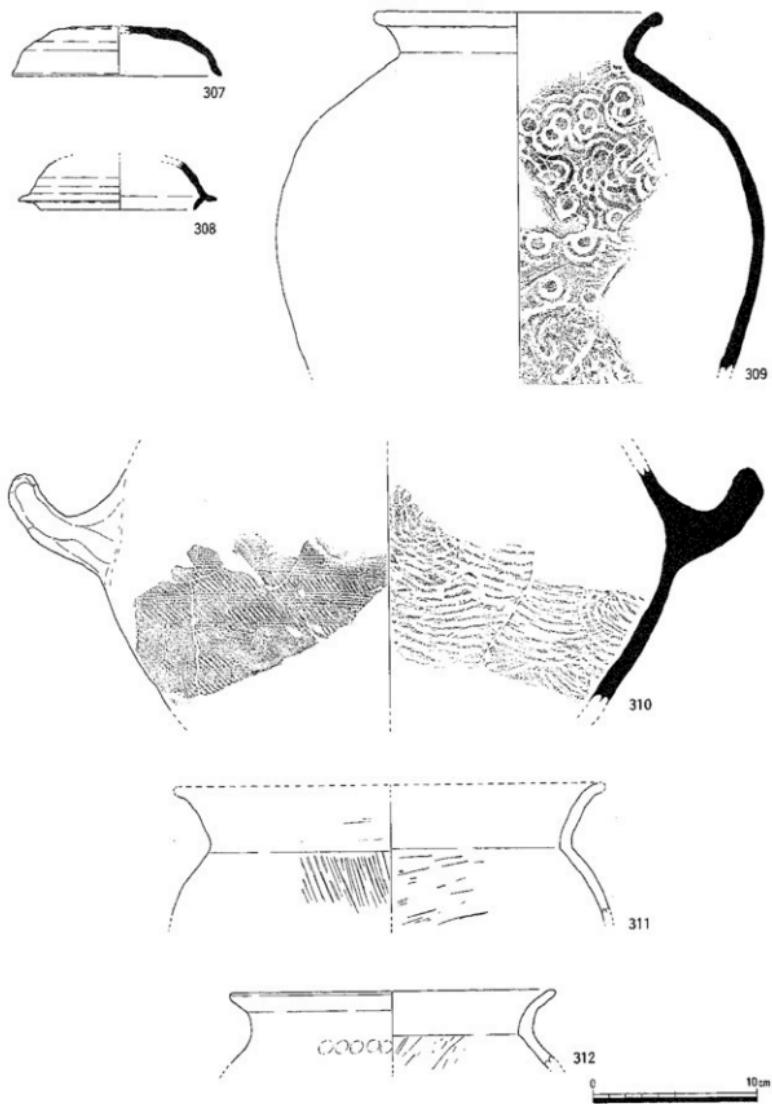
II B区中央、標高125.50m付近に位置する土壤である。段状遺構12の底面の東端に位置し、土壤20に南側を切られている。平面形は、いびつな円形を呈し、規模は、長軸106cm、短軸103cm、深さ30



第84図 土壤19(1/30)



第85図 土壌20・21(1/25)



第86図 土壌20出土遺物

cmをはかる。断面は皿形を呈している。土壌の埋土は土層断面で見る限り、上部は段状造構12の堆積層に覆われ、土壌21の純粹な堆積層は第3層の黒色砂質土層のみであろう。遺物は床面から浮いた状態で出土している。

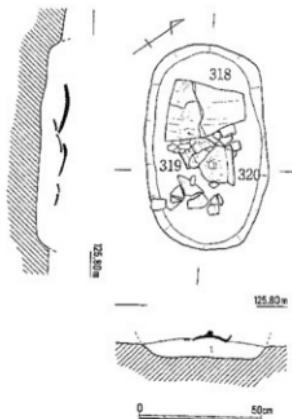
出土遺物は須恵器である。313は杯身である。口径は11.7cmをはかり、平底の底部に直線的にのびる体部であり、底部はヘラ切り後ナデ調整である。杯蓋の口縁部破片が付着する。314は高杯、315、316は壺である。315は口縁部が2段に立ち上がる。体部には細かなカキ目を施し、内面はナデで調整する。

土壤22（第88図）

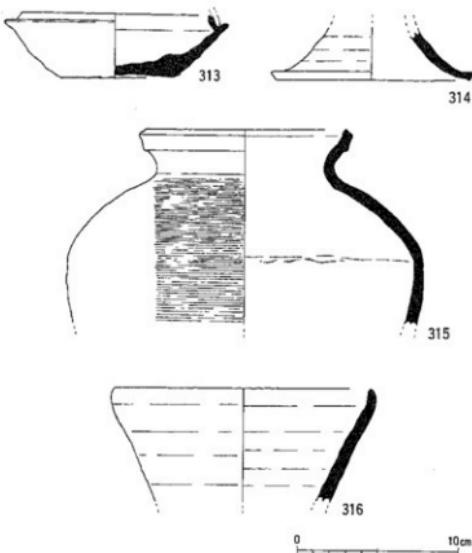
II B区東北端、標高125.50m付近に位置する土壌である。表土層直下の黒ボク層を掘り下げ中に検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は、長さ83cm、幅50cmをはかり、深さは8cmを残すが本来はもう少しあったと考えられる。断面は、浅い皿形を呈し、底面は標高125.58mの高さで水平である。遺構埋土は、1

層で焼土と考えられる暗赤色砂質土が堆積している。また検出段階からも土壌上部には焼土がおおく認められた。

出土遺物は須恵器、土師器である。317は須恵器の大壺である。外面は格子タキ後横ハケを施し、内面は同心円文であるが胴部に横方向のナデが認められる。318は鍋である。319は把手付鍋で、球形の体部に口縁部は外反する。外面縦ハケ、内面ケズリを施す。



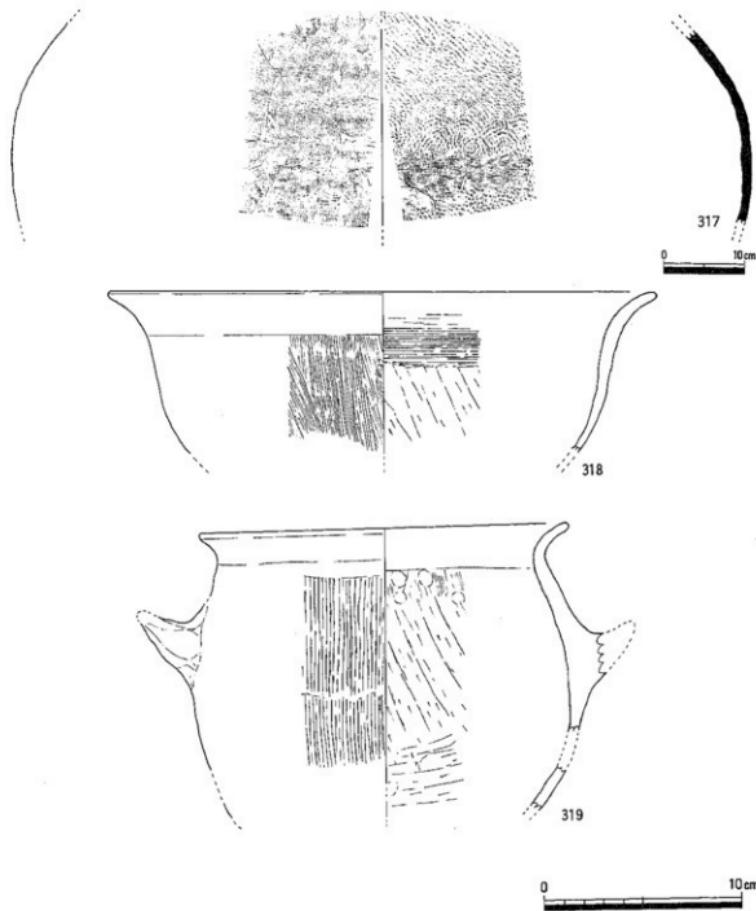
1. 10YR3/6 暗赤色砂質土〔施土層〕  
第88図 土壌22(1/20)



第87図 土壌21出土遺物

土壤23（第90図）

II B区西端、標高129.70m付近に位置する土壌である。すぐ北側に接して竪穴住居1が存在し、南に土壌24が接する。平面形は楕円形を呈し、規模は、西側が根株によって擾乱されているため長軸120cmを残すのみであり、幅62cm、深さ12cmをはかる。断面は逆台形を呈し、底面は、標高129.48mの高さでほぼ水平になっている。遺構埋土は一層で黒褐色砂質土が堆積していた。土器等の遺



第89図 土壌22出土遺物

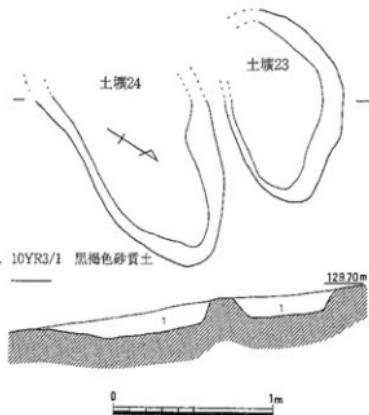
物はいっさい出土しなかった。

#### 土壤24（第90図）

II B区西端、標高129.70m付近に位置する土壌である。北側に土壌23が接して存在している。平面形は、西半が擾乱されているが楕円形と考えられる。規模は、長軸112cmを残すのみであり、幅は90cm、深さ10cmをはかる。断面形は逆台形を呈し、底面は、標高129.35mの高さでほぼ水平になっている。遺構埋土は一層で黒褐色砂質土が堆積していた。土器等の遺物はいっさい出土しなかった。

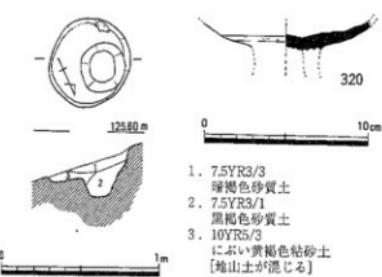
## 柱穴1 (第91図)

II B区東側、標高125.50m付近に位置する柱穴である。南西4mの位置に段状遺構12が存在する。検出されたのは1つで建物としてはまとまらなかった。平面形は円形で、53cm×50cmの掘方で内部に径27cmの柱穴が存在し、深さは22cmを測る。断面は階段状になり、柱穴底面は平坦である。埋土は3層に分層でき、柱穴内には黒褐色砂質土が堆積していた。遺物は少量出土している。320は須恵器の高杯である。



## 土器だまり (第92図)

II B区北東端で、遺物が集中して認められた。西3mの位置には土壌22が存在する。出土遺物は須恵器、土師器である。321は杯身Gであり、底部はヘラ切り後回転ケズリを施す。322は高杯、323は壺である。324は壺蓋であろうか、かえりが大きくなり、外面に回転ケズリを施す。325は台付碗である。326は土師器の瓶、327~329は土師器壺である。330は把手、331~333は、移動式カマドの一部と考えられる。331、332は庇、333は焚口の破片と思われる。



第91図 柱穴1 (1/30)・出土遺物



第92図 II B区土器だまり(1/40)

## その他の出土遺物

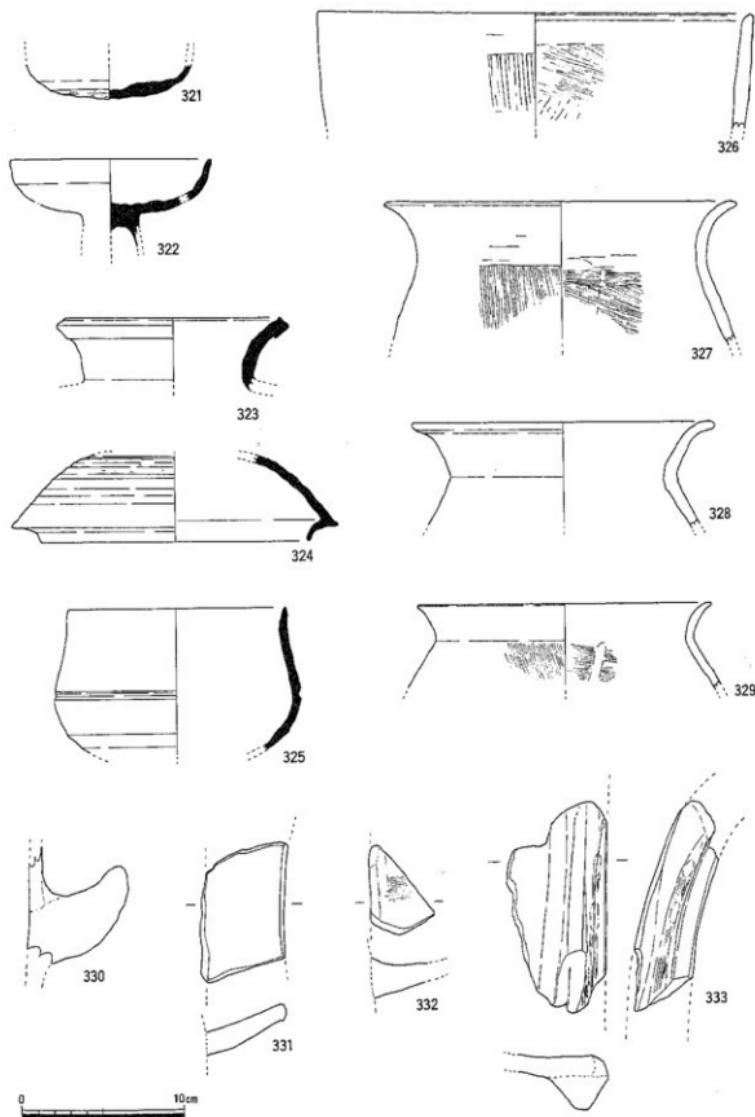
## (黒ボク層)

谷部の黒ボク層、特に北側付近で多く出土した。334~336は杯蓋である。335、336は壺蓋Gであり、335は天井部ナデ、336は天井部回転ケズリを施す。337は提瓶、338、340は壺、339は甌である。339は底部回転ケズリを施す。340も底部に回転ケズリを施す。341は土師器鍋で外面、内面ハケを施す。342は土師器鍋で外面、内面ハケ調整である。口縁部は折り返し、ナデによって段を有する。この1点のみ中世の遺物である。

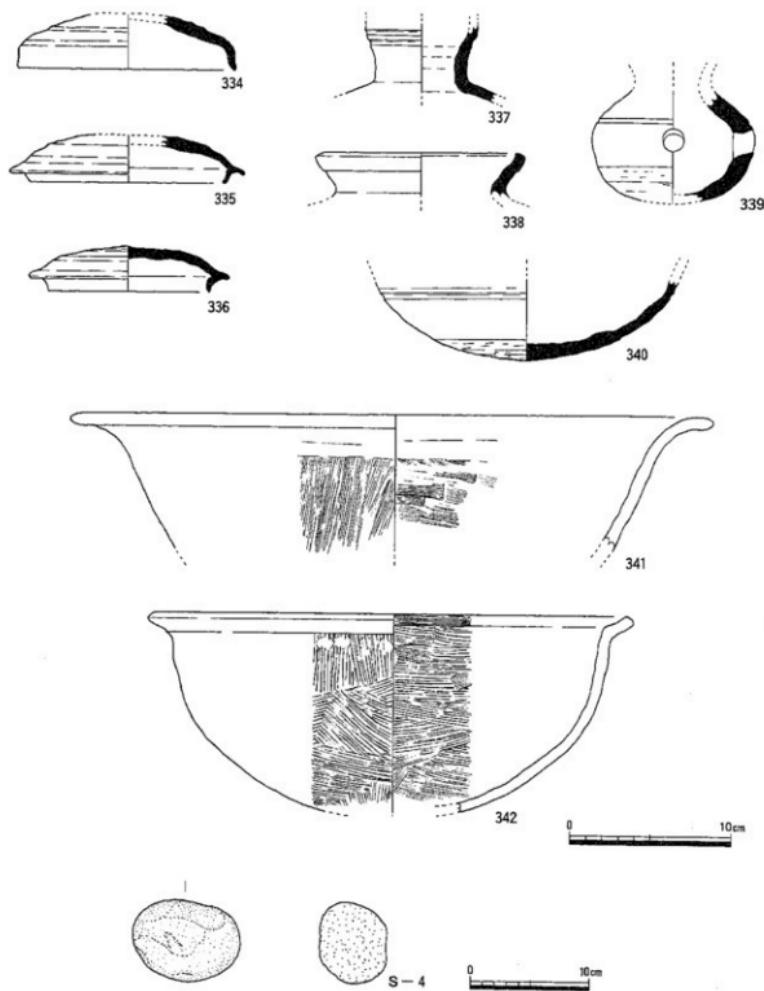
## (確認調査)

段状遺構12の南側のトレンチである。

出土遺物は土師器である。343、344は土師器の壺であ



第93図 II B区土器だまり出土遺物



第94図 II B区黒ボク層出土遺物

る。343は口縁部は直線的にのび、器壁は厚めである。外面は継ハケ後横ハケ、内面はケズリを施す。344は、外反する口縁で、外面継ハケ、内面ケズリを施す。

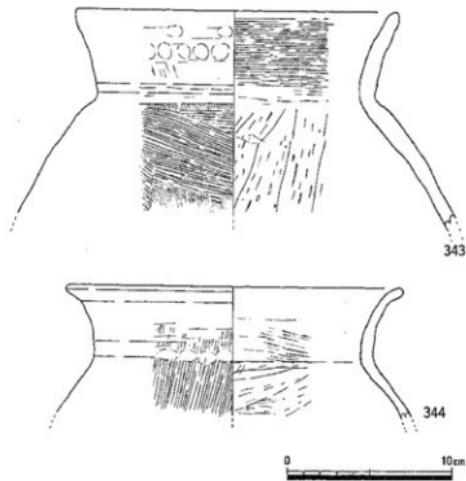
瓦（第96・97図）

瓦はすべてII B区の黒ボク層から出土し、遺構に伴うものはない。種類は平瓦で、特徴は端部は面取り

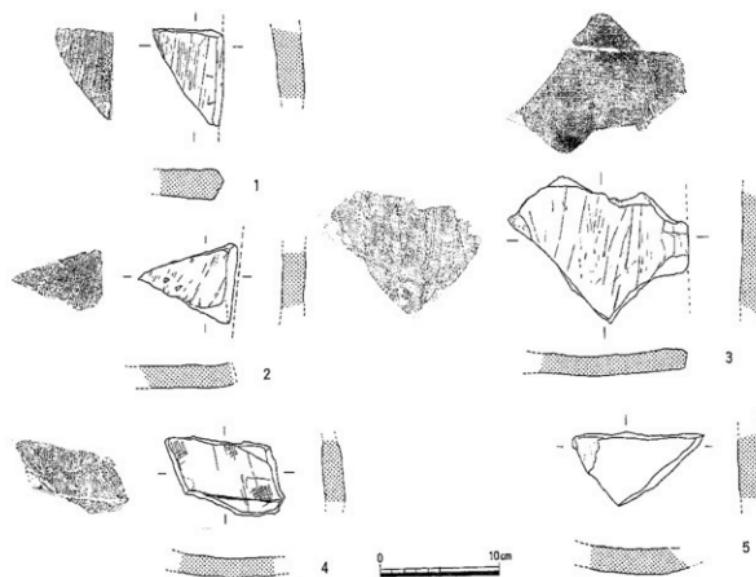
を行い、形状が三角形に尖るもの(1)、普通に面をもって終わるもの(2、3、7、12)があり、凹面はハケが認められるもの(1)、ケズりが認められるもの(3、10、11)、布目痕を残すもの(4、6、7、9、12)が存在する。

## 鉄滓 (第98図)

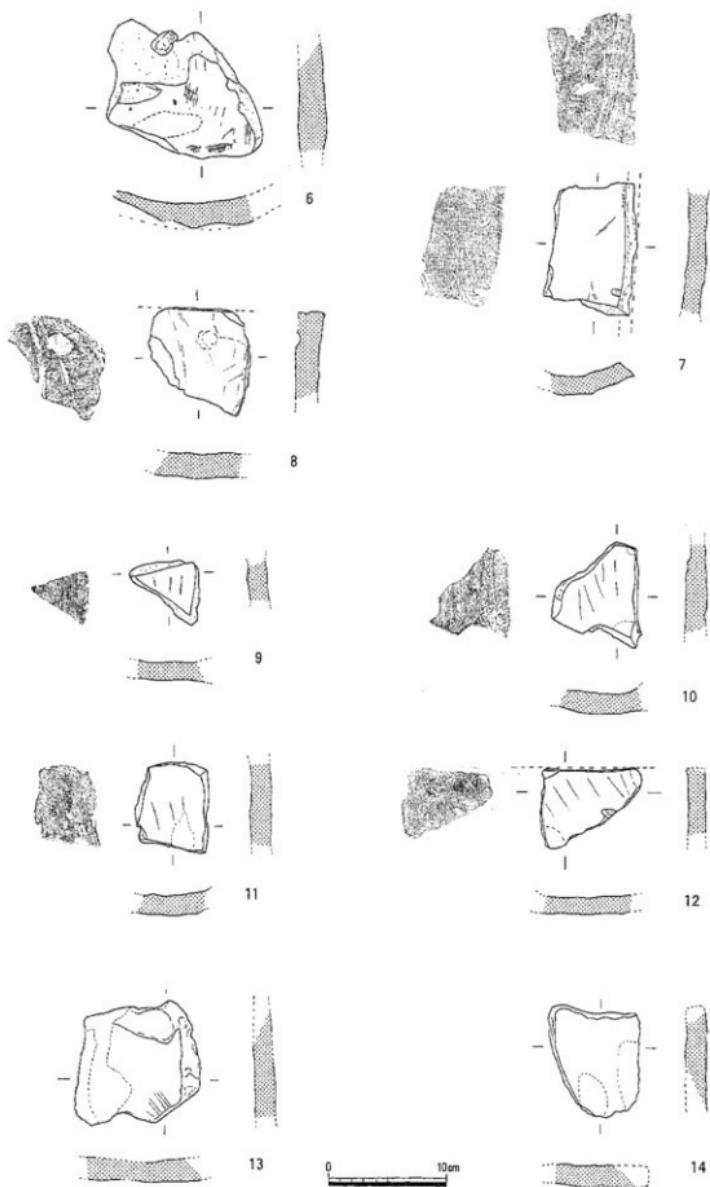
ここでは、各遺構出土の主な鉄滓を掲載している。全体的に炉壁の付着する炉底滓が多く、2、8のような流出滓、3のような椀形滓もわずかに認められる。すべて磁石に反応せず鉄分を失っている。一部には、砂鉄が溶けきらずに残っているものもある。



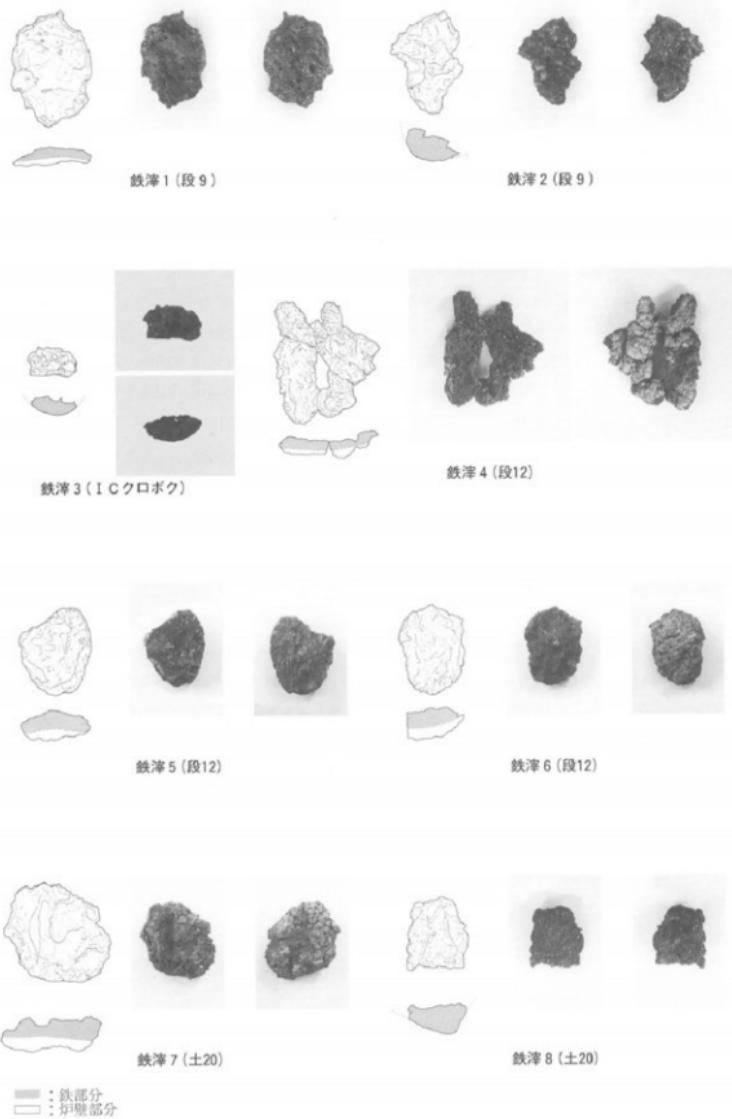
第95図 II B区確認トレンチ出土遺物



第96図 II B区出土瓦(1)



第97図 II B 区出土瓦(2)



第98図 出土鉄滓(1／8)

## 第4章 まとめ

### 第1節 出土須恵器の検討

福吉丸山遺跡（以下、丸山遺跡と略す）はおおむね7世紀頃の集落遺跡であり、山間部特有の丘陵斜面地を造成した段状造構等がおおく認められる。出土遺物については、須恵器、土師器等の土器類が非常に多く、その他にも鉄器、土製品、石製品、鉄滓等が少量ながら出土している。須恵器では、杯類をはじめさまざまな器種が存在し、土師器では煮沸具がまとまって出土している。土製品では、壺や土鉢、不明製品なども存在し、当時の集落の調査例が少ない現状にあってより具体的な資料を提供すると思われる。

以下では、まず須恵器について検討して各遺構の時期決定を行い、集落内の変遷、遺跡の性格についてまとめていきたい。

#### 1. 須恵器の変遷について

丸山遺跡の出土土器は、おおむね7世紀代の土器にあたる。この時期は律令体制下の新しい土器様式が成立し、須恵器生産における一大画期と考えられている<sup>(1)</sup>。当時の歴史像は、土器の詳細な編年と年代観に基づいて把握されるものであり、また、中央と対比される地方における7世紀の様相を考える上で欠かせないものである。そのため本遺跡においても土器の変遷について検討していくが、出土須恵器のうち変化が捉えやすく普遍的に出土している杯類を取り上げることにする。7世紀の土器の編年は、和泉陶邑古窯址群の資料をもとにした田辺氏の研究<sup>(2)</sup>、飛鳥・藤原地域の資料をもとにした西氏の研究<sup>(3)</sup>により行われ、現在の編年の大枠は決定されたと言え、半ば定説化している状況である。そのため、畿内以外の地域では遺跡の年代決定にあたってこの両者の編年に照らし合わせることが一般的に行われている。

本遺跡では、杯H蓋、杯H身、杯G蓋、杯G身、杯B蓋、杯B身、杯A、杯I（杯H蓋を上下逆転した身）<sup>(4)</sup>が出土している。本遺跡ではさらに杯G身について、底部が丸みをもつ一般的なものをG1、底部が完全な平底になるものをG2として分類する。

これら杯類について残存率が6分の1以上のものを対象とし、調査区が離れるI区、II区を分けて口径別出土数のグラフを作成した（表1）。その結果、杯H蓋、身とともに、口径がおおむね5mm～1cm程度の差をもってまとまり、法量や技法などから、以下のように分類が可能である。

##### （杯H）

H-1類：杯蓋の口径が13.0cm～14.0cmで、天井部は回転ケズリを施すもの、省略するものの両者が認められる。セットとなる杯身では口径が11.6cm～12.0cmの間におさまり、底部は回転ケズリを施すもの、省略するものの両者がみられる。

H-2類：杯蓋の口径が12.3cm～12.8cmで、天井部は回転ケズリを施すもの、省略するものが存在するが、省略するものがほとんどである。杯身では口径が10.8cm～11.5cmであり、その中心は11.0cm付近にまとまる。底部に回転ケズリを施すものは無くなり、未調整、ナデで仕上げる。

H-3類：杯蓋の口径が11.5cm～12.0cmで、天井部の回転ケズリは見られなくなる。杯身では口径が10.5cm付近にまとまりをもち、底部は未調整、ナデで仕上げる。

H-4類：杯蓋の口径が11.0cm前後になるとまとまりをもち、天井部の回転ケズリは見られず、未調整である。杯身では口径が9.5cm～10.0cmで、9cm後半代にまとまりをもち、底部は未調整、ナデで仕上げる。

H-5類：杯蓋の口径が10.5cm前後で、天井部は未調整である。対応する杯身は口径が9.0cm前後で、

かえり部は口縁端部より突出しない。底部はナデ調整である。

#### (杯G)

G 1-1類：杯蓋の最大径が12.0cm前後で、天井部回転ケズリを施し、かえり部は鋭く突出する。対応する杯身は11.2cm前後にまとまり、底部は回転ケズリを施す。

G 1-2類：杯蓋の最大径が11.0cm前後で、天井部回転ケズリを施し、かえり部は口縁端部より突出する。杯身は10.5cm前後にまとまりをもつ。

G 1-3類：杯蓋の最大径が10.0cm前後で、天井部は不明であるがおそらく回転ケズリを施すと考えられる。かえり部は口縁端部より突出しないものも認められる。対応する杯身は9.3cm～9.8cmで9.5cm前後にまとまりをもつ。

G 1-4類：杯蓋の最大径が8.5cm前後で、天井部回転ケズリを施す。対応する杯身は8.2cm～9.0cmで、底部は回転ケズリを施すものとナデ調整のものが存在する。

G 2-1類：杯蓋の最大径が14.0cm前後で、天井部回転ケズリを施し、かえり部は鋭く突出する。対応する杯身は10.8cm～12.8cmで、底部は平底である。

G 2-2類：杯蓋は出土していないため不明である。杯身は10.5cm前後にまとまり、底部は平底である。

G 2-3類：杯蓋は出土していないため不明である。対応する杯身は9.5cm前後にまとまり、底部は平底である。

#### (杯B)

B-1類：高台径は11.2cmで、高台は外側下方に少し伸びる。

B-2類：径は不明であるが、高台が低い。

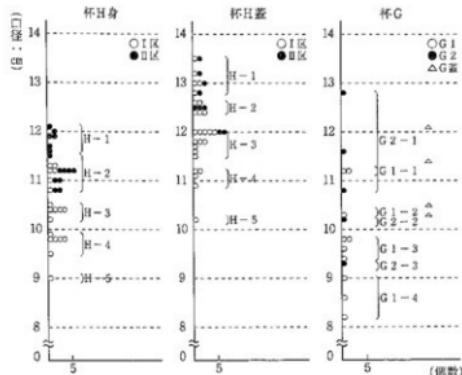


表1 杯類口径分布表

これらの分類をもとにして杯類の変遷表を作成した(表2)。ここでは杯Hにみられる縮小化の変遷<sup>[5]</sup>を各期の軸に据え、それに杯G及びその他の杯類との併行関係を当てはめた。しかし、杯Hの変遷はともかく、杯G、杯Bについては、杯Hとの併行関係、出現時期等を明確に提示出来るほどの、良好な一括資料がない。そのため、杯H、杯G、杯Bの変遷表での併行関係を作成するにあたっては、飛鳥・藤原地域における基準資料の法量についての比較検討をおこなった。<sup>[6]</sup>

丸山	杯H	杯G 1	杯G 2	杯B	杯I・杯A	
I						時期別杯身個体数 杯H : 杯G 7 : 0
II	 					15 : 2
III	  					6 : 2
IV	  					6 : 2
V	 					1 : 5
VI						0 : 3
VII						
VIII						

表2 杯類変遷表

丸山Ⅰ期から丸山Ⅴ期は、杯H-1類からH-5類があてはまり、杯Hの口径縮小化の流れでスムーズな変遷が認められる。丸山Ⅰ期は杯Hのみが存在する段階で、H-1類があたり、杯Gは出現していない。杯Gでは丸山Ⅱ期にG2-1類が出現すると考えられる。これは段状遺構8床面においてH-2類の155、G2-2-1類160（第40図）の共伴出土を最大限評価した。G1-1類の出現は、やや遅れて丸山Ⅲ期と考えられる。G1-1類の19（第20図）は口径が大きく最も漸る時期のものと考えられる。丸山Ⅳ期では、杯Gの口径が縮小したG1-2類、G2-2類が位置付けられる。さらに丸山Ⅴ期にいたって口径が縮小化し、G1-3類、G2-3類が位置付けられる。H-5類は本遺跡で最も口径が小さい部類であり、この段階で杯Hは失われるようである。丸山Ⅵ期では、杯Hは存在しない段階であるが、本遺跡以外では、

口径がさらに縮小化した杯Hも確實に存在している<sup>(7)</sup>。杯Gでは、G1類のみ確認され、口径の縮小とともに非常に小型になる。また、煙の平古墳群<sup>(8)</sup>では杯Iはすでに出現しているようであり、杯Bについては高台が大きい形状のものが出現している可能性がある。丸山Ⅶ期は、杯Bが出現する段階である。高台が外側下方に小さく張り出すB-1類が当てはまり、また杯Aもこの期で確實に出現してくると考えられる。本遺跡でもこの期に杯Iが存在している。

杯Gは本遺跡では確認できていないが少数は存在すると考えられる。丸山Ⅷ期は、B-2類が位置付けられる。杯G、杯A、杯Iも存在すると考えられ、杯類の主流になるとを考えられる。

ところで、各期において杯H、杯Gが共存する場合でも、構成比率の違いが問題となる。それは、伝統的な古墳時代以来の杯Hが主体の時代に、新しい様式下に成立する杯Gがどのように浸透し、影響を与えるかが読み取れるからである。ここでは丸山Ⅰ期から丸山Ⅵ期におけるⅠ区とⅡ区を合計した杯H身、杯G身の構成比を示す。(表2右)。この表から判断すると、丸山Ⅱ期に出現した杯Gは、非常に少数である。次の丸山Ⅲ期、Ⅳ期では杯Gの個体数は同じであるが、杯Hの絶対数は若干減少し杯Gの全体に占める割合は増加している。丸山Ⅴ期、Ⅵ期では小型化した杯Gの個体数が増加し、杯Hにいたっては丸山Ⅴ期で個体数が大きく減少し、丸山Ⅵ期では消滅していくようである。このような結果はもちろん遺跡全体を調査しているわけではないこと、また杯Hと杯Gの併行関係も定まっていないという問題があるものの、おむね杯Gが増加していく傾向がうかがえる。丸山Ⅶ期、Ⅷ期では、該当する土器の絶対数が少ないので不明な点がおおいが、杯Hの消滅に相前後して杯B、杯A、杯Iが増加するものと考えられる。

実年代については美作地域での資料が乏しく、実年代を検討できるだけの資料に恵まれていない現状である。そのため、畿内の中でも、飛鳥・藤原地域の編年に対照していく<sup>(9)</sup>。飛鳥・藤原地域の編年は飛鳥Ⅰ～飛鳥Ⅴに区分されている。この中では、飛鳥Ⅰでは杯Hの口径が重複しながら縮小していく変遷が追え、口径が最も縮小するのが飛鳥Ⅱであり、その新しい段階を水落遺跡出土資料をあてている。杯Gは飛鳥Ⅰの小墾田宮推定地S D05上層から認められ、飛鳥Ⅳまで存在する。飛鳥Ⅲではあらたに定型化した杯B、杯Aが出現する段階と考えられている。

本遺跡と飛鳥・藤原地域出土資料との併行関係は、丸山Ⅰ期から丸山V期はおむね飛鳥Ⅰ期に併行し、飛鳥Ⅰでは技法、法量から小墾田宮推定地S D50、川原寺S D02、甘櫻丘東麓S X037、飛鳥池灰綠色粘砂層・雷丘北方遺跡S D3580の順に推移するとされることから、丸山Ⅰ、Ⅱ期は小墾田宮推定地S D50の中層、上層、丸山Ⅲ～Ⅴ期も川原寺S D02以下、この順で対応させて大過ないであろう。実年代は、飛鳥Ⅰの上限は飛鳥寺下層に金製器模倣の土器器杯Cがみられないことなどから飛鳥寺造営の588年を測らず、甘櫻丘東麓S X037が蘇我氏の邸宅に関連したものならば645年に焼失したと考えられ、下限がおよそ640年頃と考えられる。飛鳥Ⅱについては、水落遺跡が中大兄皇子が660年に建設された水時計と推定さ

年 代	丸 山	飛鳥・藤原地域23	陶器24	烟の平古墳群25	岡山県南部26
- 590	I	小墾田宮推定地 SD50中層	TK209 TK217 (古) TK217 (新)	3期	亀が原 1号窯
	II	飛 小墾田宮推定地 SD50上層		4期	寒風 1-1号窯
	III	飛 鳥 川原寺 SD02		5期	
- 640	IV	甘櫻丘東麓 SX037		6期	
	V	飛鳥池灰綠色粘砂層			
- 660	VI	飛 鳥 坂田寺SG100 II 水落跡		7期	寒風 2号窯
	VII	飛 鳥 大宮大寺SK121地	TK46	8期	寒風 1-1号窯
	VIII				

※タテの幅の長さは、時間的な長さを示すものではない

表3 他遺跡との併行関係

れ、出土土器群がおよそ660年と考えられている。

のことから、飛鳥・藤原地域の編年との対比により実年代の定点が丸山Ⅰ期頃を590年、丸山Ⅳ期頃を640年、丸山Ⅵ期頃を660年と考えられよう。

## 2. 美作地域での位置付け

美作地域において7世紀の須恵器編年では、稼山古墳群出土資料により杯蓋の器形変化をもとに6期の区分がなされ<sup>93</sup>、現在でも美作地域の編年として一般的に用いられている。しかし、杯Gの有無で稼山3期と稼山4期を区分して杯Hと杯Gの共存を認めないため、両者が混在した資料では年代決定を困難にしている。近年、稼山編年を再検討した横田氏の編年試案<sup>94</sup>、畠の平古墳群出土資料をもとにした弘田氏の編年試案<sup>95</sup>が提示され、美作地域の様相が判明しつつある。若干の相違は存在するものの、おおむね、畿内地域と同様に杯Hと杯Gは共存し、杯Gは畿内より出現が遅れること、杯Hはあまり遅くまで残存せず、その結果、杯Hと杯Gの共存期間が短いということは共通した理解と考えてよい。丸山遺跡出土土器を検討してみると、まず杯Gの出現は、丸山Ⅱ期にG 2-1類がH-2類に併行して位置付けられるため飛鳥Ⅰの小墨田宮推定地S D50上層段階より若干後出し、川原寺S D02段階には確実に遡ると考えられ、美作地域においてもこの段階に出現している可能性が高い。杯Hは、丸山V期のH-5類が最も口径が細小したものであるが、飛鳥・藤原地域では水落遺跡の杯Hが最小であり、H-5類よりも1段階新しく位置付けられる。このことは丸山遺跡においても、従来の指摘どおり杯Hが早く失われることを示している。しかし、久米町コウテン4号墳<sup>96</sup>出土の杯Hは口径が8cm代に属すことから飛鳥Ⅱに併行すると考えられ、美作地域においてもこの段階に杯Hが残る遺跡も存在すると考えられる。本遺跡ではⅦ期以降の資料が薄弱であるが、杯Hの消滅に伴って杯類の主体は杯G、杯I主体に移る。そして丸山Ⅶ期にはまもなく杯B、杯A、杯Iが主体となり、以後、美作国府S X605<sup>97</sup>などに代表される7世紀後半的主要器種として存続していくと考えられる。美作地域において杯G出現段階の様相はわずかながら判明しつつあるが、杯B等の出現段階における土器の様相については今後さらには検討していく必要があろう。

## 第2節 集落の検討

### 1. 集落の変遷について

丸山遺跡で検出した主な遺構は、堅穴住居1軒、段状造構14基、土塙24基などである。堅穴住居、段状造構などは、丘陵の等高線に沿って築造される。堅穴住居、段状造構からは多くの土器が出土しており、ほとんどがいわゆる7世紀代の土器である。それとともに、鉄鋤、フイゴの羽口等の製鉄関連の遺物が出土しており、製鉄遺構は未検出であるものの製鉄工程に関係した遺跡の一部と考えられる。

遺物の出土は丘陵上部からの流入により段状造構内に2次堆積したものが存在するため、遺構の詳細な時期決定に困難をきわめた。そのため第1節で検討した土器変遷表の各期に十分対応しない状況である。ここでは、遺構の時期に幅を持たせて大きな流れで集落の検討を行うこととする。

丸山Ⅰ期、Ⅱ期には、Ⅱ区の堅穴住居1、段状造構11~14が谷を挟んで築造され、遺構の配置状況や遺物から、ほぼ同時期に存在し、1つのまとまりとして捉えられる。Ⅰ区でも段状造構7がいち早くⅠ期に築造されると考えられ、Ⅱ期には新たに段状造構5、8が築造される。Ⅲ期にはさらに段状以降4、9、10が築造され、ⅠB、ⅠC区ではこの時期が集落の最盛期と考えられ、6基の段状遺構が併存する。おく

れてⅧ期には段状遺構6が築造される。IA区の段状遺構は、出土遺物が極少量で時期決定が困難であるが、わずかに段状遺構3がⅦ期に位置付けられる。

まとめると、谷を奥に入った位置であるII区の堅穴住居、段状遺構11~14の一群がI期に始まり、II期には、はやくもすたれるようである。これに入れ替わるように、集落の中心はIB、IC区の遺構群に移り、最盛期をむかえる。段状遺構7がII期に始まり、以後Ⅶ期まで連続して存在する。これ以後は、IA区に集落の中心が移ると考えられる。

## 2. 遺跡の性格

本遺跡からは多くの鉄滓をはじめ、フイゴの羽口、鉄床石などの製鉄関連の遺物が遺構、谷部などから出土しており、製鉄工程の一部に関係した遺跡であることは間違いないであろう。以下では、各遺構についての総括を行い、そこから読み取れる製鉄集落の様相について考えてみたい。(図99)

まず丸山I期~II期を中心とするII区について考えてみる。II区では堅穴住居が谷を挟んで西側丘陵の頂上部に立地し、その斜面に段状遺構が3基横並びに高さをえ、谷を挟んで東側には1基が存在する。これらの遺構は1つのまとまりとして捉えられる。このうち、製鉄に関係する遺物は、段状遺構12に顕著である。ここでは、炉盤片の付着した鉄滓が8個出土し、接合可能である。また段状遺構12に接して土壙20、21があり、ここからも鉄滓が出土している。他には段状遺構13で鉄床石、堅穴住居1では少量の鉄滓が出土している。これらの段状遺構は製鉄工程の一端を担う作業場と考えられ、炉壁や鉄床石の出土から鍛冶などの作業場が想定できる。また堅穴住居についてはカマドを造り付け、出土遺物では甕、瓶等も出土していることから、作業場というよりは、工人の控え小屋的な住居と考えられよう。次に、IB、IC区では丸山II期~VII期までの遺構が認められそのピークはII期~V期と考えられる。

まずIB区では約20m四方の平坦面が造成され、ここに段状遺構3基、焼土壙1基が存在している。段状遺構5は遺物量が多く、特に床面南西側で焼土、炭を含む粘質土の堆積が認められ、ここから多量の須恵器とともに土師器の甕、鍋が

つぶれた状況で出土している。

また、すぐ南に接して、赤色化した被熱箇所が2箇所存在し、段状遺構5に伴う施設と考えられ、このような状況から一般住居と考えられる。

IC区の検出遺構はIB区の段状遺構とあわせて1つのまとまりを構成すると考えられ、段状遺構4基、焼土壙1基が存在している。段状遺構は等高線に沿って規則的に造成されている。製鉄関連の遺物は、段状遺構7では鉄滓、フイゴの羽口、鐵錠、段状遺構9では20cm大の



第99図 製鉄関連遺物出土状況

鉄滓が出土している。土壌10では鉄滓は出土していないが、壁が被熱を受け、埋土に炭、焼土を含む焼土壙である。また谷の黒ボク層からは、椀形の鍛治滓などの鉄滓が出土している。これらの段状遺構は作業場としての機能が考えられる。

I A区については3基の段状遺構が認められるがいずれも規模が小さく、遺構プランが不明瞭なものが多い。段状遺構3は丸山唯期と考えられ、その他の遺構もほぼ同時期に鑄造されたものであろう。鉄滓などの製鉄関連遺物は出土していないものの、他の地区と同様に作業場としての機能が考えられるが、他の地区より遺物が極めて少ないと想定される。

これらを総括すると、II区では、控え小屋としての住居跡と作業場としての段状遺構数4基で1単位を構成すると思われる。また、I B、I C区においても、同様のまとまりが確認でき、1単位を構成するのである。このような竪穴住居と段状遺構数基が1つの単位とする集落は、津山市域では大畠遺跡<sup>16</sup>、深田河内遺跡<sup>16</sup>、狐塚遺跡<sup>17</sup>、一貫西遺跡<sup>18</sup>、アモウラ東遺跡<sup>19</sup>などで確認され、大畠遺跡では、カマドを持つ一般の住居2軒とカマドを持たない作業場的住居3軒、段状遺構2基で1単位が構成され、製鉄の作業工程の1機能を担っていたと考えられる。

また、各地区における段状遺構の規模を比較すると、II区では、全長5m～6mの規模が中心である。I B、I C区では、調査区が狭いため全容の判明したものは少ないが、全長の判明した段状遺構8は長さ約8m、また段状遺構7でも全長6m90cm以上を計る。I A区は3基とも全長3m程度である。未調査部分を残すもののI B、I C区の段状遺構は他の地区に比べて規模が大きいことが指摘できる。

### 第3節 総 括

以上の検討の結果をまとめると、本遺跡では、それぞれの地区において、居住施設である住居と作業小屋である段状遺構が数基で1つの単位を構成し、製鉄の工程の一端を担っていたと考えられた。この単位を基本として、各遺構の時期を検討した結果、II区→I B、I C区→I A区へとおおまかに集落が変遷していくと推定できる。また、このような集落の変遷に対応して段状遺構の規模が、II区からI B、I C区にかけて大きくなり、I B、I C区からI A区にかけては極端に小さくなる傾向が伺えた。II区の鍛冶を作業の中心とした集落は短期の内にすたれしていく。II区にややおくれてI B、I C区にも作業場が鑄造されていたが、II区がすたれるのと相前後して、本格的に作業場が鑄造されはじめ、集落の最盛期を迎える。ここでも主な作業は鍛冶を中心であったと考えられる。さらにI B、I C区の集落がすたれた後、I A区に集落の中心が移って行くようである。

このような丸山遺跡の鍛冶集落は、吉備地域の鍛冶集落を検討して類型化した花田氏の研究<sup>20</sup>によるとB I類に当てる事ができ、B I類は集落内鍛冶の作業工程分化という特色が捉えられ、村方鍛冶と専業工人の専業集落との中间的な様相をしめすと考えられている。一方で、広島県則清遺跡例のように鍛冶炉の多さから製品以上に鉄素材の生産に関わった可能性が高いと考え、B I類とされる鍛冶集落の役割を高く評価する考え方もある<sup>21</sup>。実際はB I類のなかにも鍛冶炉などの遺構の数、遺構配置などの違いにより多様な鍛冶集落が存在すると考えられる。丸山遺跡においては、検出した段状遺構の数に比して鉄製品、その他の製鉄関係の遺構・遺物が少ないようであり、推測の域をでないが集落内もしくは近隣集落の需要を満たす程度の鍛冶集落であったかも知れない。

また、新しい律令体制下に成立する杵Gは、岡山県内の同時期の集落でもその数が少量しか出土しない

中で、本遺跡では比較的まとめて出土している。鐵治集落がⅡ区からⅠB、ⅠC区に移り最盛期を迎えるということが、古墳時代を代表する伝統的な杯Hの中に新しい土器様式とされる杯Gが出現、増加することに關係してくるのであろうか。古墳祭祀に関して、杯Gの出現に政治的な意義を読み取ろうとする考え方も存在する<sup>62</sup>が、本遺跡では集落の変遷過程での杯G出現のインパクトは小さかったようであり、そこに律令社会の支配体制の影響を見いだすことが困難である。とはいっても、遺跡によって杯Gの出土量に違いがあり杯Gが出現しない遺跡も多く存在することから、杯Gの出現が遺跡に与える影響とは別問題として、その存在の評価を考えていく必要があろう。これらについては、今後の課題である。

注

- (1) 西弘海「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』実業社 1982  
田辺昭三「須恵器大成」角川書店 1981
- (2) 田辺昭三「陶邑古窯跡群」I 平安学園考古学クラブ 1966  
田辺昭三「須恵器大成」角川書店 1981
- (3) 西弘海「土器の時期区分と型式変化」飛鳥・藤原宮発掘調査報告書 II 奈良国立文化財研究所 1978
- (4) 井守氏は杯H蓋を上下逆にした身を杯Iと命名し、本稿でもこれに従う。  
兵庫県教育委員会編「七日市遺跡」兵庫県文化財調査報告書72 1991
- (5) 生産地である窯の資料が不足している現状では、怀身における口径のまとまりのある一群を1型式として捉え、それをもとに編年を作成する方法は非常に有効である。すなわち法量の比較により他地域もしくは他遺跡との併行關係が捉えやすくなるからである。このような視点で研究されたものに以下のものがある。  
高畠知功「須恵器編年への一試案」『考古学と関連科学』1988
- (6) 相原嘉之「飛鳥蘿原・地域の土器」『古代の土器 5-1 7世紀の土器(近畿東部・東海編)』古代の土器研究会 1997
- (7) 地域は離れるがコウアン4号墳で出土している。  
村上幸雄ほか「練山遺跡群II」1980
- (8) 弘田和司「西大沢古墳群・畠の平古墳群・虫尾遺跡 黒土中世墓 茂平古墓 茂平城」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告111 岡山県教育委員会 1996
- (9) 前掲(3)、(6)
- (10) 村上幸雄ほか「練山遺跡群II」1980
- (11) 横田美香「須恵器の年代」「定北古墳」岡山大学考古学研究室 1995
- (12) 河本清、弘田和司「奈義町坂ノ下古墳出土の遺物」『岡山県立博物館研究報告』第18号 岡山県立博物館 1997
- (13) 前掲(10)
- (14) 安川豊史「美作国府跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第50集 津山市教育委員会 1994
- (15) 行田裕美「大畑遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告47集 津山市教育委員会 1993
- (16) 行田裕美ほか「深田河内遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告26集 津山市教育委員会 1998
- (17) 河本清「猿塚遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告2集 津山市教育委員会 1974
- (18) 行田裕美「一貫寺遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告33集 津山市教育委員会 1990
- (19) 行田裕美「アモウラ東遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告36集 津山市教育委員会 1996
- (20) 花田鶴広、「吉備政権と銀治工房」「考古学研究」43-1 考古学研究会 1996
- (21) 村上恭通「倭人と鉄の考古学」青木書店 1998
- (22) 前掲(12)
- (23) 前掲(6)
- (24) 前掲(2)
- (25) 前掲(8)
- (26) 島崎東、山齋麻平「須恵器」「吉備の考古学」1987

## 凡 例

### 遺構一覧表

- ・遺構番号は本報告、旧番号は調査時の仮番号を示す。
- ・平面形は遺構上場の形状を表す。
- ・規模は上場間の最大距離を記載する。( )は残存長を表す。
- ・竪穴住居・段状遺構の柱穴数は検出したすべての数を記載する。
- ・標高は床面の中央付近の値を記載する。
- ・遺物量は○が整理箱4箱以上、○が1箱～3箱、△が1箱以下を目安として記載する。
- ・遺構の築造時期は本報告の「第4章まとめ 第1節出土須恵器の検討」から導かれたものを記す。

### 遺構別出土遺物一覧

- ・遺物量はおおむね○が整理箱4箱以上、○が1箱～3箱、△が1箱以下を目安として記載する。
- ・項目は須恵器、土師器、土製品、石製品、金属製品、その他に分け、そこから器種、種類によって細別する。

### 遺物観察表

- ・遺物番号は本報告文、実測番号は実測段階での仮番号を示す。遺物番号は本文図版、写真図版の番号と一致する。
- ・法量の数値は、杯身日の口径値は、かえり部の径で計測し、杯G蓋は最大径で計測している。残存値の場合は数値の後ろに「+」を付ける。
- ・反転復元実測したものは○をする。
- ・調整は、外面・内面をそれぞれ、外、内と略す。
- ・土器・土製品・瓦などの色調は農林水産省農林水産会議事務局監修『新版標準土色帳』を使用した。

# 遺構一覧表

窓穴住居

遺構番号	旧番号	平面形	規模(cm) 長軸×短軸	標高(m)	柱穴数	付属施設	遺物量	時期	備考
窓穴住居1	II S 1	方形	521×420	129.60	4	カマド 周壁溝 排水溝	○	II期	煙道あり

段状遺構

遺構番号	旧番号	平面形	規模(cm) 長軸×短軸	標高(m)	柱穴数	付属施設	遺物量	時期	備考
段状遺構1	A S 1	長方形	354×(204)	135.18	2				
段状遺構2	A S 7	長方形	276×(180)	133.75	2				
段状遺構3	A S 14	長方形	336×(146)	132.55		周壁溝	△	Ⅲ期	
段状遺構4	B S 1	長方形	440×(242)	132.55	3		○	Ⅲ～Ⅳ期	
段状遺構5	B S 2	長方形	490×(361)	132.58	8	燒土	○	Ⅱ～Ⅶ期	テラス
段状遺構6	B S 7	方形	295×(232)	132.15			△	V～VII期	
段状遺構7	C S 1	長方形	690×(284)	127.00	3		○	I～VI期	
段状遺構8	C S 2-4	長方形	808×(200)	124.10	8	周壁溝	○	Ⅱ～Ⅳ期	括張
段状遺構9	C S 3	隅丸長方形	250×(204)	124.01	2		△	Ⅲ～V期	テラス
段状遺構10	C S 5	長方形	212×(172)	121.10	4	燒土面 周壁溝	△	Ⅱ期	
段状遺構11	I S 34	長方形	500×(360)	126.05	6		△	I～II期	
段状遺構12	II S 4	長方形	572×(270)	125.43			△	I期	
段状遺構13	II S 5	長方形	586×(205)	124.96	6	周壁溝	○	I～II期	
段状遺構14	II S 6	方形	388×(279)	123.95		燒土面	△		

柱穴列

遺構番号	旧番号	間数	柱穴間(m) 長軸	標高(m)	遺物量	時期	備考
柱穴列1	I S 29～31	2	2+2	124.14	△		

土壤

遺構番号	旧番号	平面形	規模(cm)			遺物量	時期	備考
			長軸	短軸	深さ			
土壤1	A S 3	円形	95	87	25	135.90		
土壤2	A S 5	不整円形	119	78	12	134.13		
土壤3	A S 8	隅丸円形	120	(91)	40	133.73		
土壤4	A S 9	楕円形	218	143	42	137.83		
土壤5	A S 11	円形	113	106	15	136.05		
土壤6	A S 23	隅丸長方形	122	60	14	135.00		
土壤7	B S 6	円形	96	78	12	132.18		
土壤8	C S 10	長方形	(96)	(83)	18	122.52		

遺構番号	旧番号	平面形	規模(cm)			標 高(m)	遺物量	時 期	備 考
			長軸	短軸	深さ				
土壤9	C S 11	円形	176	(130)	19	119.28	△	Ⅱ期	
土壤10	C S 13	楕円形	152	(116)	31	118.60	△	Ⅱ期	
土壤11	C S 14	円形	(63)	(42)	33	116.58			
土壤12	I S 3	長楕円形	218	75	11	139.55			
土壤13	I S 4	楕円形	162	78	30	138.50			
土壤14	I S 10	楕丸方形	170	(161)	22	134.85			
土壤15	I S 11	不整円形	273	(158)	22	134.70			
土壤16	I S 13	不整長方形	193	(88)	13	134.10			
土壤17	I S 14	楕円形	135	(80)	24	133.36			
土壤18	I S 35	楕円形	(149)	72	34	126.68			
土壤19	I S 2	楕円形	117	54	24	128.37			
土壤20	I S 12	円形	98	90	5	125.36	○	Ⅱ期	
土壤21	I S 13	楕丸方形	106	103	30	125.20	△	Ⅰ期	
土壤22	I S 15	楕円形	83	50	8	125.58	△		
土壤23	I S 16	楕円形	(120)	62	12	129.48			
土壤24	I S 17	円形?	(112)	90	10	129.35			

## 溝

遺構番号	旧番号	平面形	規模(cm)			標 高(m)	遺物量	時 期	備 考
			長軸	短軸	深さ				
溝1	A S 21	皿形	(280)	114	22	134.34			
溝2	C S 12	皿形	(278)	68	15	118.64	△		

## 柱 穴

遺構番号	旧番号	平面形	規模(cm)			標 高(m)	遺物量	時 期	備 考
			長軸	短軸	深さ				
柱穴1	I S 14	逆台形	53	50	22	125.56	△		

## 土器棺

遺構番号	旧番号	平面形	規模(cm)			標 高(m)	遺物量	時 期	備 考
			長軸	短軸	深さ				
土器棺1	I S 1	逆台形	39	37	9	140.30			

## 遺構別出土遺物一覧表

竪穴住居 1	出土量 ○	段状遺構 8	出土量 ○	段状遺構 14	出土量 △
須恵器	杯身 壺 須恵	杯H 怀G 小型鉢	高杯 把手付 鍋	杯H 高杯 壺 要片	
土師器	壺 鍋	壺		土師器	
土製品	陶棺の胸郭片 不明製品			炭化部材	
その他	食済			その他	
段状遺構 1	出土量 ×	段状遺構 9	出土量 △	柱穴列	出土量 △
その他	木炭片	杯H 怀G 小型鉢	高杯 平瓶	土師器	要種不明
段状遺構 3	出土量 △	段状遺構 10	出土量 ○	土壙 9	出土量 △
須恵器	杯B 高杯	杯H 壺 燃台		須恵器	杯H
段状遺構 4	出土量 ○	段状遺構 11	出土量 △	土壙10	出土量 △
須恵器	杯H 怀G 台付鉢	杯H 小型鉢	高杯 灼 滲	須恵器	杯H 壺
土師器	壺	須恵器	鉢	土師器	要種不明
段状遺構 5	出土量 ○	段状遺構 12	出土量 △	土壙11	出土量 ○
須恵器	杯H 怀G 怀A 怀I 怀B 台 付鉢 留杯 平瓶 鉢	杯H 小型鉢	高杯 器台	須恵器	杯G 壺 把手付 鍋
土師器	壺 鍋	須恵器	器台	土師器	要種不明
工頭器	——	土師器	——	土壙12	出土量 △
その他	鉢 清	土師器	壺 高杯 壺	須恵器	杯H 高杯 壺
段状遺構 6	出土量 ○	段状遺構 13	出土量 ○	土壙13	出土量 △
須恵器	杯G 怀B 梅 鉢 大型鉢	杯H 高杯 平瓶 壺		須恵器	器種不明
土師器	壺	土師器	——	土壙器	大甕
段状遺構 7	出土量 ○	段状遺構 14	出土量 ○	土壙14	出土量 △
須恵器	杯H 怀G 小型鉢	杯H 高杯 壺 壺	高杯 壺 手付壺 カマド	土師器	器種不明
土師器	温 大型鉢	土師器	——	柱穴 1	出土量 △
土製品	湯 暖 高杯	土製品	要種不明燃台	須恵器	高杯
鉢	フイゴの跡口	石製品	灰灰石	土壙15	出土量 △
其他製品	鉢	土製品	——	須恵器	壺

# I 区出土土器観察表

順位	100号	出土遺物	種別・器種	口径	器高	底径	反転	調査者	色 虹	備 考	
1	159	段状遺構3	須恵 手杯B	1.6+	11.6	○	底滅		2.5Y7/1灰白		
2	162	段状遺構3	須恵 高杯	10.0+	2.4+	○	外、内凹転なで		酒器2/2灰白		
3	138	段状遺構4	須恵 手蓋	11.6	3+	○	外、内凹転なで		5Y7/1灰白		
4	124	段状遺構4	須恵 高杯	13	2.2+	○	外、内凹転なで	10YRS/1灰			
5	29	段状遺構4	須恵 手蓋	10.2	3.3	○	外、内凹転なで	5Y6/2Rモリーブ	底部に平行条線あり		
6	79	段状遺構4	須恵 手蓋		1.7+	○	表面蒙滅	5Y6/2Rモリーブ	2次の焼成うける		
7	189	段状遺構4	須恵 手蓋	9.8+		○	外、内凹転なで 天井部なで	10BG5/1青灰			
8	178	段状遺構4	須恵 手蓋	10.2+		○	墨縁	5Y7/1灰白			
9	207	段状遺構4	須恵 手蓋	10.8	2.9+	○	外、内凹転なで	5Y7/1灰白			
10	163	段状遺構4	須恵 手蓋	11.8+	2.2+	○	外、内凹転なで	N3/暗灰	尖鋸歯工具なだけれど、ヘア記号あり		
11	18	段状遺構4	須恵 手蓋	11.8	3.3	○	外、内凹転なで	10YRS/1灰			
12	113	段状遺構4	須恵 手蓋G	10.5	2.3+	○	外、内凹転なで 素面剥離ケツリ	7.5Y5/1灰			
13	9	段状遺構4	須恵 手身	10.2	3.5	○	外、内凹転なで 底部なで	10BG5/1灰未褪色			
14	34	段状遺構4	須恵 手身	9.8	3.8	6.7	外、内凹転なで 表面蒙滅	N3/暗灰			
15	17	段状遺構4	須恵 手身	10.4	3.3	○	外、内凹転なで 底部なで	N4/灰			
16	32	段状遺構4	須恵 手身	9.8	3.2	○	外、内凹転なで 底部なで	10YRS/1灰			
17	19	段状遺構4	須恵 手身	9.5	2.5+	○	外、内凹転なで	5Y5/2Rモリーブ			
18	54	段状遺構4	須恵 手身G	9.6	3.0+	○	外、内凹転なで 表面剥離ケツリ	N4/灰			
19	157	段状遺構4	須恵 手身G	11.2	3.8	○	外、内凹転なで	5Y7/1灰白			
20	39	段状遺構4	須恵 手身G	10.2	4.2	7.4	○	外、内凹転なで 表面未測量	N5/灰		
21	22	段状遺構4	須恵 手身G	10.8	3.8	7.1	○	外、内凹転なで 表面未測量	N5/灰	焼成不良	
22	48	段状遺構4	須恵 手身G	9	5	○	外、内凹転なで 底部なで	10BG5/1暗青灰			
23	129	段状遺構4	須恵 手身G	10.8	3.3+	○	外、内凹転なで	5Y5/2Rモリーブ			
24	103	段状遺構4	須恵 手身	5.5	2.5+	○	外、内凹転なで	5Y5/1灰	口縁のみ		
25	104	段状遺構4	須恵 手身	11	7.3+	○	外、内凹転なで 下縁ケツリ 内側底	5Y5/2Rモリーブ ロクロ右			
26	40	段状遺構4	須恵 手身	12.5	8.0+	○	外、内凹転なで 下縁ケツリ 内側底	10YRS/1灰黄黒	ロクロ右		
27	64	段状遺構4	須恵 手身	8.3+		○	外、内凹転なで	5Y5/2Rモリーブ			
28	190	段状遺構4	須恵 手身	10.2	4.2	7.4	○	外、内凹転なで 表面未測量	N5/灰		
29	22	段状遺構4	須恵 手身	10.8	3.8	7.1	○	外、内凹転なで 表面未測量	N5/灰	焼成不良	
30	177	段状遺構4	土師 瓦		3.2+	○	外、内凹転なで	5YR6/8暗			
31	182	段状遺構4	土師 瓦		3.0+	○	外、内凹転なで	5YR7/8暗	口縁のみ		
32	171	段状遺構4	須恵 瓦		2.4+	○	外、内凹縫口、内側円内凹	2.5Y5/1灰黄	底部のみ		
33	216	段状遺構4	須恵 瓦		15.6+	○	左下がり方向タタキ 傷ハケ	N5/灰			
34	70	段状遺構4	須恵 瓦	14	4.2	○	摩滅	2.5Y7/1灰白	焼成不良		
35	14	段状遺構5	須恵 瓦	11.8	3.7	○	外、内凹転なで 底部なで	5Y5/1灰			
36	174	段状遺構5	須恵 瓦	13.3	3.6	○	摩滅	5Y6/1灰	焼成不良		
37	46	段状遺構5	須恵 瓦	12.6	3.3	○	外、内凹転なで 瓦端なで 一巻ケツリ	10Y4/1灰			
38	97	段状遺構5	須恵 瓦	11.7	2.2+	○	摩滅	2.5Y7/2Rモリーブ	燒成不良		
39	29	段状遺構5	須恵 瓦B?	11.7+	2.1+	○	外、内凹転なで	2.5Y6/1灰青	ガラン横つまみ		
40	38	段状遺構5	須恵 瓦	10.9	4.5	○	外、内凹転なで 底部なで 一巻ケツリ	7.5Y5/1灰			
41	206	段状遺構5	須恵 瓦	11	3.2+	○	外、内凹転なで	10BG5/1青灰			
42	208	段状遺構5	須恵 瓦B?		1.2+	○	外、内凹転なで	10BG5/1青灰			
43	1	段状遺構5	須恵 瓦	9	2.7	6.1	○	外、内凹転なで 底部なで	7.5Y7/1灰白	口縁のかえりが無い	
44	33	段状遺構5	須恵 瓦	10.5	3.5	6.4	○	外、内凹転なで 底部なで	7.5Y6/1灰		
45	86	段状遺構5	須恵 瓦	9.8	3.7	3.7	○	外、内凹転なで	N4/灰		
46	68	段状遺構5	須恵 瓦	9	3+	○	外、内凹転なで	7.5Y6/1灰			
47	43	段状遺構5	須恵 瓦I	12.8	4.5	6.4	○	外、内凹転なで 底部なで	5Y6/1灰		
48	37	段状遺構5	須恵 瓦I	12.8	4	6.2	○	外、内凹転なで 底部なで	5Y6/1灰	裏みあり	
49	44	段状遺構5	須恵 瓦I	10.3	3.9	7.5	○	外、内凹転なで 表面未測量	5Y6/1灰		
50	118	段状遺構5	須恵 瓦G?		2.6+	8	○	外、内凹転なで 底部未測量	N5/灰		
51	41	段状遺構5	須恵 瓦	11.5	8.5	9	瓦縫合 有縫合 有内縫合 有側縫合	SB2/1青黒	脚部しほり目		
52	96	段状遺構5	須恵 瓦	11.3	2.3+	○	外、内凹転なで	N3/暗灰	体部のみ残存		
53	71	段状遺構5	須恵 瓦		3.3+	8.5	○	外、内凹転なで	10YR3/1出窓		
54	50	段状遺構5	須恵 瓦		8.2+	9	○	外、内凹転なで	7.5Y5/1灰	受部自然輪付着	
55	28	段状遺構5	須恵 古内陶	12	10.5	8.8	瓦縫合 有縫合 有内縫合 有側縫合	7.5Y6/1灰			
56	42	段状遺構5	須恵 平瓦	6.7	7.4+	○	外、内凹転なで	5Y6/1灰			
57	45	段状遺構5	須恵 瓦	12.8	5.4+	○	板状跡跡+カヌ目 内凹転なで	2.5Y6/1灰	内面自然輪付着		
58	180	段状遺構5	須恵 瓦		8.7+	○	外、内凹転なで	5Y7/2Rモリーブ	燒成不良		
59	147	段状遺構5	須恵 瓦	28.2	10.7	20	○	外、内凹転なで 内縫合ハケ	2.5Y7/2Rモリーブ	燒成不良	
60	217	段状遺構5	須恵 瓦		7.5+	○	斜け内縫合 有縫合 有内縫合 有側縫合	7.5Y6/1灰			
61	220	段状遺構5	土師 瓦	21.6	29.0+		外縫合内縫合 有縫合 有内縫合 有側縫合	2.5Y5/1明春期	はぼ天窓		
62	219	段状遺構5	瓦質 瓦	16.8	8.2+		○	外、内凹転なで 内縫合はけ	2.5Y3/1黑泥	方形の容器か、瓦質でもいい	
63	209	段状遺構5	土師 瓦	37.2	13.7		外、内凹転なで	7.5Y6/1灰			
64	204	段状遺構5	土師 瓦		37.0+	13+	○	外縫合内縫合+カヌ目 内凹転なで	10BG5/1青灰		
65	179	段状遺構5	土師 瓦	22	9.3+		○	摩滅	7.5Y6/8模		
66	181	段状遺構5	土師 瓦		24	7.4+	○	外、内凹転なで 内縫合ハケ	12YR4/1Lモリ		
67	24	段状遺構6	須恵 手身G	9.4	4.5	5.2	○	外、内凹転なで 内縫合なで	N5/灰		
68	91	段状遺構6	須恵 手身B	11.2+	1.6+	○	外、内凹転なで 表面剥離	10BG5/1青灰			
69	35	段状遺構6	須恵 瓦	8.25	5.2	○	外、内凹転なで 表面剥離+縫合	5B3/1暗青	重ねきの板状残存		
70	154	段状遺構6	須恵 瓦?		5.0+	○	外縫合ハケ-側縫合をで	N6/灰			

(単位 : cm)

番号	飼育	出生性別	種類・雌雄	口徑	器高	底径	反軸	調	整	色	調	整
71	93	段状遺傳6	頬窓 薄	14.5	4.0+		○	外、内回転なし		2.5Y6/2灰黄	斑成不良	
72	146	段状遺傳6	頬窓 大型鋸	28.1	13.2+			斜上開口、丁字開口アリ 内回転アリ		5Y6/1灰		
73	164	段状遺傳6	上層 薄		4.4+			外、内回転なし		SYR6/6銀		
74	149	1 B区新発中	土師 素	17	4.5+		○	外、内回転ハケ 内、素成		15Y6/4灰青		
75	130	1 B区新発中	土師 素	21	4.8+		○	外ハケ 内ケズリ		15Y6/6灰青		
76	36	1 B区新発中	頬窓 平底	6.5	5.7+		○	外、内回転なし		SY5/1灰		
77	173	1 B区新発中	頬窓 斜底	13	3.5+		○	整成		2.5Y7/2灰黄		
78	161	1 B区新発中	頬窓 壁杯		21+	9.6	○	外、内回転なし		NG/灰	脚部のみ	
79	68	段状遺傳7	頬窓 斜底	13.5	4.2			外、内回転なし 天井部:なし		N3/碧灰		
80	4	段状遺傳7	頬窓 斜底	13.2	3.2		○	外、内回転なし 底部:なし		7.5YV/4青緑		
81	2	段状遺傳7	頬窓 斜底	12.8	3.7		○	外、内回転なし 底部:未調整		10Y5/1灰		
82	156	段状遺傳7	頬窓 壁杯	12.4	4		○	外、内回転なし 天井部:未調整		2.5Y6/1黄緑	天井部に施用片仔瘡	
83	121	段状遺傳7	頬窓 壁杯	12.6	3.1		○	外、内回転なし 天井部:なし		3B4/1経青灰		
84	6	段状遺傳7	頬窓 斜底	12.4	3.5		○	外、内回転なし 底部:なし		10D6/5白		
85	125	段状遺傳7	頬窓 壁杯	12.2	3.1+		○	外、内回転なし		N4/灰		
86	47	段状遺傳7	頬窓 斜底	11.5	4.4		○	外、内回転なし 底部:未調整		2.5Y6/1灰黄	底みあり	
87	100	段状遺傳7	頬窓 壁杯	12.2	3.2+		○	外、内回転なし 天井部:なし		5Y6/1灰	施成不良	
88	114	段状遺傳7	頬窓 壁杯		1.8+		○	外、内回転なし 天井部:なし		9Y6/4灰青	施成不良	
89	112	段状遺傳7	頬窓 壁杯		10.7+	2.5+		外、内回転なし 天井部:調和		15Y6/1灰		
90	15	段状遺傳7	頬窓 壁杯	11.8	3.8		○	外、内回転なし 天井部:調和		5Y4/1灰		
91	117	段状遺傳7	頬窓 壁杯	11.3	3.0+		○	外、内回転なし 天井部:なし		2.5Y6/2灰黄		
92	194	段状遺傳7	頬窓 壁杯		9.3+	2.1+		外、内回転なし		5Y6/5オーブ		
93	115	段状遺傳7	頬窓 壁杯		11.2		○	外、内回転なし 天井部:なし		2.5Y6/1灰	外蓋の企画に自然軸付着	
94	50	段状遺傳7	頬窓 壁杯	11.4	4.0+		○	外、内回転なし 天井部:なし		2.5Y6/2灰		
95	107	段状遺傳7	頬窓 壁杯	11.2	4.4	7.2	○	外、内回転なし 天井部:未調整		CS2/1灰白		
96	122	段状遺傳7	頬窓 壁杯	12	4.4	6.5	○	外、内回転なし 天井部:なし		5Y6/1灰	施成不良	
97	3	段状遺傳7	頬窓 壁杯	11.5	3.9	5.9	○	外、内回転なし 天井部:なし		CS2/2つつく		
98	134	段状遺傳7	頬窓 壁杯	11			○	外、内回転なし 天井部:未調整		5Y7/1灰白	施成不良	
99	106	段状遺傳7	頬窓 壁杯	11	2.6+		○	外、内回転なし 天井部:なし		7.5Y5/1灰		
100	15	段状遺傳7	頬窓 壁杯	9.8	3.1	7.4	○	外、内回転なし 天井部:調和		5Y6/1灰		
101	153	段状遺傳7	頬窓 壁杯	10.4	4		○	外、内回転なし 天井部:なし		N5/灰		
102	5	段状遺傳7	頬窓 壁杯	10.4	3.5	6.1	○	外、内回転なし 天井部:未調整		CS2/1灰		
103	141	段状遺傳7	頬窓 壁杯		2.9+	6.3	○	外、内回転なし 天井部:未調整		NS/灰	器壁が非常に薄い	
104	84	段状遺傳7	頬窓 壁杯	10	1.9+		○	外、内回転なし				
105	103	段状遺傳7	頬窓 壁杯		24+	6.6	○	外、内回転なし 天井部:なし		2.5Y6/2灰黄		
106	12	段状遺傳7	頬窓 壁杯	8.2	3.4		○	外、内回転なし 天井部:未調整		10Y5/1灰		
107	126	段状遺傳7	頬窓 壁杯	9.8	3.3		○	外、内回転なし 天井部:調和		5Y5/1灰		
108	55	段状遺傳7	頬窓 壁杯	8.6	3.5		○	外、内回転なし 天井部:未調整		2.5Y7/2灰黄	施成不良	
109	10	段状遺傳7	頬窓 壁杯	9.8	4.2		○	外、内回転なし 天井部:未調整		5Y5/1灰		
110	28	段状遺傳7	頬窓 壁杯	9.3	4.2		○	外、内回転なし 天井部:未調整		5Y6/1灰		
111	122	段状遺傳7	頬窓 壁杯	11.2	3.3+		○	外、内回転なし 天井部:未調整		5B4/1経青灰		
112	78	段状遺傳7	頬窓 小形鋸	12	5.9+		○	外、内回転なし		N6/灰		
113	166	段状遺傳7	頬窓 小形鋸	12	6.6+		○	外、内回転なし		5Y7/1灰白	施成不良	
114	7	段状遺傳7	頬窓 小形鋸	11	5.3		○	外、内回転なし 天井部:なし		7.5Y5/1灰	平行軸付着あり	
115	30	段状遺傳7	頬窓 積窓	11.3	8		○	外、内回転なし		10Y5/1灰	体部下半に沈織	
116	31	段状遺傳7	頬窓 高杯		3.6+		○	外、内回転なし 天井部:未調整		5B3/1青灰	脚部欠損	
117	81	段状遺傳7	土師 壁杯	5.2				底部		7.5Y5/6銀	施成不良	
118	84	段状遺傳7	土師 壁杯		2.0+	9.6	○	外、内回転なし 天井部:なし		7.5Y5/1灰	底部外側面の赤線	
119	74	段状遺傳7	土師 壁杯		3.0+		○	外、内回転なし 天井部:なし		5B4/1経青灰	しまり目あり	
120	172	段状遺傳7	頬窓 壁杯		6.7+		○	外、内回転なし		2.5Y7/1灰	脚部のみ	
121	76	段状遺傳7	頬窓 高杯		3.0+		○	外、内回転なし 天井部:未調整		2.5Y6/2灰黄	施成不良	
122	155	段状遺傳7	頬窓 壁杯	7.9	4.5+		○	外、内回転なし 天井部:未調整		5Y5/1灰	しまり目られる	
123	105	段状遺傳7	頬窓 平底	6.2	5.9+		○	外、内回転なし 天井部:未調整		N4/灰	口縁部ノミ残存	
124	106	段状遺傳7	頬窓 平底				○	外カクシ 内回転なし		7.5Y6/1灰		
125	110	段状遺傳7	頬窓 平底	7.2	5.3+		○	外、内回転なし 天井部:未調整		2.5Y5/2灰黄	外蓋に自然軸付着	
126	50	段状遺傳7	頬窓 高		5.6+			斜上開口あり		2.5Y7/2灰黄	外蓋に軸付着あり	
127	62	段状遺傳7	頬窓 窓		5.0+	5.5	○	外、内回転なし		2.5Y6/1灰	脚部欠損	
128	144	段状遺傳7	頬窓 大型鋸	25.6	11.5+		○	外カクシ 内回転なし		2.5Y6/1灰		
129	120	段状遺傳7	頬窓 窓		5.7+		○	外カクシ 内回転なし		N3/薄灰	セクロロ右一	
130	139	段状遺傳7	頬窓 窓	18.2			○	外カクシ 内回転なし		N2/黒		
131	145	段状遺傳7	頬窓 窓	13.6	2.7+		○	外カクシ 内回転なし 天井部:未調整		7.5Y8/1灰白	施成不良	
132	198	段状遺傳7	頬窓 窓	30.7	34.1+		○	外カクシ 内回転なし 天井部:未調整		2.5Y6/6銀		
133	196	段状遺傳7	土師 滅	44.4	14.1		○	外カクシ 内回転なし 天井部:未調整		7.5Y7/1灰		
134	168	段状遺傳7	土師 窓		11.5+		○	外カクシ 内回転なし 天井部:未調整		2.5Y8/8銀		
135	167	段状遺傳7	土師 窓	44	8.0+		○	外カクシ 内回転なし 天井部:未調整		7.5Y7/7/6銀		
136	170	段状遺傳7	土師 痘	41	10.7+		○	摩		7.5Y6/6銀		
137	226	段状遺傳7	土師 痘	36.0+	8.0+		○	外カクシ 内回転なし 天井部:未調整		5Y5/6銀		
138	176	段状遺傳7	土師 窓	29	6.7+		○	外カクシ 内回転なし 天井部:未調整		7.5Y7/4L銀		
139	201	段状遺傳7	土師 窓	44			○	外カクシ 内回転なし 天井部:未調整		2.5Y7/7/6銀		
140	200	段状遺傳7	土師 痘		12.4+	15	○	外カクシ 内回転なし 天井部:未調整		7.5Y8/6銀		
141	149	段状遺傳7	土師 窓	21.8	10.3+		○	外カクシ 内回転なし 天井部:未調整		10Y7S/4灰青		
142	160	段状遺傳7	土師 痘		12.4+		○	外カクシ 内回転なし 天井部:未調整		7.5Y8/6銀		
143	199	段状遺傳7	土師 痘				○	外、内回転なし		7.5Y7/7/6銀	144と同一體	
144	148	段状遺傳7	土層 痘		10.5+	13.8	○	外カクシ 内回転なし 天井部:未調整		5Y5/8/6銀	施成不良2から発生	

(単位:cm)

群別	出虫種類	種別・品種	口径	器寫	感度	反応	調	整	色	調	備考	
145 92	段状造構7	土鈍 感	9.7+	15.7	○	外、内:触毛なし 壁付、皿底付で 25YR6/4に赤食 底部端付に穿孔						
150 136	段状造構5	頸感 怪	10.8	4.2	○	外、内:触毛なし 底部なし 天井部なし 2.5YR/2灰白 燃成不良						
151 26	段状造構3	頸感 怪	12.4	3.7	○	外、内:触毛なし 天井部なし 10YR5/4/青赤						
152 25	段状造構3	頸感 怪	11.2	3.5	○	外、内:触毛なし 天井部なし 10YR5/4/青赤						
153 119	段状造構3	頸感 怪	9.4+	2.0+	○	外、内:触毛なし 天井部なし 10YR3/4/断続						
154 23	段状造構3	頸感 怪	11.2	3.4+	○	外、内:触毛なし 5Y5/1灰						
155 49	段状造構3	頸感 怪	11.1	4.1	○	外、内:触毛なし 天井部なし 7.5YR7/6暗						
156 109	段状造構3	頸感 怪	11.2	3.5	8.3	○	外、内:触毛なし 天井部なし 2.5YR4/2灰					
157 116	段状造構3	頸感 怪	10.8	2.9	○	摩滅 2.5Y7/4/淡黄 口部端のカえりが無い、燃成不良						
158 85	段状造構3	頸感 怪	10	2.4+	○	外、内:触毛なし 2.5Y2/8モリブ						
159 56	段状造構3	頸感 怪	9.8	3.8	○	外、内:触毛なし 天井部未調査 7.5Y7/1灰白						
160 61	段状造構3	頸感 怪	11.6	4.4	8.8	○	外、内:触毛なし 2.5Y7/3灰 黒部調整不明、燃成不良					
161 82	段状造構3	頸感 高杯	3.8+	8	○	外、内:触毛なし 2.5Y7/3灰 拗門内部に自然釉、窯蓋片付着						
162 75	段状造構3	頸感 高杯	4.0+	—	○	外、内:触毛なし 5Y5/1灰 燃成不良						
163 15	段状造構3	頸感 怪	12.8	4	8.9	○	外、内:触毛なし 底部なし 2.5Y6/1黄赤 体部に窯蓋片付着					
164 98	段状造構3	頸感 小型怪	4.3+	5.8	○	窯蓋片付着なし? 7.5Y7/1灰 黄赤						
165 195	段状造構3	頸感 怪	18.5	—	○	窯蓋片付着なし? 内心円凹 10YR4/1青赤						
166 222	段状造構3	頸感 怪	17.2+	—	○	外番目タキ-壁付 内肉円凹 7.5Y7/1灰 燃成や不良						
167 197	段状造構3	頸感 怪	45	15.8+	○	外番目タキ-壁付 内心端なし 2.5Y7/1灰白 燃成ののみ						
168 193	段状造構3	頸感 怪	19.1+	—	○	外番目タキ-壁付 内心端なし 5B2/1青黒						
169 192	段状造構3	頸感 怪	14.9+	—	○	外番目タキ-壁付 内肉円凹 5B5/1青灰						
170 183	段状造構3	頸感 怪	—	8.9+	○	外番目タキ-壁付 内肉円凹 5Y3/1モリブ						
171 185	段状造構3	頸感 怪	—	11.8	○	外番目タキ-壁付 内肉円凹 2.5Y7/1灰白						
172 210	段状造構3	土師 地	39.6+	15.5+	○	外表面はけげなし 内肉角付 2.5YR5/1青赤						
173 169	段状造構3	土師 地	40.3	7.9+	○	外表剥離-内凹-内肉角付 7.5YR6/5青						
174 165	段状造構3	土師 地	12	2.5+	○	外、内:触毛なし 5Y8/1C灰青						
175 143	段状造構3	頸感 怪	11.7	4.1	○	外、内:触毛なし 窯蓋片付着なし 7.5Y6/1灰						
176 11	段状造構3	頸感 怪	10.4	3.1	5.1	○	外、内:触毛なし 底部なし 7.5Y5/1灰					
177 135	段状造構3	頸感 高杯	—	1.6+	9	○	外、内:触毛なし 2.5Y6/2灰黄					
178 8	段状造構3	頸感 怪	10.3	2.3	—	○	外、内:触毛なし 2.5Y7/1灰青					
179 95	段状造構3	頸感 小型怪	9.6	5.6+	—	○	外、内:触毛なし 2.5YR5/1青赤					
180 211	段状造構3	頸感 平瓶	—	4.7+	—	○	外、内:触毛なし 2.5Y7/1灰白					
181 150	段状造構3	頸感 平瓶	—	14.4-	—	○	外、内:触毛なし 5Y6/1灰青					
182 51	段状造構3	頸感 怪	19.6	6.5	12.7	○	外、内:触毛なし 窯蓋片付着なし 7.5Y6/1灰					
183 186	段状造構3	頸感 怪	—	9.5+	—	○	外番目タキ-壁付 内肉円凹 5Y3/1灰					
184 186	段状造構3	頸感 怪	—	14.7+	—	○	外番目タキ-壁付 内肉円凹 2.5Y7/2灰黄					
185 213	段状造構3	頸感 怪	—	8.9+	—	○	外番目タキ-壁付 内肉円凹 10Y2/1灰					
186 212	段状造構3	頸感 怪	—	9.2+	—	○	外番目タキ-壁付 内肉円凹 10Y5G/1青灰					
187 21	段状造構3	頸感 怪	12	3.2	—	○	外、内:触毛なし 天井部なし 10BGS/1青赤					
188 72	段状造構3	頸感 高杯	—	4.4+	8.7	埋滅	—	—	2.5Y7/1灰白	燃成不良		
189 73	段状造構3	頸感 高杯	—	5.2+	—	外、内:触毛なし 5Y7/1灰白 燃成や不良						
190 132	段状造構3	土師 高杯	—	4.8+	—	摩滅 7.5Y7/5橙						
191 152	段状造構3	頸感 離	—	11.6+	—	外側付着-底部付着-内肉凹付着 2.5Y7/2灰黄 重焼き痕あり						
192 27	段状造構3	頸感 小型怪	8.8	4.8	—	○	外、内:触毛なし 10Y3/2灰黒					
193 131	段状造構3	頸感 小型怪	14.8	6.7	—	○	紅褐色-下部灰青-内肉凹付着-下部付着 5Y6/1灰 重焼き痕あり					
194 158	段状造構3	土師 頭	23	6.2+	—	○	外、内:触毛なし 壁付-内肉凹付着 10Y5G/1青赤					
195 80	段状造構3	頸感 怪	—	2.3	6.3+	○	紅褐色-底部付着-内肉凹付着 2.5Y5/1青灰 燃成や不良					
196 218	段状造構3	土師 地	21.8+	—	—	○	青褐色-外半青灰色-下部灰青 10YR6/5明黄褐					
197 191	段状造構3	頸感 怪	—	3.2+	—	○	外番目タキ-壁付 内肉円凹 10Y2/1灰					
198 221	段状造構3	頸感 怪	—	21.4+	—	○	外番目タキ-壁付 内肉円凹 10Y5G/1青赤					
199 215	段状造構3	頸感 怪	—	15.0+	—	○	外番目タキ-壁付 内肉凹付着 10Y5G/1青赤					
200 69	土壌9	頸感 怪	12	4.2	—	○	外、内:触毛なし 天井部なし 5N4/1灰 天井部に隔壁片がつく					
201 90	土壌9	頸感 怪	14	2.6	—	○	外、内:触毛なし 天井部なし N3/青灰					
202 223	土壌9	頸感 怪	—	20.6+	—	○	外番目タキ-壁付 天井部なし 10BGS/1青赤					
203 65	土壌10	頸感 怪	11.3	3.7	6.2	○	外、内:触毛なし 窯蓋片付着 5Y6/1灰					
204 133	I C区黒ボク	頸感 怪	13	3.4+	—	○	外、内:触毛なし 5Y7/1灰白 燃成不良					
205 94	I C区黒ボク	頸感 怪	12	2.3+	7.8	○	外、内:触毛なし 底部なし 10YR7/4C-IV-青					
206 66	I C区黒ボク	頸感 怪	15	3.9	—	○	外、内:触毛なし 天井部付着-内肉凹付着 5Y2/1灰 重ひびき					
207 57	I C区黒ボク	頸感 怪	12	3.1	—	○	外、内:触毛なし 天井部なし 5N3/断続					
208 96	I C区黒ボク	頸感 地	2.2	9.2	—	○	外、内:触毛なし 天井部なし 7.5Y8/1灰白 燃成不良					
209 102	I C区黒ボク	頸感 高杯	8.5+	10	—	○	外、内:触毛なし 7.5Y7/1灰白					
210 83	I C区黒ボク	頸感 高杯	6.2+	6.4	—	○	外カキ目 内肉凹なし 5Y4/1灰 2方向スカリ					
211 203	I C区黒ボク	土師 把手	—	—	—	7.5Y7/7橙						
212 63	切削漆塗	頸感 高杯	12.9+	14.4	—	○	外、内:触毛なし 2.5Y8/1灰白 斜部先形					
213 67	切削漆塗	頸感 高杯	—	8.7+	—	○	外、内:触毛なし 7.5Y6/1灰 3方向2段スカリ					
214 58	切削漆塗	頸感 地	13.2	4.7	—	○	外、内:触毛なし 7.5Y4/1灰					
215 26	切削漆塗	頸感 高杯	—	5.6+	10.6	○	外、内:触毛なし 10Y5/1灰					
216 77	切削漆塗	頸感 地	13.7	4.5+	—	○	外、内:触毛なし 7.5Y2/1灰 前述に沈緑がめぐる					

(単位: cm)

## II区出土土器觀察表

番号	形態	出土遺物	種類	縦幅	口徑	高さ	底径	反転	調	蓋	色	調	備考
217	92 土器鉢1	頭走	壺頭蓋	15.5	24.7+				外・カメリ 内・同心円文なし		N3/灰灰	青磁面	
218	41 段状遺構11	頭走	杯蓋	13.2	4				外・内・圓紐なし		7.5Y7/1灰白	燒成不良	
219	65 段状遺構11	頭走	杯蓋		2.3+				○ 外・内・圓紐なし		5Y7/1灰白		
220	54 段状遺構11	頭走	杯蓋	10.8	2.3+				○ 外・内・圓紐なし		5Y6/1灰		
221	67 段状遺構11	頭走	杯身	12	3.1+				○ 外・内・圓紐なし		5Y6/1灰		
222	60 段状遺構11	頭走	杯身	11.2	4				外・内・圓紐なし 天井部未調整		10Y5/1灰	直あり	
223	63 段状遺構11	頭走	杯身	11.2+	3.6+				○ 外・内・圓紐なし 底部なし		N4/灰		
224	65 段状遺構11	頭走	杯身	10.4	3.6+				○ 外・内・圓紐なし		10Y5/1灰		
225	62 段状遺構11	頭走	杯身	11	2.8+				○ 外・内・圓紐なし		7.5Y7/1灰白		
226	61 段状遺構11	頭走	小唇鉢	11	4.2+				○ 外・内・圓紐なし		10Y5/1灰に青斑		
227	99 段状遺構11	頭走	器合		6.8+				○ 外・カメリ 内・圓紐なし		N6/灰	継割あり	
228	123 段状遺構11	頭走	蓋	15.3	25.5				外・内・圓紐なし 壁内凹		N6/灰		
230	19 Ⅱ-A区黒ボク	頭走	杯蓋	12.5	4.4				表面無		2.5Y8/1灰白	燒成不良	
231	48 Ⅱ-A区黒ボク	頭走	杯蓋	12	3.8				外・内・圓紐なし 天井部未調整		5B3/1青灰灰		
232	47 Ⅱ-A区黒ボク	頭走	杯蓋	12	4.5				外・内・圓紐なし 天井部未調整		10BC5/1灰		
233	3 Ⅱ-A区黒ボク	頭走	杯蓋	12	4.1				外・内・圓紐なし 天井部未調整		10.5/1灰		
234	70 Ⅱ-A区黒ボク	頭走	杯蓋	11.5+	2.7+				外・内・圓紐なし 天井部未調整		2.5Y5/1灰灰		
235	71 Ⅱ-A区黒ボク	頭走	杯蓋	10.7+	2.4+				外・内・圓紐なし 天井部未調整		10.5/1灰		
236	73 Ⅱ-A区黒ボク	頭走	杯蓋	11.0+	2.1+				外・内・圓紐なし 天井部未調整		10BC5/1灰		
237	37 Ⅱ-A区黒ボク	頭走	杯身	12.1	4.0+				外・内・圓紐なし		N6/灰	自然釉付着	
238	2 Ⅱ-A区黒ボク	頭走	杯身	11	3.2+				外・内・圓紐なし		N6/灰		
239	49 Ⅱ-A区黒ボク	頭走	杯身	11	2.7+				外・内・圓紐なし		7.5Y5/1灰		
240	46 Ⅱ-A区黒ボク	頭走	杯身	11.2	2.7+				外・内・圓紐なし		N6/灰		
241	38 Ⅱ-A区黒ボク	頭走	杯身	10	2.6+				外・内・圓紐なし		N5/灰		
242	40 Ⅱ-A区黒ボク	頭走	高杯	12.8	4.6+				外・内・圓紐なし		5Y8/1灰		
243	19 Ⅱ-A区黒ボク	頭走	高杯		3.4+	9.5			外・内・圓紐なし		N5/灰		
244	4 Ⅱ-A区黒ボク	頭走	高杯		5.1+	8.5			外・内・圓紐なし		5Y8/1灰		
245	121 Ⅱ-A区黒ボク	頭走	高杯		15.3+				外・内・圓紐なし カメリ 指印(内文)		3Y7/1灰		
246	101 Ⅱ-A区黒ボク	頭走	器合	14.2+					外・内・圓紐なし		7.5Y6/1灰		
247	116 Ⅱ-A区黒ボク	頭走	器合		4.0+				外・内・圓紐なし		7.5Y6/1灰		
248	128 Ⅱ-A区黒ボク	頭走	器合		3.2+				外・カメリ 内・圓紐なし		7.5Y6/1灰		
249	72 雷紋レリーフ3	頭走	蓋	10.8+	2.3+				外・内・圓紐なし 天井部未調整		5Y8/1灰白	燒成不良	
250	51 雷紋レリーフ3	頭走	蓋	13	3.4				外・内・圓紐なし 天井部未調整		10Y4/1灰	大きき歪む	
251	52 雷紋レリーフ3	頭走	杯身	11.4	3.6				外・内・圓紐なし 天井部未調整		10Y6/1灰		
252	50 雷紋レリーフ3	頭走	杯身	11.9	3.8				外・内・圓紐なし 天井部未調整		7.5Y5/1灰		
253	53 雷紋レリーフ3	頭走	杯身	11.9	3.9				外・内・圓紐なし 天井部未調整		2.5Y7/1灰		
254	122 雷紋レリーフ3	頭走	蓋	16	6.2+				外・内・圓紐なし 壁内凹		2.5Y8/1灰灰		
255	98 雷紋レリーフ3	頭走	蓋		10.8+	2.3+			外・内・圓紐なし 壁内凹		10Y6/1灰		
256	130 雷紋レリーフ3	頭走	器合		11+				外・カメリ 内・圓紐なし		10Y6/1灰		
257	118 雷紋レリーフ4	土器	土器	32.7	5.7+				外・カメリ ハケ 内・ケズリ		5Y5/1灰		
258	115 雷紋レリーフ4	土器	土器	12.0+	5.0+				外・内・圓紐なし 天井部未調整		5Y5/1灰		
259	95 雷紋レリーフ4	土器	蓋		6.0+				外・内・圓紐なし 天井部未調整		10Y4/1灰		
260	126 雷紋レリーフ4	土器	蓋		7.5+				外・内・圓紐なし 天井部未調整		N2/灰	安樂斜台の一部?	
261	10 駿穴住居1	頭走	杯身	11.2	3.8				外・内・圓紐なし 底部:なし		7.5Y6/1灰		
262	12 駿穴住居1	頭走	杯身	11.2	3.9	6.2			外・内・圓紐なし 底部:なし		N5/灰		
263	11 駿穴住居1	頭走	杯身	11.2	4.3	6.3			外・内・圓紐なし 底部:なし		5Y6/1灰		
264	105 駿穴住居1	頭走	蓋		5.1+				外・カメリ 内・圓紐なし		10Y6/1灰		
265	86 駿穴住居1	頭走	蓋		16.7+				外・カメリ 壁内凹		2.5Y8/1灰	燒成不良	
266	100 駿穴住居1	頭走	蓋		13.4+				外・カメリ ハケ 内・ケズリ		5Y5/1灰		
267	87 駿穴住居1	頭走	壺頭		14.7+				外・内・圓紐なし 天井部未調整		5Y5/1灰		
268	49 駿穴住居1	土器	壺	22	6.4+				外・内・圓紐なし 壁内凹		7.5Y5/6南端		
269	1 駿穴住居1	土器	壺	17	3.9+				外・内・圓紐なし		10Y5/6南端		
270	79 駿穴住居1	土器	壺		8.7+				外・内・圓紐なし 壁内凹		5Y5/6標		
271	89 駿穴住居1	土器	壺		22.2	31			外・内・圓紐なし 壁内凹		10Y5/6		
272	104 駿穴住居1	土器	手把		5.1+				外・内・圓紐なし 壁内凹		10Y5/6		
273	106 駿穴住居1	土器	壺	19.1+	7.3+	13			外・内・圓紐なし 壁内凹		10Y5/6灰		
274	93 駿穴住居1	土器	壺	26.4	30	12.5			外・内・圓紐なし 壁内凹		10Y5/6灰		
275	94 駿穴住居1	土器	壺	25.8	26.9	10			外・内・圓紐なし 壁内凹		7.5Y5/6標		
276	16 段状遺構2	頭走	杯蓋	11.3+	2.4+				外・内・圓紐なし 天井部未調整		10Y6/1灰		
277	15 段状遺構2	頭走	杯蓋	11.6+	3.1+				外・内・圓紐なし 天井部未調整		5Y8/1灰		
280	20 段状遺構2	頭走	杯身	11.6	3.8	7.5			外・内・圓紐なし 天井部未調整		10Y5/6		
281	14 段状遺構2	頭走	高杯		5.7+				外・内・圓紐なし 天井部未調整		7.5Y5/6標		
282	76 段状遺構2	頭走	高杯		5.3+	9.5			外・内・圓紐なし 天井部未調整		N5/灰		
283	21 段状遺構2	頭走	平壺	6	3.8+				外・内・圓紐なし 天井部未調整		2.5Y5/1灰		
284	114 段状遺構2	頭走	蓋	29	8.6+				外・内・圓紐なし 壁内凹		10Y5/6灰		
285	25 段状遺構2	頭走	杯蓋	13.5	4.6				外・内・圓紐なし		5Y7/1灰白	[×]の線跡	
286	24 段状遺構2	頭走	杯蓋	12.5	4.3				外・内・圓紐なし 天井部未調整		2.5Y7/1灰		
287	22 段状遺構2	頭走	杯身	11.2	4.8	8.6			外・内・圓紐なし 天井部未調整		10Y5/6/1灰		
288	23 段状遺構2	頭走	杯身	10.8	3.4				外・内・圓紐なし 天井部未調整		2.5Y5/1灰	摩美	
289	27 段状遺構3	頭走	高杯	11.4	7.2	9.2			外・内・圓紐なし		N5/灰		

(単位:cm)

説明	説明	種別・部位	口径	部高	底径	反転	型	色調	備考
250 28 段状複構13	頭部	高杯	5.3	9.5	○	外、内:同軸なで	N3/暗灰	外側に自然軸付付	
291 122 段状複構13	頭部	高杯	13	2.3+	○	外、内:同軸なで	7.5Y6/1灰		
292 29 段状複構13	頭部	壺		9.5+	○	外:同軸なで 下:不規則な 内:同軸なで	10Y2/1黒		
293 123 段状複構13	頭部	壺	11.6	1.8+	○	外、内:同軸なで	7.5Y6/1灰	上縁のみ	
294 103 段状複構13	頭部	壺	6.4+		○	外:同軸タキ+カキメ 内:同心円文	7.5Y6/1灰		
295 127 段状複構13	頭部	壺	4.0+		○	外:同軸タキ+カキメ 内:同心円文	2.5Y6/1灰		
296 120 段状複構13	頭部	壺	22.3+		○	外:同軸タキ+カキメ 内:同心円文	W3/2+1/2黒		
297 90 段状複構13	土師	壺	28	9.3+	○	外:深ハケ 内:暗灰	SYR6/6位	296と同一個体	
298 91 段状複構13	土師	把手					SYR6/5/6位	297と同一個体	
299 26 段状複構13	土師	壺	22	12.8+	○	外:深ハケ 内:内リ	SYR6/5/6位		
300 69 段状複構13	土師	把手					SYR6/5/6位		
301 段状複構13	頭部	壺		10.2+	○	外:暗灰 内:同心円文	N5/灰	焼き台付(つるなる)	
302 125 段状複構13	土師	カマド	10.5+		○	外:深ハケ 内:不要ハケ+なで	SYR6/5/6位	器體があつい	
303 17 段状複構14	頭部	杯	12.2	3.9+	○	外、内:同軸なで	7.5Y6/1+9.7灰		
304 30 段状複構14	頭部	高杯	7.1+	14.2	○	外、内:同軸なで	2.5Y6/1灰	透かし有り	
305 31 段状複構14	頭部	壺	17	2.8+	○	外:内:同軸なで	N3/暗灰		
306 128 段状複構14	頭部	壺		4.3+	○	外:カキメ、内:同心円文	N5/灰		
307 33 土罐20	頭部	杯	12.5	3	○	外、内:同軸なで 天井部なで	7.5Y3/1/黒範		
308 34 土罐20	頭部	杯	9.2	2.9+	○	外、内:同軸なで	10Y6S/1/灰	△彫痕板から判断	
309 108 土罐20	頭部	壺	18	21.7+	○	外:同軸+カキメ+内:同心円文	JOY4/3/赤褐色	体部下半摩滅	
310 109 土罐20	頭部	壺		34.8	○	外:同軸ハケ+内:カキメ	10Y7S/1/灰		
311 83 土罐20	土師	壺	22.8	8.4+	○	外:不規 内:カズリ	2.5Y6/5/6位		
312 32 土罐20	土師	壺	20	4.8+	○	外:不規 内:カズリ	2.5Y6/5/6位		
313 59 土罐21	頭部	杯	11.7	6.8	○	外、内:同軸なで 底部なで	S3/1/緑青	柄の口縁付着	
314 94 土罐21	頭部	高杯		3.2+	12	○	外、内:同軸なで	SY6/1灰	
315 85 土罐21	頭部	高杯	12.5	1.7	○	外:カキメ 内:同軸なで	N3/暗灰		
316 35 土罐21	頭部	壺	15.8	6.9+	○	外、内:同軸なで	SY5/1灰		
317 119 土罐22	頭部	大甌		23.6+	○	外:造子+タキ+内:同心円文	2.5Y7/1灰白	体部が大きい、茎みあり	
318 82 土罐22	土師	甌	34	9.8	○	外:深ハケ 内:カズリ	2.5Y6/5/6位	端付着	
319 95 土罐22	土師	甌	23	17.5+	○	外:深ハケ 内:カズリ	10Y6/5/6位		
320 35 杜穴1	頭部	高杯	10.2+	1.8+	○	外:同軸+下:カズリ 内:同軸なで	10Y6/1灰	内面に自然軸付	
321 5 I区区名だより	頭部	身舟G	10.1+	2.1+	○	外:同軸+下:カズリ+内:カキメ	SYR6/1/1/2黒		
322 113 I区区名だより	頭部	高杯	12.2	5.3+	○	表裏塗装	7.5Y8/1灰白		
323 6 I区区名だより	頭部	壺	13	4.5+	○	外、内:同軸なで	N5/灰		
324 7 I区区名だより	頭部	壺	19.8	5.3+	○	外:同軸+下:カズリ+内:同心円文	10Y6S/1/灰		
325 13 I区区名だより	頭部	手付椀	13.1	2.7+	○	同軸+下:カズリ+内:同心円文	10Y8S/2/赤褐色	焼成不良	
326 78 I区区名だより	土師	甌	27	7.9+	○	外:深ハケ 内:カズリ/ハケ	SYR6/5/6位		
327 9 I区区名だより	土師	甌	21.8	8.9+	○	外:深ハケ 内:横ハケ	2.5Y6/5/6位		
328 80 I区区名だより	土師	甌	18.8	6.4+	○	表裏塗装	7.5Y7/6位		
329 8 I区区名だより	土師	甌	18	5.4+			10Y6/5/6位		
330 68 I区区名だより	土師	把手					10Y7S/6位		
331 112 I区区名だより	土師	カマド			外、内:ハケ		SYR6/5/6位	此?	
332 111 I区区名だより	土師	カマド			外、内:ハケ		SYR6/5/6位	突筋部	
333 110 I区区名だより	土師	カマド			外:深ハケ 内:内で		SYR6/5/赤褐色		
334 57 II区区黒ボク	頭部	杯	12.8	3.3+	○	外:同軸なで 天井部なで	SY6/1灰		
335 45 II区区黒ボク	頭部	杯	14.1	2.9	○	外:同軸なで 天井部なで	10Y5/1灰		
336 58 II区区黒ボク	頭部	杯	12.1	2.7	○	外:同軸なで 天井部なで	SY6/1灰		
337 42 II区区黒ボク	頭部	壺	6.9+	4.8+	○	外:内:同軸なで	N6/灰		
338 44 II区区黒ボク	頭部	壺	13	2.7+	○	外:内:同軸なで	SYR6/5/6位		
339 39 II区区黒ボク	頭部	壺		5.7+	○	外:同軸+下:カズリ+内:同心円文	10Y6S/1/灰		
340 75 II区区黒ボク	頭部	壺		5.0	○	外:内:同軸なで	S3/1/青灰		
341 88 II区区黒ボク	土師	甌	40	8.1+	○	外:深ハケ 内:横ハケ	SYR6/5/6位		
342 77 II区区黒ボク	土師	土甌	30.4	12+	○	外:内:横ハケ	SYR6/5/6位		
343 84 青釉レンゲ15	土師	甌	19.7	13.4	○	外:深ハケ+内:カズリ	SYR6/6位	スジが多く付着	
344 81 青釉レンゲ15	土師	甌	21	7.9+	○	外:深ハケ 内:カズリ	7.5Y6S/6位		

(単位: cm)

## その他出土遺物観察表

### 土製品

番号	造 構	器 種	長軸	短軸	厚さ	調 整	色 調	備 考
146	段状遺構?	土器 無	11.2+	9.6+	5.1	ケズリ(板なで)	7.5YR7/6橙	
147	段状遺構?	土器 無	5.4+	4.3+	4	不明	7.5YR7/6橙	
148	段状遺構?	灰瓦 不明	11.2+	8.3+	1.3+		2.5YR7/灰白	方形にめぐる薄壁灰
149	段状遺構?	土器 7.6" 刃口	6.8	2.7	1.7	外面部なで	10YR4/5灰白	外側は被熱により変色
229	段状遺構11	土器 附	4.3	-	6	外面部なで	10YR4/5灰白	5mmの小玉あり
276	竪穴住居1	土器 不明	17.2	-	2	外・内部なで	2.5YR5/8黄褐	片面に被熱痕 土器がもらい
277	竪穴住居1	土器 不明	13.4	-	1.4	外・内部なで	2.5YR5/9赤鉄	片面に被熱痕

### 鐵製品

番号	造 構	器 種	長さ	幅	厚さ	特 徴	色 調	備 考
M1	段状遺構7	錠	7.8	3.5	0.2	端部をし字に折り返す		

### 石製品

番号	造 構	器 種	長軸	短軸	幅厚比	種 類	色 調	備 考
S1	段状遺構7	不明	2.4	1.1	0.9	河原石		
S2	II A区黒ボク		12.5	10.5	3.5+	河原石		
S3	段状遺構13	鉛鉱石	38	28.1	10.4	靄灰岩		
S4	II B区黒ボク		8.4	6.9	5.2	河原石		

### 瓦

番号	造 構	器 種	長軸	短軸	厚さ	調 整	色 調	備 考
1	II B区黒ボク	平瓦	7.8	5.8	2.1	凹面ハケ 凸面なで	5Y7/1灰白	
2	II B区黒ボク	*	6.7	7.8	1.8		10Y4/1灰	
3	II B区黒ボク	*	12.1	14.8	1.7	凹面:ケズリ 凸面:	5Y6/1灰	
4	II B区黒ボク	*	6	8	1.5	凹面:有目痕 凸面:	7.5Y6/1灰	
5	II B区黒ボク	*	6.2	10.6	2	摩滅	2.5Y8/1灰白	
6	II B区黒ボク	*	10.3	12.5	2.2	凹面:有目痕 凸面:準誠	2.5Y8/1灰白	
7	II B区黒ボク	*	10.7	7.5	1.5	凹面:有目痕 凸面:なで	5Y6/1灰	
8	II B区黒ボク	*	7.3	8.4	1.9		5Y6/1灰	
9	II B区黒ボク	*	5.6	5	1.5	凹面:有目痕:なで 凸面:	2.5Y8/1灰白	
10	II B区黒ボク	*	8.1	7.2	1.9	凹面:ケズリ 凸面:	2.5Y8/1灰白	
11	II B区黒ボク	*	6.9	7	1.6	凹面:ケズリ 凸面:	10Y5/1灰	
12	II B区黒ボク	*	6.3	8	1.3	凹面:有目痕:なで 凸面:	NG/薄灰	
13	II B区黒ボク	*	9.2	9.8	1.6		10Y8R/1灰白	
14	II B区黒ボク	*	8.2	7.1	1.8	草彅	2.5Y8/1灰白	

(単位: cm)

---

# 写 真 図 版

---

図版 1



I A 区全景  
(北より)



I B + I C 区全景  
(南より)

図版 2



段状遺構 1

(東より)



段状遺構 2

(北より)



段状遺構 3

(南より)

図版 3



土壤 4  
(南より)



I B 区全景  
(南東より)



段状造構 4・5  
(東より)

図版 4



段状遺構 5  
作業風景（東より）



段状遺構 5  
遺物出土状況（南東より）



土壤 7  
(南より)



段状遺構 6  
(東より)



段状遺構 6 遺物出土状況



I C 区全景  
(南より)

図版 6



段状遺構 7

(西より)

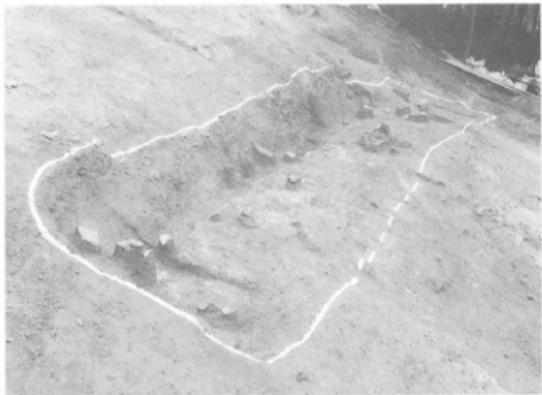


段状遺構 7 遺物出土状況



段状遺構 8

(西より)



段状遺構 8 遺物出土状況

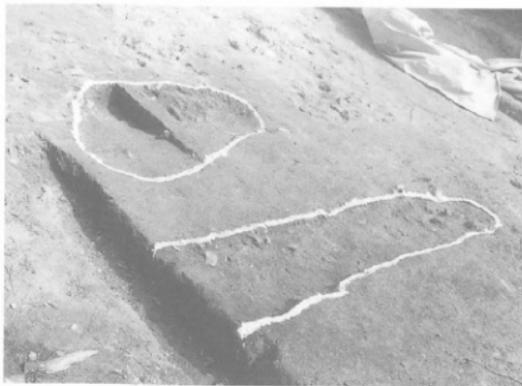


段状遺構 9  
(東より)



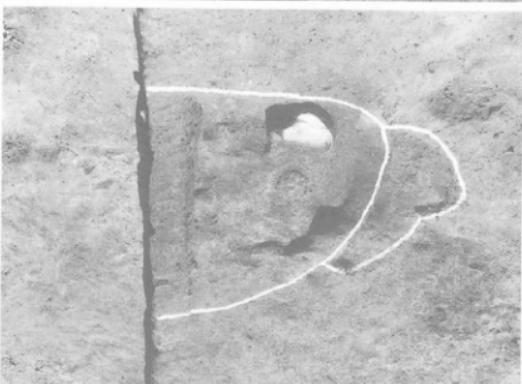
段状遺構 10  
(西より)

図版 8



土壤 9・溝 2

(西より)



土壤 10・11



土壤 10 堆積状況



II A 区全景



II B 区全景

図版10



II A区全景

(西より)

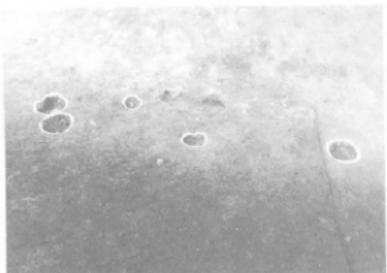


段状遺構11

(北より)



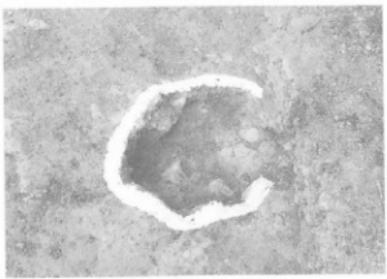
段状遺構11遺物出土状況



柱穴列1(西より)



土器館1検出状況(東より)



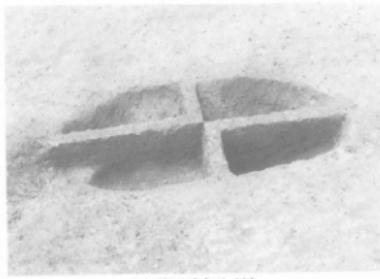
土器館1完掘状況(南より)



土器館内堆積状況(西より)



土壤12(東より)



土壤13(南より)



土壤14~17(南より)



土壤18(南より)

図版12



II B 区全景

(東より)



竪穴住居 1

(上空より)



竪穴住居 1 遺物出土状況

(南より)



竪穴住居1  
遺物出土状況(東より)



竪穴住居1堆積状況  
(西より)



竪穴住居1内カマド  
(南より)

図版14



段状遺構12

(東より)



段状遺構12鉄滓出土状況



段状遺構13

(北東より)

段状遺構13  
遺物出土状況(北より)



段状遺構14  
(北東より)



土壤20検出状況  
(北より)

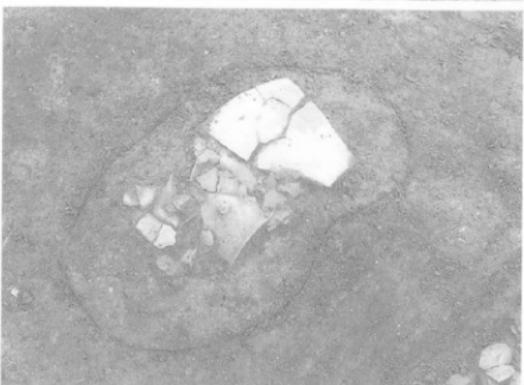


図版16



土壤21

(東より)



土壤22検出状況

(東より)



土壤22完掘状況

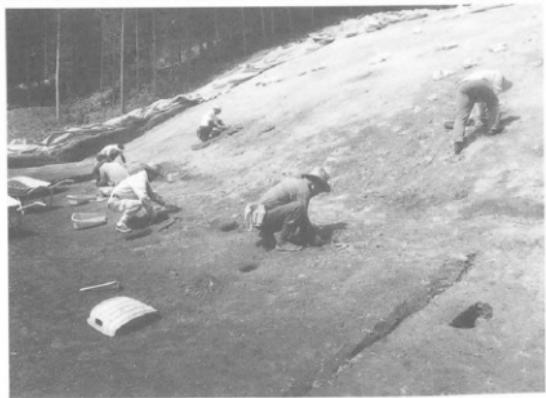
(北東より)



柱穴1  
(北より)

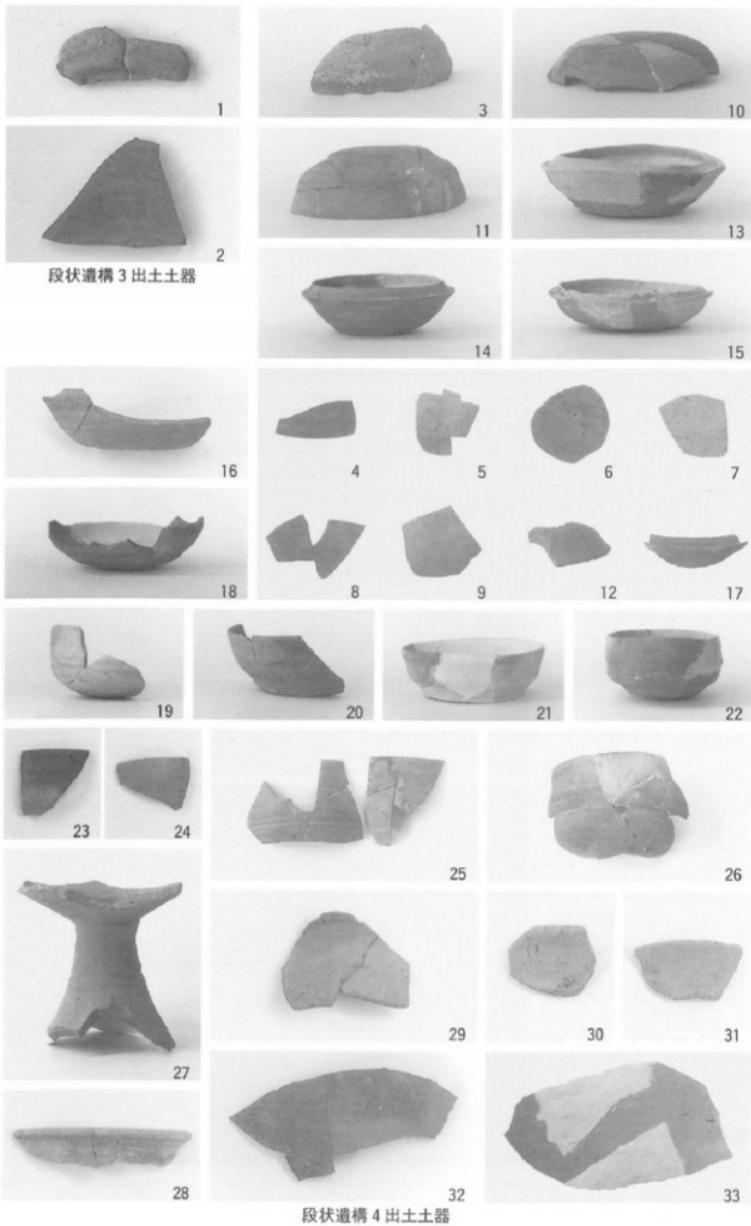


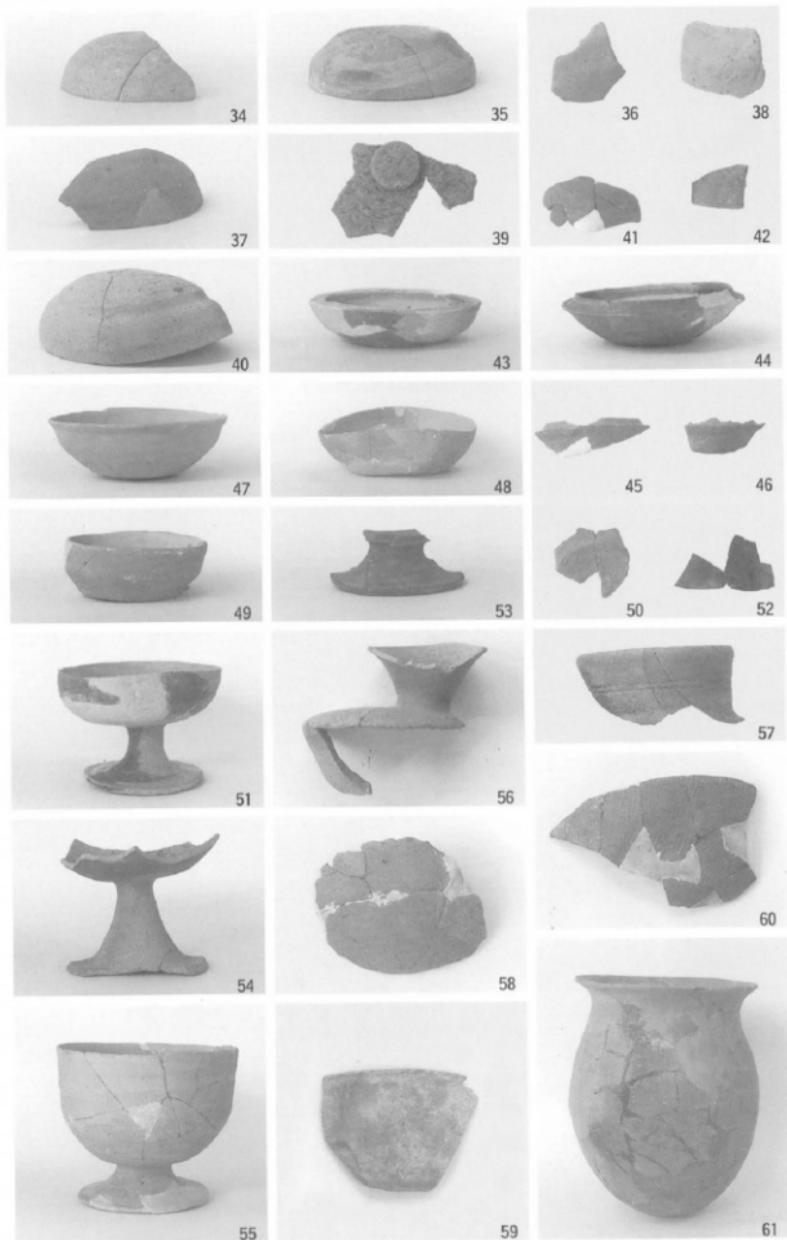
II B区土器だまり  
(北より)



調査風景

図版18



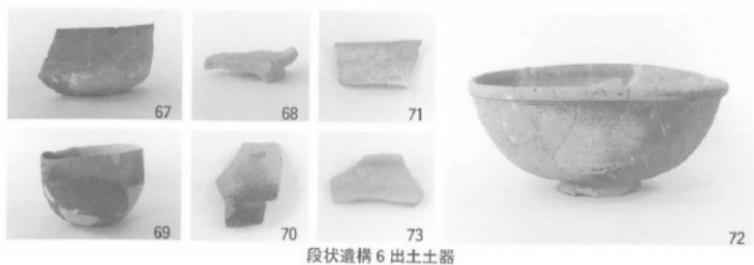


段状造構5出土土器(1)

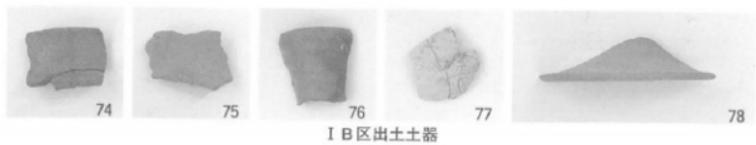
図版20



段状遺構 5 出土土器(2)



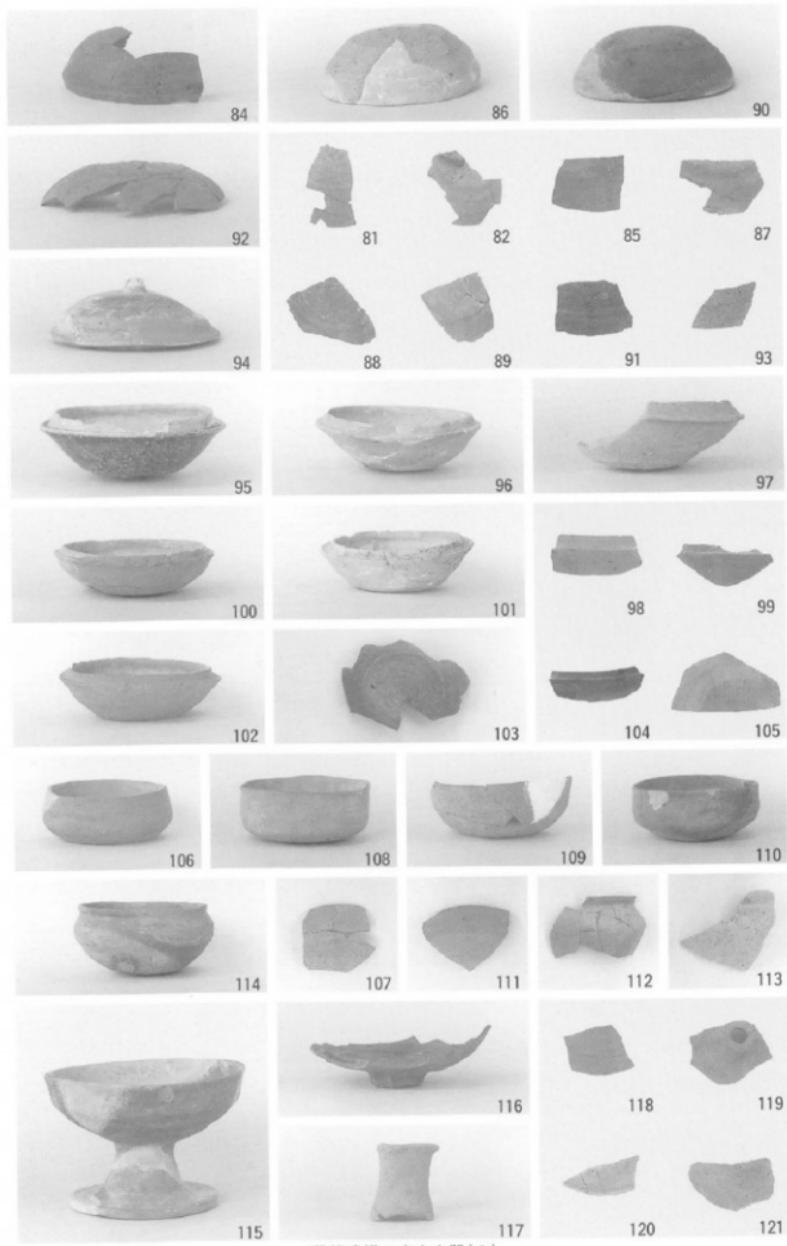
段状遺構 6 出土土器



I B区出土土器

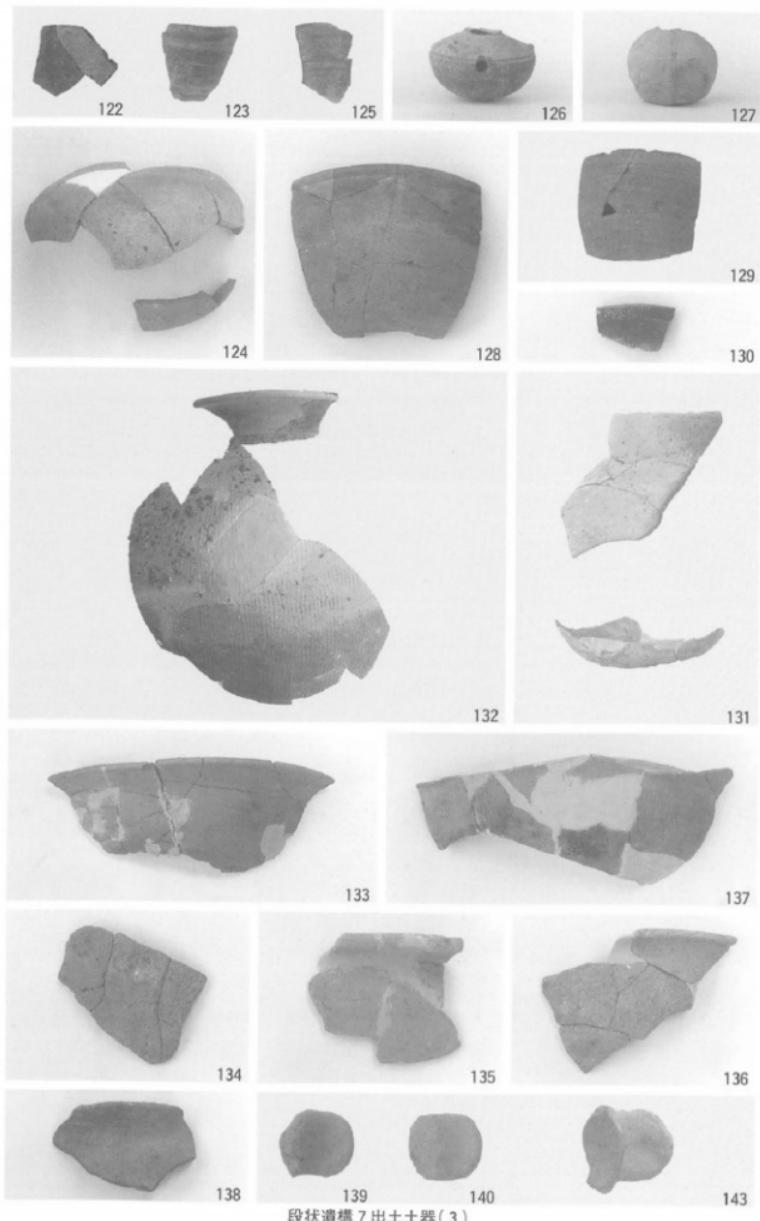


段状遺構 7 出土土器(1)

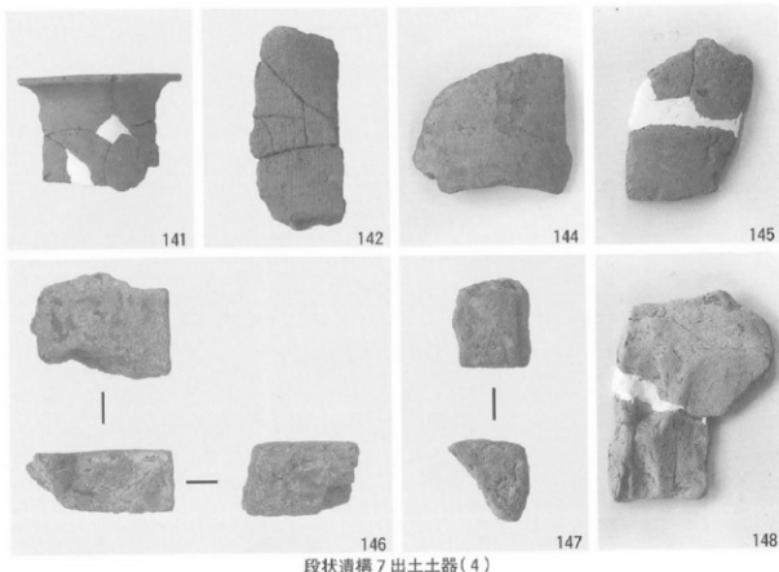


段状遺構 7 出土土器(2)

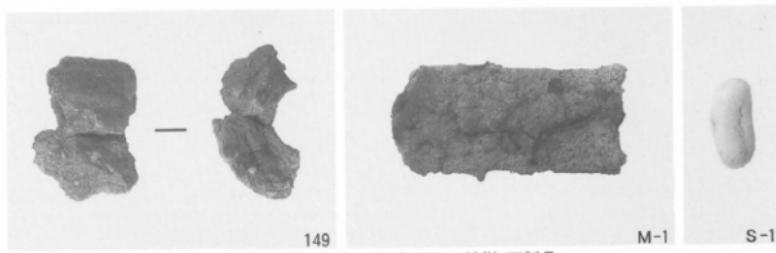
図版22



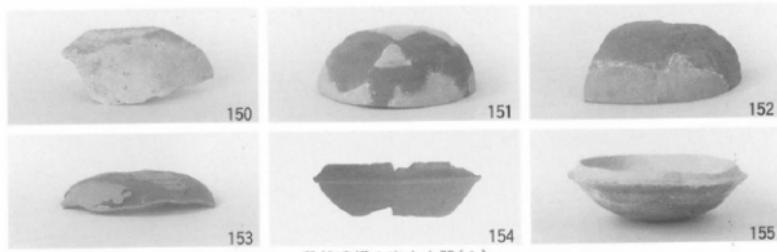
段状遺構 7 出土土器 (3)



段状遺構7出土土器(4)

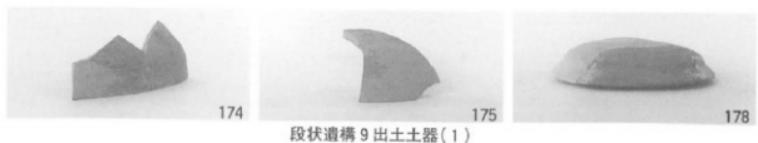
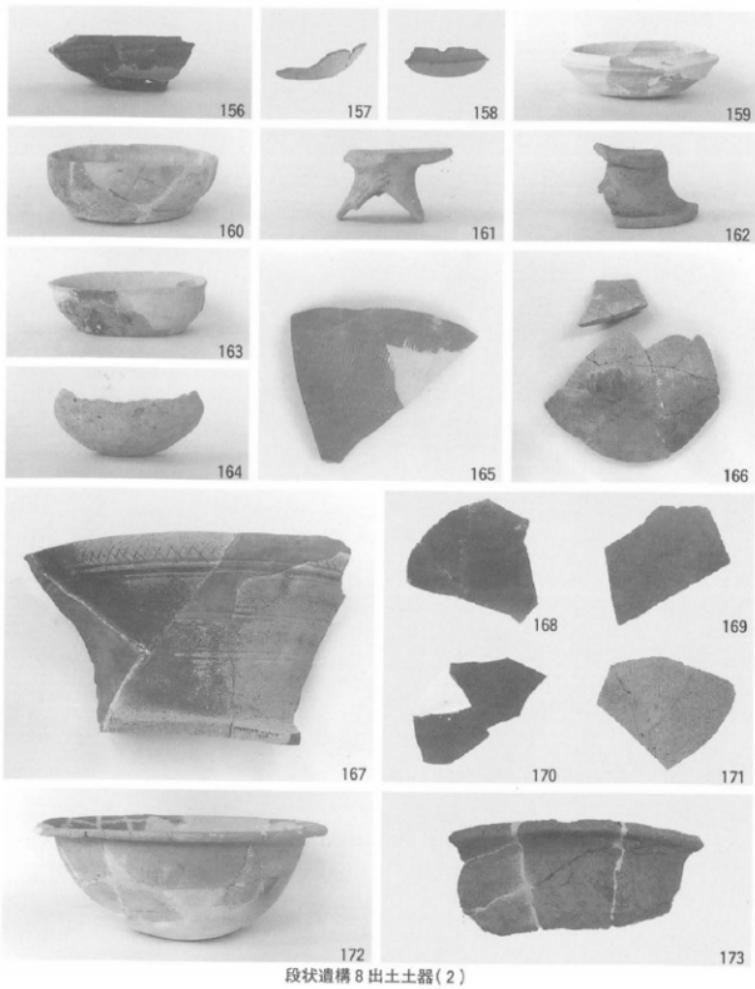


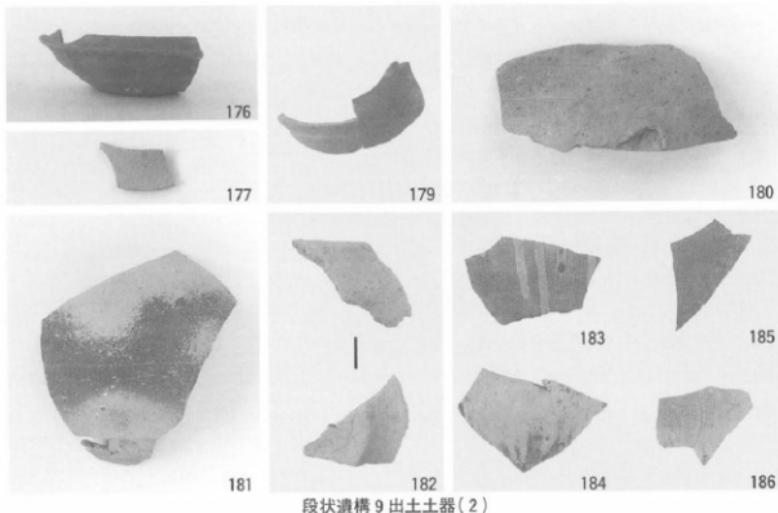
段状遺構7出土フイゴの羽口、鉄鎌、石製品



段状遺構8出土土器(1)

図版24





段状遺構9出土土器(2)



段状遺構10出土土器(1)

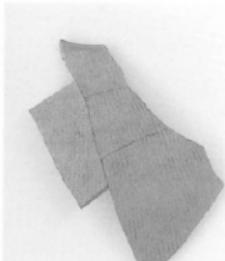
図版26



197



198



199

段状遺構10出土土器(2)



200



203



201



202

土壤9出土土器

土壤10出土土器



206



207



204



205



208



210

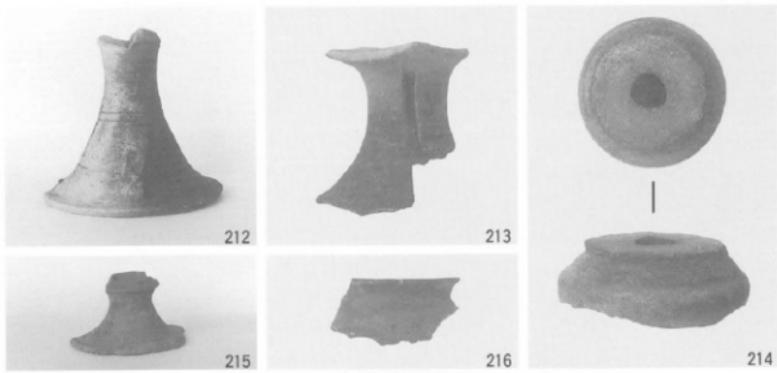


209

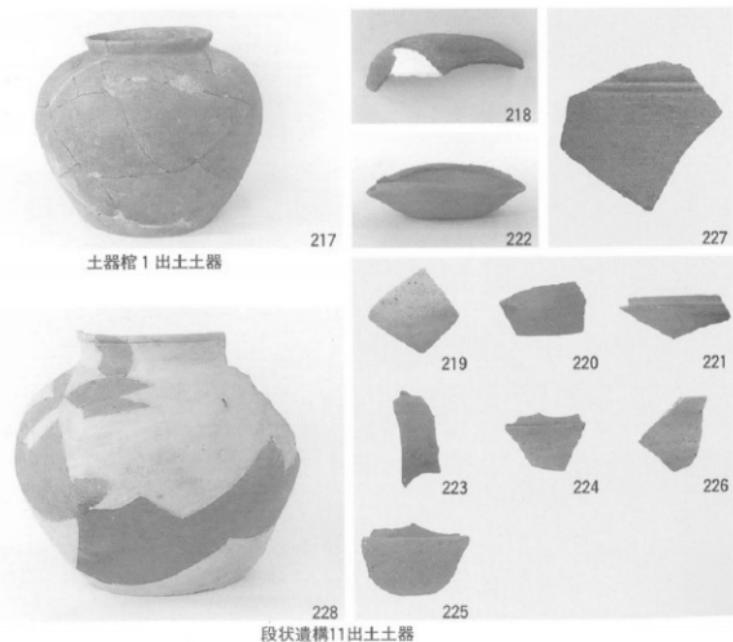


211

I C区黒ボク層出土土器

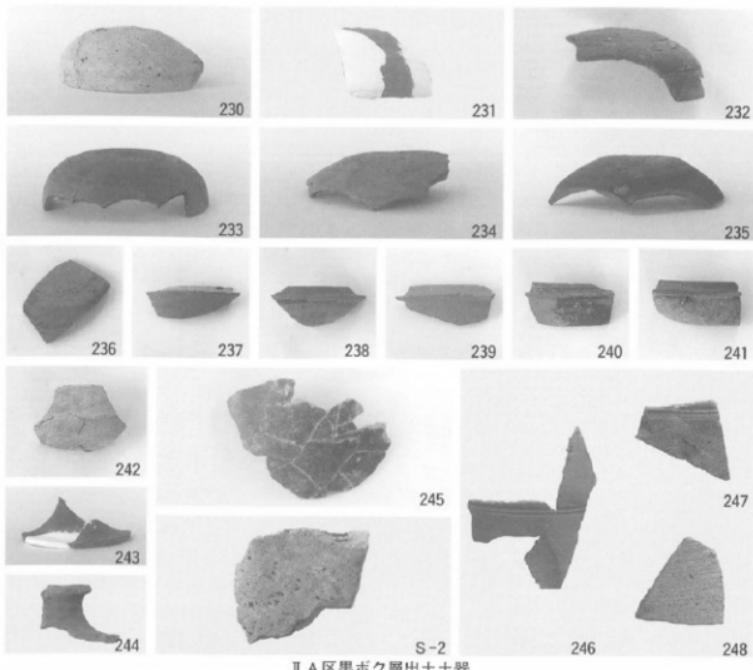


切池採集遺物

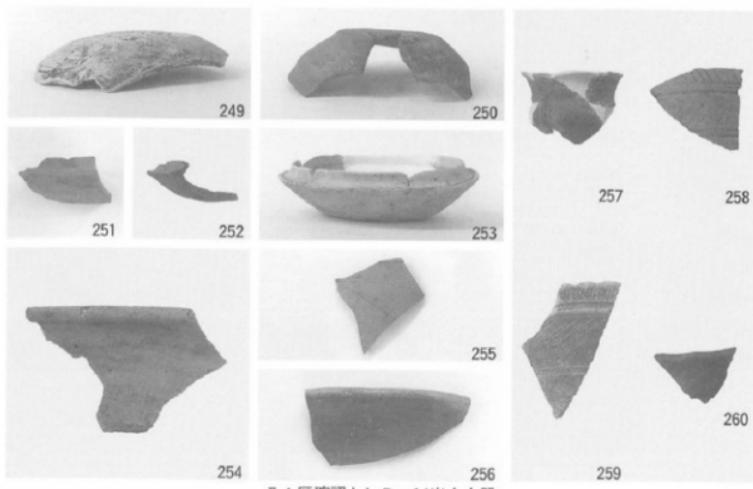


切池採集遺物

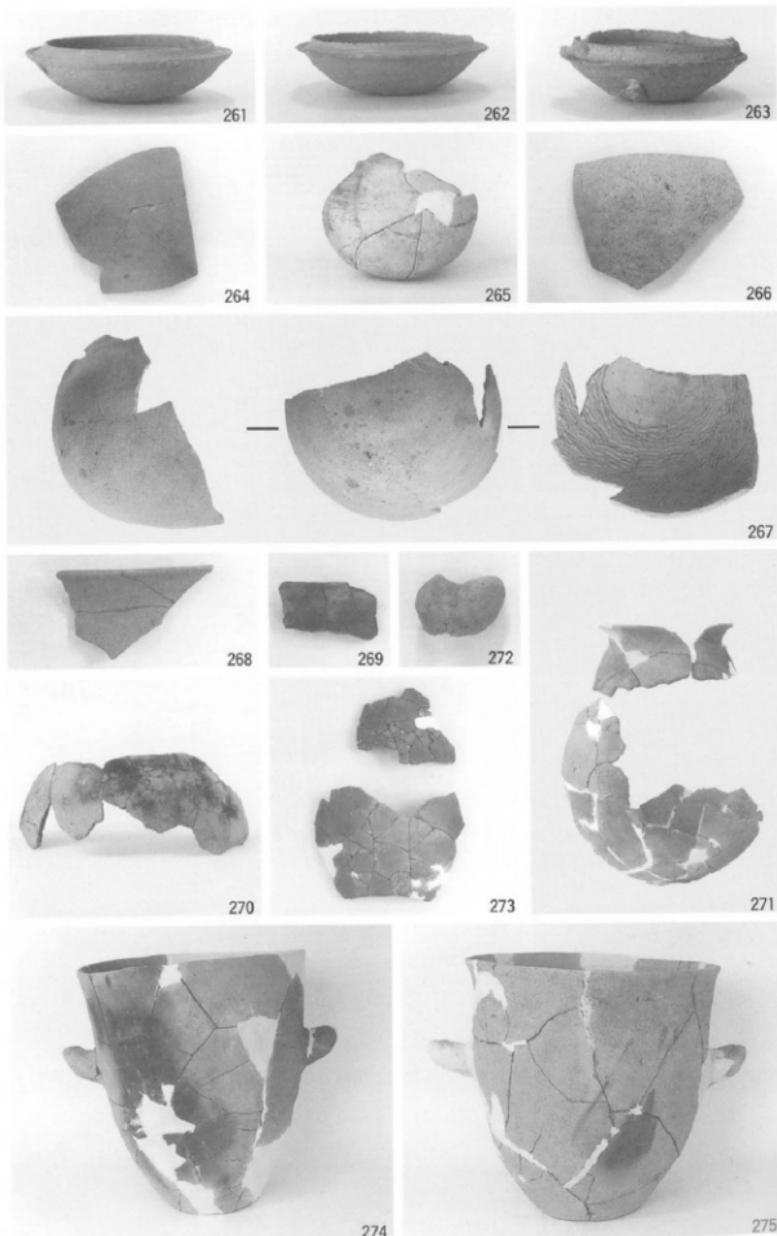
図版28



II A区黒ボク層出土土器



II A区確認トレスB・14出土土器



竪穴住居1出土土器

図版30

